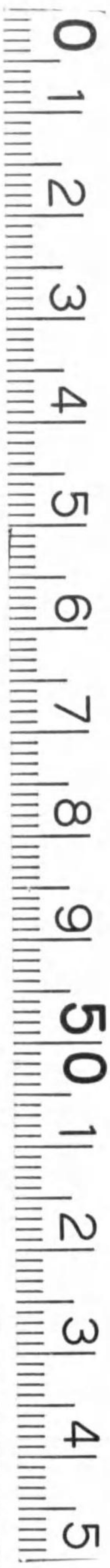


913.52 - I25-15(4) ㄣ



\*1200800307809\*

13.52  
75  
15(4)



始





91352  
1-25  
15(4)

日本古典全集刊行會板

# 日本古典全集

正宗敦夫

西鶴全集

第四

諸艶大鑑  
近代艶隱者

(改訂版)





本書再版にあたり、官廳の注意により「諸艶大鑑」中猥雑に亘る語句、及び數葉の挿繪は是を削除せり。讀者之を諒せられよ。



## 西鶴全集第四解題

一、此卷には「好色二代男カクシクニクニイヲトコ、諸艶大鑑シヨエンオホカガミ」と「扶桑フサウ、近代艶隠者キンダイエンインシヤ」とを収めた。

一、「好色二代男」は原本八巻より成り、四十章に分れてゐる。初板の奥附に「貞享元甲子年初夏、大坂奥服町眞齋橋筋角、書肆、池田屋三良右衛門板」と有るから、西鶴が四十三歳の年（西曆一六八四）の印行である。但し著作は前年に成り、此年の春から木板を起して初夏即ち四月に印行したものかも知れない。

一、「好色二代男」は、西鶴が散文文學の作家として立ち、「好色一代男」に「浮世草紙」と云ふ新體の好色小説を創つめて以來二度目の著作であるだけに、制作欲の旺盛、想像力の豊滿に於て「好色一代男」に匹敵するのみならず、結構の緊整、修辭の鍊熟に至つては優に「好色一代男」を凌駕してゐる。しかも貞享當時の世評より明治大正の鑑賞に至るまで、是れを以て遜色ありと爲す人人の有るのは、一は取扱ひたる材題が標客娼婦傳として「一代男」の範圍を出でず、彼れに粗なるものを是れに密にしたるに過ぎない感があるのと、一は「一代男」が多く遊里の豪華艶麗なる表面を描いて一般に青春の人の熱情を沸騰せしめたのに對し、是れは概して遊里の内證、傾城の裏面を暴露し、例へば「七墓參ナナハカミサリに逢へば昔の」、「袂タビに餘る心ココロ覺サト」兩章に於て遺ヤシ練リ苦クしき傾城の經濟狀態を細叙し、太夫の入帳イリヤウや遺帳ワケヤウまでを公開するなど、質實シツジツにして暗く悲哀なる記述の多い事が、何時の世にも主として文學の顧客である多數の青年讀者に受けないので、ま



た一は誰も「一代男」を讀んで後に是れに及ぶが故に、彼れ程の斬新な驚異を感じる事が出来ないのにと由るのである。編者等の如き中年者の心境には、「一代男」に見ることを得なかつた人生の深刻なる諸相を是れに讀んで、浪漫主義より寫實主義に移りつつある西鶴の進展を認め、觀察に於ても描寫に於ても、既に一時の「てんがふ書き」(戯作)に非ずして、著者の作家意識の著明なるを喜ばずにはゐられない。編者の友人の一人に、西鶴物を讀むに、偶然の機會に由り、「二代男」から初めた人がある。其友人の云ふ所に依れば、「二代男」の後に「二代男」を讀むと、妙は妙として西鶴の傑作たるを認め得るが、人間味の深さと眞實さとに於て一種の不滿の感を禁じ得なかつたと云ふ。想ふに何人も先づ初めに是れを讀んで彼れに及ぶならば、編者の友人と同様の印象を受けるであらう。即ち「一代男」の後に出でたる「二代男」は、彼れに比べる時、題材に於て二番茶の不滿は有りながらも、彼れに無き深味を加へて、公平なる批判の前には遜色の無いものである。

一、「好色二代男」は決して「好色一代男」の踏襲では無い。一たび「好色一代男」に世の好評を博した西鶴は、之が爲めに散文作家としての自信を確實にしたであらうと共に、つづいて制作欲の湃然として内に湧き上がるのを感じたであらう。加ふるに機を見るに敏き書肆は同種の好色本を著者に望んで止まなかつたであらう。斯かる内外の動機から此「好色二代男」は書かれたものと想はれるが、既に檀林の俳諧に於て然うであつた如く、筆を執れば新機軸を出さずにはゐられない性癖の西鶴は、「諸艶大鑑」と云ふ標題の

肩に「二代男」と書くことに由つて「二代男」の續編の如き外觀を示し、以て書肆と讀者の期待に應じながら、「一代男」がとにかく世之介を主人公としたとは別の趣向を立てた。二代男世傳は、「一代男」卷二の「髪切りでも捨てられぬ世」の章に、六角堂の前に捨てられた世之介の子が拾はれて富家の子と成り、色道の達人として「二代男」と稱せられるまで父に劣らぬ閱歷を重ねた者であるが、小説に於ては主人公で無く、「諸艶大鑑」と云ふ色里評判記の著者として書かれ、卷一の首章「親の顔は見ぬ初夢」と、卷八の末章「大往生は女色の臺」とだけに二代男に關する記述を見るのみである。即ち三十餘歳の今まで色道の表裏を見盡したる二代男は、正月の初夢に、女護國に住む父一代男より美面鳥を使として「色道の祕傳」一卷を授けられ、また島原の遺手の開山「古狸のくに」と云ふ老婆の口述する「諸國の諸分」を筆記すると共に、自家の閱歷より得たる知識をも加へ、其等を湊合して一書を綴つたが、卅三歳の三月十五日にめでたく色道に徹底して大往生を遂げ、その臨終には淨土の廿五菩薩の如く、吉野、三夕、小太夫、夕霧を初め故人と成つた近代の名妓が悉く菩薩に姿を變へて、何れも身より光を放ちつつ來迎した。その生前に書いた色里評判記に近年の色人(色道の諸大家)の多くが増補を加へたものが、題して「好色二代男、諸艶大鑑」であると云ふ趣向である。かうして西鶴は新しい趣向の下に相應の効果を擧げたのであるが、併し二代男が何れの巻にも姿を現はす主人公として書かれなかつた事も、「二代男」の續編を讀まうとする讀者には當時も今日も不滿を感じしめる一つの理由であらう。



一、西鶴は本書の中で、當時に有つた「内證論」、「まさり草」、「白鳥」、「遊女割竹集」、「太夫前巾著」等の色里評判記を迂濶なりと評してゐるから、「二代男」は好色小説としてのみならず、其等の諸書を凌駕する意向からも書いてゐるらしいが、我我は其等の諸書の現存するや否やをも知らない位であるから、何等の比較をも爲し得ない者である。「二代男」に書かれた娼婦は太抵實在の女の名が擧げられてゐるらしい。その事蹟も半は眞實であらう。大臣と云はれる遊客も名は替へられ若くは隠されて居ても、概ね實在の人をモデルとしたのであらう。此事は「一代男」も同様であると思はれる。

一、二代男世傳の名の傍訓が、巻一の首章には「よでん」と有り、巻八の末章には「せでん」と有る。著者は意識して二様に讀ませたか。或は「よでん」は誤であるかも知れないが、今日の活字版とちがひ、木版の誤刻は訂正する事を得なかつたのであらうか。

一、「二代男」は「一代男」と同じく、本文、題簽、奥附等の文字も、全部の挿畫も、悉く西鶴の自筆である。挿畫は「一代男」のよりも優麗に出来てゐて、本文の情味と善く一致してゐる。挿畫は發行者長嶋豊太郎君の快諾を得て全部を載せる事が出来た。

一、「二代男」の底本には京都帝國大學圖書館珍藏の初板原本を寫すことを得た。ついでに云ふ。再板の原本には、奥附の年號の下の「初夏」を削り、其下に「江戸本石町拾軒店、參河屋久兵衛板」と云ふ書肆の名が、初板に有る池田屋三郎右衛門の名の前に加つてゐる。

一、「扶桑、近代艶隠者」は原本五卷より成り、二十章に分れてゐる。印行されたのは奥附に「貞享三丙寅歳、孟春良辰」と有るから、西鶴四十五歳の年（一六八六）であるが、孟春即ち一月に賣出すには前年の内に製本されて居たであらう。

一、「近代艶隠者」は西鶴の著作中、他に類の無い別種のものである。即ち好色物、町人物、武家物、俳諧書の外に、風人隠士の傳に擬した雑話集である。著者は自序に於て、西鶴軒橋泉と云ふ諸國修行の僧が自ら見聞した所を記録したるものであると云ふ風に趣向を立ててゐる。西鶴軒橋泉は西鶴の假構人物であるが、傳せられた作中の人物は半以上實在の人をモデルとしたらしい。靈山の中の窟の中に在つて對面したと云ふ隠士達は、すべて既に故人と成つた近世の人人であり、一一名を擧げては無いが、「蟬の小川」の歌を引いて、寛文十二年に歿した石川丈山（一五八三—一六七二）を暗示してゐるから、よく調べたら或程度までモデルに成つた人人が明かにせられるかも知れない。また諸國行脚の間に逢つたと云ふ隠士達は、西鶴の當時に現存して居た人人であるらしく、當時に於ける讀書界の人が見れば、同じく一一名を擧げずとも首肯された人人であらう。之より廿三年前即ち寛文四年に僧元政（一六二三「元和九年」—一六六八「寛文八年」）の「扶桑隱逸傳」三巻が出版せられて世に行れた。西鶴は彼れに擬して是れを作り、彼れの漢文體なるに對し、國文を以て書いたのである。標題の上の「扶桑」と云ふ割書は元政の著作の行れつつある時代に世人の注意を引く爲めの工夫であらう。



一、「近代艶隠者」は決して西鶴の爲めに名譽と成るべき著作で無い。その談理は餘りに淺薄にして、頗に莊老の達觀や禪家の悟道めかしき事を説いてはゐるが、實は其等の何れにも觸れて居ない。況んや徹底をや。「徒然草」に現れたる兼好の通俗的處世觀にも遙かに及ばず、西鶴と同期の心學道話の類にも至らないものである。加ふるに文章の生硬にして、往往語を成さぬかと思はれるものさへある。是れは題材に於ても表現に於ても著者の最も不得意なる所に筆を著けたものである。從來之が爲めに偽作説をも生じた程であるが、併し西鶴の生前、殊に「一代男」、「二代男」、「西鶴諸國咄」等の出た當時に、西鶴の署名ある序文を添へて偽作を刊行する者が有らうとは考へられない。或は何等かの事情で他人の作に名を貸し序文を書いたかとも思はれるが、併し水谷不倒氏の研究に由れば、本書もまた、本文、題箋、奥附、挿畫に至るまで、悉く西鶴の自筆たる事が明白であるから、代作に對して其れだけの努力を拂はうとは考へられない。それで我我は茲に一の想像説を提出して置かう。其れは早く西鶴が「一代男」よりもずつと以前に書いて置いたものを、貞享二年に至つて書肆の望むままに印行せしめたのでは無いかと云ふ事である。斯うでも解釋しなければ、「二代男」より「二代男」、「諸國咄」に至つて、あれだけの思想の豊熟と文章の洗鍊とを示して來た著者が、遽かに後戻りして此種の勃率な文字を綴らうとは考へられないからである。若しこの想像説が許されるならば、序文に西鶴軒橋泉の名を出した事も、豫め著者自ら惡文の非難を回避する手段であつたかも知れない。我我は姑くこの想像説を支持する。前に斯かる未熟の文章を書いた時代

も有つて、其れより「二代男」の新しい妙文を創めるに至つたと解する事が自然だからである。

一、「近代艶隠者」が西鶴の著作である事は、構想の奇變に富みて布置の平衡を破れる所より、文章の突梯簡約にして錯落の状態ある所、また用語字の特殊なる習癖に至るまで、他の著作と共通して疑ふべくも無い。「二代男」を書いた人が後に是れを書かうとは考へられないが、「近代艶隠者」を前に書いた人が「一代男」を書くに至つたとは之を讀む者の容易に想ひ到る所である。但し體験を書く時には好色物に於て、町人物に於て、あれだけ精彩に満ちて、魂が入り肉も血も備はつた妙文を成す人が、是れは全く自得の無い事を外から揣摩して書いたが爲めに、空疎にして迫力の乏しい結果と成つたのである。然かも猶讀んで面白い數章の有るのは、モデルと成つた人物の行蹟にも由るであらうが、西鶴の寫實家たる一面が既に此作にも微光を投じてゐるからである。

一、「近代艶隠者」の底本としては、大坂府立圖書館愛蔵の原本に據ることを得た。此書は出版當時に於て版を重ねるだけの賣行を見なかつたらしく、従つて現存する原本が特に乏しいと云はれる。

一、「近代艶隠者」もまた本文の板下及び挿畫が悉く著者の自筆である。併し此方の挿畫は數葉だけを寫眞版として挿むに止めた。もともと「日本古典全集」は口繪や挿畫を添へる筈で無かつたのであるが、現に多くの寫眞版を初めコロタイプ版をさへ挿むに至つたのは、特に豫約以外の事を敢てしてゐるのである。

一、「二代男」、「近代艶隠者」の何れにも、例の如く適當なる漢字と傍訓とを増し、假字遣を正した。但し



「換ふる」、「變ふる」「用ふる」等の數語だけは、特に「換ゆる」、「變ゆる」、「用ゆる」と發音通りに書かれた原本の用字例を保存した。此方が内容の趣致を出だすに適切なやうに感ぜられるからである。其他奇僻な西鶴の用字例をも出来るだけ保存し、また原本の誤刻脱字と思はれる所には「シムレ」此印の中に編者等の注意を加へて置いた。

一、此集の覆刻に就て、京都帝國大學圖書館と大坂府立圖書館とが、貴重なる原本の筆寫と撮影とを許され、我々が企畫した古典の廉價本普及に多大の助成を與へられた御厚意を、茲に拜謝する。

西鶴全集第四目次

諸艶大鑑  
近代艶隠者

一  
二三三



繪入

好  
久  
三  
代  
男  
諸  
純  
火  
鑑

四  
傳  
全  
集  
附  
目  
次

諸  
純  
火  
鑑

諸  
純  
火  
鑑

三  
三  
三



諸國大鑑

好色二代男



諸國大鑑  
目録

卷一



一

親北典いんぬ初夜

一 世傳の傳より義面をばる事  
一 傳られたる御影の事  
一 重子の國が法合物代のも事

二

世紙いんぬの箱

一 世紙の箱より義面をばる事  
一 箱の中より世紙の箱をばる事  
一 箱の中より世紙の箱をばる事



三 詰り肴には戎大黒

- 一、島原棚探しの事
- 一、夜も日傘さす事
- 一、寢覺の投節命取る事

四 心を入れて釘付の枕

- 一、吉原の曙は雪より面白き事
- 一、薄雲が情は戀の外の事
- 一、都の名所着る物高橋が昔の事

五 花の色換へて江戸紫

- 一、越路の文は届かずに捨つる事
- 一、綿繰の音に吉野の櫻散る事
- 一、遣り憎い物生きながら遣る事

親の顔は見ぬ初夢

我れ化して死し、また化して生じ、母は今の都の若後家、西洞院の一つ前と、浮世の立つ名隠れ無し。父は一代男とて、子の初聲も聞かず、取揚婆の手より直ぐに、襦袢に巻きながら六角堂の門前に捨てられ、慶安四年の憂き秋、夜の霜、朝の風に傷み、限りの知るる命を、犬も不思議に喰ひ残して有りける。此所は浴中のお乳の人の集り遊び所なり。錢太誠、唐人笛の響、竹馬の鈴の音、物の騒がしき中へ、昨日までは子を抱きし姥の、空懐に成りて、涙兩袖を貫き、筒護符を持ちて、神を恨み佛に歎き、亂人と成つて、悲しや養ひ君は嵐無常を導き、花葉露に先だつて落つるを、果敢や舟岡に埋み、老木は後にと弔ふ人に語る。やうやう仲居、腰元が勇めて歸るに、門外に捨てたる子の形を見るに、空しく成り給ひし竹丸様の生寫しなれば、下に置かず乳參らせて、歎きの中に抱きて歸れば、二親思ひを晴らし、是れぞ我子の代りと育てさせて、十四歳の時雨月、定め無や、父も母も世を去り給ふに、彼の姥が後見して、今三十餘まで裏所を見ず暮しぬ。年浪の静かに、舟を敷寝の小夜更けて、飾り置かせし蓬萊山の、北の洲崎の海老の鬚に、唐織の金帯一筋懸つて、春の初風に翻ると見しは、心地の好きこと大方ならず、千鶴萬龜の祝の水波むと思へば、遙かの沖より目馴れぬ翹の飛び來つて、是れは女護國に住む美面鳥なり、御身の父世之介、稀れに彼地に渡り給ひ、女王と玉殿の御語らひ淺からず、再び歸し給はぬなり。されば親子の契深く、色道の祕傳譲り給ふ







と、一つの巻物、左の袂に投げ入るよと思へば、初夢覺めて、曙の東山霞も仄かに、物申の聲、早色里より祝儀狀詠め入り、正月買の若男、二十五日までは手生けなれば、心の行く時、長者町の次郎介駕籠を飛ばすに、何んぞや危き海上を越え、無景の女島に渡り給へり。目前の喜見城とは、吉原、島原、新町、此の三ヶの津に増す女色の有るべきや。殊更衣裳も昔の筋綴子、八端掛の八丈、大宮の左吉結の水鹿子も、今加賀絹に變れど、姿は少しも見劣らざりしは、さすが京育ち備はつての美觀は、先書に記せり。柳の九市が内證論、小堀法師がまさり草、よしなな染の宗吉が白鳥にも書くに盡きせず。其後一條の甚入道が遊女割竹集にも、推量の沙汰多し。伏見の浪人が作りし太夫前巾着と云ふ悪書も、見分ばかりにてをかしからず。或時願西の彌七、神樂の庄左、鸚鵡の吉兵衛、亂酒の與左衛門交りに、揚屋町を立破りて、出口の茶屋に腰掛けながら、朝歸りの客に讚附くるに、一人も違はず、亭主横手を拍つて、如何にも彼れは曉の材木屋殿、其次は鳥羽の米屋の手代なり、見立ての如く圍ひを買ふ男じやと大笑ひして、世間は廣し、此里へ通ふに、皆皆が見知らぬ人も有ると云ふ所へ、見たやうなる女、額には志賀の浦を疊み、頭には都の富士の雪を戴き、何時の頃か時花りし龜屋縞の着物に、端纏の有る帯右の脇に結び、置綿したる取り成り、尋常者とは見えず、さてこそ古狸のくにと云ふ遣手の開山、一切の女郎を勧め込み、賢う爲すも是れが業なり。今は千本通の末に、嘘つかぬ身過をして在りけるが、幾年か旦那殿より蓮の飯を賜はり、鏡の餅を居わる、其御禮に參ると云ふを引留め、過ぎにし事を語らすに、聞くに、ようもようも諸國の諸分覺えて、永き日の西

の岡に入るまで聞書して、世傳が二代男、近年の色人残らず是れに加筆せし。されども變名にして、露には記し難し、此道に頼る人は合點なるべし。其里其女郎に氣を着けて見給ふべし。時代前後も有るべし、紅葉見て櫻なほ棄て難し、折節の移り替る水の月の、影も形も無き事にはあらず。見及び聞傳へしは松の葉の塵なれば、祇園帯の跡までも心の奇麗なる事ばかり顯はし、由無き事は掃き棄つるものにぞ、京の粹仲間、末社、おろせの頭までも、是れは見る世の友に成らば成るべし。

誓紙は異見の種

競べ物無き富士の雪も是れはと詠めたばかりなり、吉野の花も夜までは見られず、姨捨山の月も世間に變つて毛が生へても無し。是れを思ふに、人間遊山の上盛は色里に増すこと無し。此道に身を染め、八宗見學、女色一遍上人の勧めに、女郎買はそもそより太夫に懸るが善し。子細は、又上も無き職なれば、限りを知つて留まる事早し。何國にても初對面の捨枕とて遺線のみつかし。京は初めから帯を解き、情らしき言葉も懸け、豊かに弱弱としてから、底心の強く、自然と位を取られ、近衛殿の糸櫻、中院殿の歌話、萬つ花車事で埒を明け、寶の床へ入りながら七十一匁の損して歸る。江戸は頭から寢道具も出さねば、いつそ思ひ念切れて、後生大事と禪襦を締め、祓佛の光堂へ參るが如く、難有いと想ふてばかり、尊い膚も拜ます。大坂は諸分の定め難き所ぞかし。客も諸國を引請け、酒の品より嫌と思ふ男には、早座敷の仕懸變るなり。



寢前の身拵へに、何れも立たるをも構はず、杯の納まり所を改め、座配よく見せて、隙を入るは曲者なり。勝手に起つて、衣裳着に氣を配り見るに、振らうと思ふ時は、古き肌着にも爲替へず、伽羅を焼くにも、袖口の匆匆にして、上着なるほど奇麗なる物を、打掛姿を見て、ここは禿の賢さ、云はねど合點して、寢間は相床近く取らせ、廣き所を好み、太夫に附け入り、枕の前後を離れず、燈心掲げて、其邊あらはに成し、莫吸ひ付けて煙の輪などを吹き出だし、または鼻から通はせ、てんがふの有るほど盡して後、吸口拭ふて、参りませと差出だす。何の子細も無き事を、耳雜談など爲掛け、とやかく隙入れ立退く。男口説き懸つて、首尾ならぬ中に、早御迎が参りましたと云ふ。此聲聞くと、如何なる男も急ぎ出でて、云ふ事不出來にて、言葉質を取られ、上手を盡す間に、一番太鼓を拍ち、お客立たしやりませいの聲忙しく、起きねばならぬ様子に成りぬ。また振るまいと思ふ床入には、肌着も古き白無垢に成し、髪まで香を留むる時は、禿が枕近く、置くもをかし。惣じて男、座敷では口賢く粹のやうに見えて、床には散散取亂し、大方は震ふなり。物に馴れたる奴は、一座は然も無くて、床の所作しとやかに、格別なるものなり。皆目の野暮太郎は酷うて振らず、中位なる奴は何時とても飛ばすなり。振るに二つの祕傳あり。漸う取出の男は、振られて其儘捨てず、何時までも手に入るまで人に内證は云はず逢ふものなり。人に依つて振ると面白からずと、女郎を替へて然かも後引くも多し。また口説して退いたる男に逢ふ時、右の女郎方へ、最も付届して出合へども、是れは振らねばならず。大方は宿より頼み、遣手が勤き、馴染へ戻る



ものなり。其時世間の評判も弱し。振つて日を重ね逢ふ中に、先の女郎見棄てて、此方の物に成る事あり。茲に口傳は、頭から嫌否と云はせぬ手管あり。此程は浮氣の沙汰と思ひますれば、眞實相なる御執心、嫌と思はぬ方様なれば、此身誓紙を仕るが、貴様は何と云ふ時、分別する男一人も無し。嬉しいが餘つて、つい固めの釘付、一年はこたゆる。されば無用の神降ろしをして、七枚纏の紙を費し、傾城の起證、何の用にか立つべし。勤めの中に七十五枚までは習ひ有つて書く事なり。或時伊丹の明尊と云ふ男、一切經と云ふ法師交りに、物の寂しき五月雨の折節、聞きたいと思ふ杜鵑も鳴かず、借りたい太夫はまだ來ず、女郎の迷惑がる誓紙を巧めと云ふ。常の事は可笑からず、思ふままに箇條させて、是れを相背き申さば、東西の門に御押しあれと書かすべし。其れよりきつい事あり。其方様の紙入いらひ申すを見付けられ、人知れず御託言申し候、御氣に背き申し候はば、千三百餘人の女郎に御傳へあるべし、恨みに存じ申すまじと、嘗て形も無き難題を書かすに、勤めの身の悲しさは御心に從ひ、歴歷の太夫達も書き給ふて、戀覺めて後、世の誹草と成れる。同じ遊女なればとて、同じ事には云はれず。そのかみ新屋の小太夫、平野橋の源と云ふ人、二年餘り一日も他の男には見せず、萬づ願ひのままにして取らせ、此上には何か有るべし、此人小太夫に一度も望事を云はず、或時我を思ふとの誓紙を書けと云ふ。其まま書くべき所を、是れは要らぬ事で御座ります、御心に任せ千枚にても書き申すべし。さりながら、其方様を未塵おいとしう存じ申さぬに、如斯く書き申すは皆偽りでも苦しう御座りませぬか。此二年餘、御威勢にて結構に遊ばし、誠は流れの身の外

のやうに相馴れ候へども、實は縁無きにや、其れ程には存せぬと申す。そもや云はれまじき事を天晴小太夫なればこそ、前代未聞の太夫なり。此男の身にしては腹の立つべき所を立てず、暫し工夫して、然らば惚れぬと云ふ誓紙を書けと云ふ。其れは眞實で御座る程にと書きけるを、是れも忝いと戴き、此の潔き心中を感じ、其後變らず半年も逢ふて、我が傾城狂これまでに止まるなり、また志の時は、其方に逢ふべし。名残の酒飲み交はし、袂から好いもの取り出だし、今の世の身請の成る程取らし、其他へも残る所無し。ふつと此道を止まり、また例無き事なり。太夫も當座に定紋の男着物十襲進上申し、かねて此拵へ不思議なり。さて記念には大巻物に、そもそも水揚の日より以來の有様、今月今日まで書き續け、外題に我身の上と記るし、思召し出されし折からは、是れを御讀み給はれと渡す。飽かぬ別れとは是れなるべし。老いて後子ども手代の異見にも、彼の誓紙を取だし、悪所狂にも善い程知るべし、惚れませぬと云ふ起請世に無い事なれども、是れさへ見棄て難く、心を盡し通ひぬ。況してや汝等に、今世智賢き女郎が指先破りて筆を染め、鳥の目の所は避けて、水に酒麴を交せて、裏より禁厭事して、料から先へ免るる誓紙を取りて嬉しがるこそあさましけれ。十月二十日は誓文拂ひ、唯だ商ひ大事にして、何の事も無う買うて遊ぶべし。

詰り肴に戎大黒

東山の遊び、光叔一中交りに、楊弓の會も詠め暮し、山の端逃げし酒嫌ひを引留め、長座敷に成れば、千

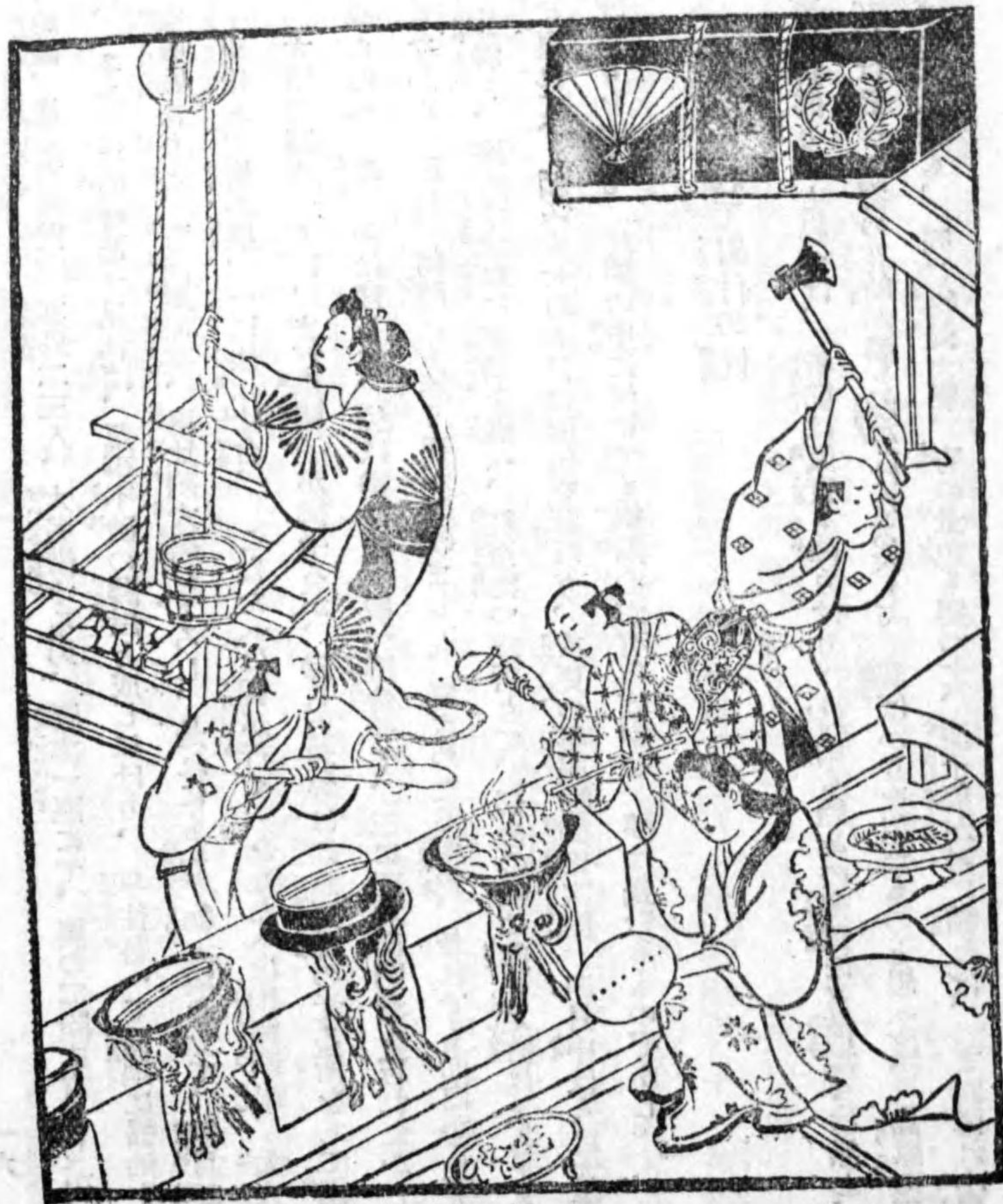


秋樂を下戸から諸ひ出して、晝の櫻を夜嵐に預けて、此の配慮さは、男振の好き役者を太鼓持にして、女郎に附けて置くに同じ。夜は何時じや、是れから直ぐに押せと云ふ。早島原の門鎖しは、何時の事と申す。鬼の島に有るとや、千里飛ぶ車もがな、目振る間行くべきものをと云ふ。とても成らぬ願ひ、若し其車が有るにしてから、飛び過ぎて、淀鳥羽の邊に落ちなば、今宵の役には立つまじ。小判一兩あれば浮雲氣無しに通ると云ふ。其れこそ易しと急ぎ行くに、揚屋町は軒の最中、二十三夜の月代も上がりて、客無しの女郎が拜うで居らるる、無用の信心なり、其れよりは成らぬ親の方へ、少しづつのお初穂を上げ給へと、知らぬ事か小川の糊屋の娘めが、今天神顔を爲をつてと、憎さげに誹る。さては日外振られたか、さも無くては然るまじと、大笑ひして扇屋の長左衛門が門に立聴すれば、此處も摺鉢の音絶えて、三文字屋の戸は細目に開いて、覗けば、半兵衛が花鱈など撞く。よもや今時分、蕎麥切では有るまじ、但し湯豆腐か。また奥の間より、手燭ともさせて、抜き掛けして、遙かに見ゆるは、暗中にても初音なり。あの美麗しき、他に誰かあるべし。然も折梅の肌着、

少しは憎し。其れより柏屋の妙安  
床机が廣う御座  
に行きて、とかく無しに思ひ思ひの床入、君どもに夢驚かし、  
と、内懷を開けて、さつと一風呂してから、此里の夜起の面白さ、早隣には弾いて投節、河内と聞えた、あれを此方の肴にと、大夫交りに臺所に出でて、萬つの有り所覺えたる太鼓女郎を案内にて、鶏卵十三、鮓二杯、其鹽鯛も剩すなど、常に持たざる眞名著あれば、あらもどかしやと、鉞振上げ、天窗を打

る。水を汲まする女郎も有り、鍋釜の下焼くも有り、膳立をする所も有り、何某は火を持つ役、我は摺小  
木請取りたり、戸棚搜しの五郎右衛門、野秋は飯を盛る筈と定めければ、終に飯じ知らぬとは、或時女院  
襟に杓子を見せ奉りしに、其れは飯盛る物よと仰せられたる事も有るに、是非に盛り習ひや、自然簞籠屋  
の女房に成らりよも知れぬ浮世と云ふ。此示しは聞き所で御座んす、如何にも盛りまじよが、誰やら二階  
から見さんすものと云ふ。其れこそ任せ、所帯の取付くろめて遣らうと、日傘を差懸けて、上からは見  
えぬぞ、下の御用心、其れ出たわ、いかい嘘の、たしなまんせ、さあ何も出来た、直れと云ふ。今に双は  
引舟、禿交りの丸寝、分けも無き姿ども、持佛堂の前へ押寄せ、まだ是れでも狭いと云ふ。少しは勘忍せ  
よ、御幸町三條に表一間口の家に七八人も住むさへ有るにと、皺面造つて申す。其れもさうよと静まれば  
又嘆き、吉が寝顔に髭を造り、たつが帯に竹箒をささせ、八兵衛に薙を着せ、片木に札書きて、年齢の頃  
は二十七ばかりの男、梅返ししの布子、下に天鷲絨の襟を懸けて、禪襦は四五年に成る幅廣の加賀、前巾着  
に質の札二枚、左の手の中に百握り、成程耳小さく、日頃腎性強く、河豚汁數寄、何處の者とも知れず、  
常常申すは、金子五十兩と衣の棚に家を一軒欲しいとの願ひ叶はず、夜前相果て、哀れなる物語に候。三  
月十五日。これから萬日の廻向しやと、藥籠を叩いて責念佛、願以此功德、これしまへと、また寢所に  
入り、明日は獨り眼の明くまで寝るぞ、忙しき鶏めに申渡せと云ふ。夜の中に歸らぬは無分別なり。さ  
る賢き人の云へり。島原の五つから晝まで、公事宿の見舞、ぶらりと居る所にてあらずと申せし。是れは







最もの傳藏、嵐三右衛門、其外二三人、大名借する男、唐土一座にて、奥の二階に有りしが、下京の若手どもが、そそりに眼覺めて見れば、萬事不破の關屋と成しにけり、早住替へて薄錦に醬油を走らかし、日本一の御吸物ありと、那波屋何某、惠比須大黒を下ろし、是れにも腥物と焼き立て、纏目離るる時、是れから杓子果報と、嵐が盛、一に俵は仕合、こなたへは榎が行く、あなたへは柗祿頭巾、太夫様へは釣竿の處、好い大臣の懸るやうに、まだ烏帽子が御坐るが、參らぬ我等は如意寶珠の光る所をして遣る。鯛の目が有るが參らぬか。疊の所は残して、袋は幸ひ袋屋殿へ盛合せて、三に三右衛門酒を忘れたかと、九つ小盃手に持ちながらの輕口、何時とも無う夜が明けまして、青ざめたる顔色、是れでも面白からず、旭の出づるまで猩猩吞と、庭の手水鉢に藥酒を漉へ、紅着物つぼ折りて、初めの程は態と足許はよろよろと謔ひしが、後は誠に亂れて、頼みもせぬ五月の節句を請取り、衣更の吳服物御望次第、四月中は人に太夫を見せなど、善い事ばかりを申す。此夢の中に何にても御無心が有らば申せ、夢は覺むるものぞかし。

心を入れて釘付の枕

此里の事は皆偽りかと思へば、折節は眞實も降りけり。時雨も始めの薄雲ほど情深きは無し、風義も吾妻育ちの女には競べて都の花崎が姿と咲分けなるべし。鴉ばかりを似たものと思へば、島原の別れも吉原のおさらばと云ふ聲も、同じ物憂き朝、宵の景色も變つて、清十郎が軒に積れば、まだ降れ小雪と、禿が棲

に請けて、獨り寝て居る澤都に天窓から掛けて、こりや何じやと思やると云へば、ぬからぬ顔して、吉野の山を雪かと思ればと、唄ひながら起きて、腹をも立てず、太鼓持の役とて、夕部は無理酒の相をさせられ、埒も明かぬ端唄を褒め、女房どもの隠す事まで人中で語らせ、世に身過ほど悲しきものは無し。斯くお氣に入りても、此年の暮に、金子二角と古袴、好う下されて一兩じや、此廣い世界に、小判の降る國は無いか、我も人も欲しがると、三味線捨てて無常を廻する時、金龍山の戀知らず、撞鐘に驚き、また此中にと立歸る客の、衣紋坂までは夢も覺めざりしが、其れを過ぎて、土手の二路も目に見え、玉水の裾に際附くも、始末心に端折り、屋敷の首尾、宿の氣遣思へば、命に代へての三野「山谷」通ひ、これに懲りて止まれと、心の駒を乗り沈め、魂に合點させて戻れど早明の日は忘れて、火に入る事をも構はぬは、太夫に懐き立てられ、羽柴の煙限りと思ひ附くを、何れを指して馬鹿とは云はれじ。鎌倉屋の何某、分限長者經にも入れ、九千貫家繼に譲りしに、色遊び盛んに成つて、跡無く遣ひ捨てしとかや、一生の思出是れなるべし。とても死んでは持つて行かず。帷子一つで濟む事なり。人間萬事は夢の見残り、唯だ緋緞子の長枕、眞實の極樂遠きにあらず。紫だちたる曙は、薄雲様の御迎ひに、御紋附の傘、角助がさし掛け、肩で風切つて、散らしぬる粧は、玉雨枝無き白梅落つと、詩人などの詠むべき所なり。角内が背中に乗り移り給ふ有様は、女來善光に負はれ、御身よりの光、今の玉虫色の御小袖、紫磨黄金の肌、胸高に開け掛け、縁ある衆生は、あの御懷に救ひ入れ給ふ。難有くも簾越に、茶屋より拜み奉り、知音の人聲を懸







くれば、泰かに見返り、健安かへ、後にへと、少し詔の有る二階を、聞く人感に堪へて、唐土の盧公が歌の聲には魚鱗も躍ると傳へし事、是れを思ふに然もあるべしと、御後姿まで見送るは、揚屋町の名残ぞかし。大門筋の辻越えて、身に中る風も冷やかに、自ら心もしめやかに成つて、可愛らしき薫、我袖の外を聴くに、正しく角内が袂より通はせ、人の心を漫ろに成しぬ。猶髪にも深く留めて、此や「さ脱カ」し言葉では云はず、身煩悶して宿に歸りて、其ま遺手の糸に尋ね給へば、角助には然も無く、太夫様負に参る時は、むくつけなる下男の、洗ひも遣らぬ鬘の匂ひ、薄雲様に聴かせましてはと、しほらしき志から、伽羅に身を成し候と申せば、太夫いとど不思議に思ひ、角助が今日着たる紺染の布子を借りて参れ由、子細は知らず借りて参れば、其れ紵け目を解けと、糸に解かせて見給ふに、垢なれぬ小白袖を、中に紵け込みありける。是れ橋は何處の太夫殿の御紋ぞと尋ね給ふ。此町にては見知らぬ由を申す。是れは確か京の高橋殿と覺ゆる。裾に嵯峨野の名所盡、其處が嵐山、是れが廣澤の月、大井川には花筏、千代の古道には御所車、野の宮に萩の枯垣、定家の亭に蔦桂、砥取山に時鳥、双の岡に若松の敷茂り、桂川に掉し捨小舟、清瀧に白玉を碎き、入日の岡と思ふ所に、雲鳥の美麗く、衣かせ山に妻鹿の有様、梅津川の柵、松の尾に佛法僧の鳥も眼に珍らしく、小倉山の八重紅葉、心あらば斯かる衣裳物數奇、繪に見る上方ゆかし。角内呼べとて、化粧部屋の人知れぬ近う召し寄せられ、其方様は何として、都の高橋様を見捨て、東の此處に賤し身を成し給ふはと有れば、まんざら左様の事は、知らぬ顔色すれども、問はれて早涙ぐみ、重

ねて物をも云はず在りける。祕し給ふな、是れはと、着物を出だして、大方ならぬ思召入と、様子を開かぬ前から、薄雲も袖行く水に沈み入り、異な心に成りぬ。角内今は包みかねて、高橋に馴れ初めし物語、此度の別れは、太夫と申し交はせし事も有るに、女房持てとは悲しく、四五度も母人にまで、嫌の斷も肯入れず、祝言取るを憂たて、二親懣らしめの爲めに身を隠し、弘法大師のまします山に入りて、墨染の形に變へる世と、眞實無き書置を残し、また高橋には生駒の籠に誘はれ、追鳥狩に二三日も見まじや顔ばせをと申せば、我身も雉子に成りたや、君が邊に捕へられて、御機嫌の好きをば見たしと、大和路までの別れさへ、遙かに見えぬ山を怨み、若し葛城の峰風も、心許なし、朝日の映りて虹立つ方を高橋が佛と思召して、此下着召さばと、手づから着せて、襟を折り込み、後ろに廻り、今此町へ通ひ男、其數を知らず、其中に野萩様の逢はんす、下立賣の清様と、方様と、御兩人に續くは無し、御目の上の腫物、小いとて其のまま置かんするが悪ると、藥穿撃する時、罷り歸ると鶴屋の傳左が、二階から下りて、門送には太夫、引舟、禿、遺手、宿の主人を先として、出口の平野屋に立寄り、例の素湯飲み捨てて立出で、頓て御歸りと、我姿の見ゆる中は、霜をも立ち窺みて、小手招きをする程に、武藏野の土に成るぞと勸揺くを、何と聞いたやら、遺手の宮が睨して、此寒空に奈良團扇の土産は嫌でござんすと云ふ。耳取つて鼻が笑ふと聞き捨てに、丹波口より鶴籠をも戻し、其れより直ぐに下りて、頼むべき島も山も案内知らねば、奉公の口の有る幸ひに、今此處にと男泣に、恥捨てての物語、薄雲も取亂し、高橋殿の身に成つて見ての悲しき、



身邊に剃刀置かねば好いが、命のほど心許なし、哀れ今日の中に都へ無事を告ぐる鳥もがなと、暫し物案じて、夜も明けば其まま京へ御上りあるべし、且那の首尾は我に任せ給へと、好きに濟まし、旅の事ども取急ぐ時、さりとは此程の物憂さは、せめては名残の酒よと、其夜は揚屋町にも行かず、戯れにはあらぬ枕を並べ、人は疑ふ夢を覺まして、一番鶏の鳴くに時數數の心付、中にも木地のさし枕を一つ渡して、此箱は道すがら、物の寂しき寢覺に開け給へと低語く。此度の忝さ、忘れたらば忘れたままに御許あれと、また涙を流す時、馬に折掛浦敷きて、乗る御人はと呼び立つる。太夫、出で行く袖を控へ、最は「うカ」別れでござるか、また眞の名は聞かし給はぬかと問へば、今は秘す所もあらず、佐渡屋の源と云ふ小男と露はして、其日は藤澤泊、翌の日は箱根の峠に旅寝して、玉笹の嵐、湖水の浪は枕に懸り、目の合はぬ夜の南表、神無月末の三日の月、戸の立合せ漏りて、せめては友とも成りぬ。斯かる時、彼のさし枕心に懸れば、暮に在所を見て置きし菜刀「二字鉈」を搜して、釘目を開けて見るに、引出し二つ、上には高橋方への書簡、封じもせず右るを讀むに、皆我等が爲め善き事を書き續け、下には道すがらの入物とて、四角にして、梧のとうの附きたるもの五十入れて、其他新板の道中記、萬つに良しと書附の有る丸薬二包、御關所の通手形まで、残る所も無り、御心を附けられ、此嬉しさ寢てもと思ふ中に、明くれば二十四日の朝曇り、此所の私雨、濡るるを厭はず急ぐに、田子の入海を蹴下し、親不知子不知と云ふ岩根高浪に身の程を思ひ遣られ、澳津川を渡りて、清見寺の鐘も暮に數聞かす時、一駄荷の馬叩き立て、町人らしき者ど

も、三人思ひも寄らぬ事に、江戸を見に行くと云ふ聲聞けば、皆手代どもなり。京での御悲歎、高野は申すに及ばず、諸國へ入差遣はされ、御尋ね遊ばし、我我は江戸へ御迎ひに參ると申す。馬から下りもせず、太夫は無事か、親仁は懲りたか、母は泣いて居らるか、其夜は此所に泊りて、荷物ほどけば、都の花車道具あまた、是れは能うこそ持つて參つたれと、其内色品見合はせ、細細と文認め、直ぐに薄雲方へ禮に入遣はし、其身は京都に上り、高橋に語れば、又是れからも思出の吉助を仕立て、吉原へ返事送りけるとなり。目出度かしく。

花の色換へて江戸紫

人の女房、家主の、せちべんなる事を思へば、年季の小草履取などは世間を廣う伴るものなるに、盆正月の仕着物、譬へば近江縞一反裁ち合はせば、風俗も見好きに、残して何の役にも立たざりし切を惜み、振袖短くして見苦し。又は小女童、故郷の垢も自然に落ちて、薬紙の前じ様と、書附の所を切抜き、平元結に拵へ、頸筋を纏攝の小刀にて剃上げ、遣ひ棄の茶袋に小糠を入れ、見るを見眞似に明暮洗ふ程に、うらがと云ふた言葉つきも直りて、御新造様からお使ひと壺口して、長文箱を差出たす手元も、今は可笑しからず。在郷より逢ひに寄られたる人、菴に酢徳利、鰯朽ちたる目黒、二十五日様のお筆、表具の仕替へ、漆杓子を取交ぜ、片荷には槓骨の障子、綿繰、半弓、割松など買物して、門口に下ろし、中戸より腰を屈



め、お鍋が父親で御坐りますと申す。鼻の前に居るをも顔見違へて歸る程に成りぬ。召役の者も美はしきこそ好きに、女氣は何國も同じ倍氣より起つて、皆無理なる猜み、何の爲めに朝起するぞ、誰が許して、尻を振つて歩行くぞ、飯鍋を磨き過ぎて、白いが氣に入らぬ、我が際墨の仕様は何所に時花るぞ、手足の指の細うなるが合點が行かぬと、責役はれて、漸う年も明けば、直ぐに昔の里へは歸らず、小宿入りをして、昨日は惠比須屋が芝居見に、今日は集錢出しの濱焼、腹ふくるるままの晝寝、夜は男狂ひ、誰とも定め難き血墮し、罪とも酷いとも、命勝負とも、後前知らずの身と成つて、奉公の口をも聞かず、主無しと思出に浮かれ歩行く風情は、下に淺草錦に、かの裏を付けて、木綿の中入、上に甲比丹の玉子色なるを引返しに、黒糸の縫紋、きやうろくの幅廣帯、こぶし絹の二布、白目班の挿櫛、淺葱緒の雪踏を鳴らし、室町通三條下る西行櫻の町は、兩側の人手代、見る目の繁く、なかなか男さへ通る事を斟酌するに、わざと此所を好み、人に氣を移させける。あれが彼のやうにも成るものかと、年切の時を知つたる人の横手拍たる程に見好げに成りぬ。されば傾城にする女は、小き時より顔の吟味、姿を檢め、大分の金銀に買取り、禿立の時より、太夫に成るべき程の者と想へば、太夫に附けて萬づの首尾を見習はせ、諸藝を教へ、良い者を良く仕立てければ、悪しかるべき事にもあらず。皆姿の花、名名木木の物數寄、松に懸藤の枝垂るるも大事無いもの、岸の山吹の色濃きも棄て難し、梅の一重なるが、しやんとしたるも見好し。よしや中古の吉野は、千本の山櫻に勝れて、強ち遊女の風俗に頼らず、譬へて見れば、柳に雪の消えもせぬ夕景色、宵

は亂酒の與左衛門、あいの又あい、大あいと申し出して、雪に深草の花鹽を交せて、これ一種の口取にして呑む程に、烏丸の鬼様と云ふお敵も、夜中過より疊まれ給ふ。一人一人前後を知らず、丸寝して分けも無し身煩悶するに、下戸の吉右衛門が、やうやう蒲團など着せて、間も無く明けて、下にまします太夫様達、身拵へも出来て、御有様も一際見好げ「に脱カ」成りぬ。皆美形なり。しばし有つて吉野は寝顔其まま其美麗さ、白粉塗るに増されると、目の好き時素法師が語りぬ。古今稀れなる女、勤め姿去つて、お上氣なる、御所風あり。唯だ一つの思ひ所は、額遠山の朧なる月を見る心地して薄薄と成るを、人毎に歎きぬ。世は思ふままならず、或時釜の座を通りしに、雨の擧句に傘を返して行くと思えし女、脇は塞げどまだ二十歳には成るまじ、横肥つて中低に、出尻にして、口廣く、何處に一つの取柄無し。されば額の生際、人形屋外記も鉤を棄つべし。是れを吉野に替へると、無理の願す程に、世上の人に思はれぬ。さて又京にも女房早にや、彼のやうなる下司役も有ると笑へば、都とても小便の仕所、塵塚の有るべし、彼れは然のみ見苦しからず、人の目に立つものは、島原の入口まで茄子畠にして、木に竹の亂れ垣、門番の與右衛門も心有れかし。或時朱雀の野を行くに、東寺の長と見えて、あらがねの土を碎く男に、中道寺の今朝の女郎の氣違は何としたと尋ねければ、我等六十九に罷り成れども、未だあの中へ行かねば、今の金太夫が美麗いも、堀の内石佛の有るも知らぬと云ふ。追附け死んだら、窟魔に問はれうが、目の前の淨土は此處じや、遠い長崎の鹿と人さへ、妻にと焦れ、千三百兩に吉野を代へて、伏見に墨染櫻、人には見せず成







りにき。難波人も春を待ちて、此松根引と思ふ間に、此花絶えて詠めの變る、藤屋の奥州仕合と成りぬ。他に吉野を戀せしは、越中の新と云ふ男、是れも請出す事を取急ぐに、雪國の難儀に、漸う二月の末に罷りて、人手に渡る後を悲み、金銀此里に蒔き散らし、涙は袖こそ記念、太夫が殘せし毛縮縮を着せ、姿人形を造らせ、名に寄せて吉野の麓、六田と云ふ所に知る人を頼み、二歳餘り浮浮と暮し、死なれぬ命今と成つて、世を渡る業とて木綿を繰り習ひ、物をも云はぬ姿を友として、笑ふ時あり、泣く時あり、所の人も聞き馴れて、後には可笑しからず。折ふし山も盛りの梢、人鷹の目には白雲と見えしも斯かる時なるべし。講參詣の道者、岩の蔭道踏み鳴らす中に、年の程二十一二と見えし女の、夕紫の小袖ばかり三つ襲ねて、帯、笠の緒、三尺帽子、草履の端緒までも、同じ色を好み、二人連れし下女も、日野紫の襦高に、後より駕籠吊らせて、物の埒を明けさうなる手代を付け、且那らしき人は法師なるが、伴れにも有らぬもてなし、彼の女の有様は、吉野に取違へ初瀬かと思ひ、大宮人を見る心地のするに、里の童の花荒らすを、其れ暫し、枝折る事は嫌よと、江戸の吉原言葉を聞くに、猶ゆかしく、仕事を休めて是れを見るに、茶、辨當を招き、湯を參るの由、銀の器物取り出だし、茶杓が無いと尋ぬるも氣の毒、近くの庵に立寄り、軒の呉竹を所望して、茶杓と云ふ物に切ると云ふ。主奥より雨竹が締めたる一節に、鹽瀬が服紗を取添へ、若し斯様の物でも御坐らぬか、御用に立つべしと押せば、斯かる所に有るべき物とも思はねば、何れも感じて、先づ腰を懸けて、居間の様子を、少し小暗き所に繪簾を懸けて、其中に美麗き梯の内儀、御免なりませいと、

申せど、返事も無し。彼れは誰方と問はれて、亭主涙を流し、包まず始めを語る。さては松葉屋の新三郎殿にてましますか、名は先達て承りしに、是れはあさましき御暮し、今は我名も隠さじ、小田原町の中と云ふ坊主なり、是れなる人は吉原の小紫、假初に申し交はして身請の後、上方見たしとの願、同じ道に今こまで、參り逢ふこそ縁なれ。我は妻子の有るものなれば、過ぎにし大坂の八木屋の市之丞も、手に入れて幾無く他へ遣はしける。今また紫も其約束にして、何方へも縁に任するなれば、其許に進ぜたし。吉野にも然のみ劣るまじき女なり。また紫も、とても世に男を持つならば、斯かる情知りをと申せば、眞實なる顔色に成つて、あなたさへ御合點にて、不便に思召し給はらば、綿をも繰り、落葉の煙に身は煤けるとも、この住居を望みと、法師様の手前をも憚らず、涙をこぼす。新三郎も此一言に萬事を忘れ、夢かと思ふ、君の有様、忝いと云ふばかりにや、吉野が形由無しと、木鐮で打碎き、今は心に懸る山も無く、思ひの雲を晴らし、喜ぶ事限り無し。とてももの事に一度、東路に下り給ひ、紫が由縁「の脱カ」者どもに逢ひ給ひて後は、御心隨せにと、早其日より紫を新三郎に渡し、年月以來の惡所斷、氣散じなる人のつきあひ、末ほど親み、住所を江戸に極めて、其後は越の音信も雁に取交はして、北國の魚問屋と成りぬ。是れを思へば干鮭も朽木に二度花を遣るとかや人の申せし。



西鶴

西鶴自署の一

好色二代男

諸艶大鑑

卷二

目錄



大盡北國落

- 一、蚊屋の中は思はく違ひの事
- 一、頼間四天王歩行路の雪の事
- 一、遊女懸物揃への事



津浪は一度の濡

- 一、九軒の騒ぎ船の事
- 一、顯れわたる宇治の佛の事
- 一、我指も儘ならぬ事

好色二代男

諸艶大鑑

卷二



三 髪は島田の車僧

- 一、戀の中宿男振の事
- 一、野邊の輕口は嘘の眞の事
- 一、物眞似の末社揃への事

四 男かこ思へば知れぬ人様

- 一、吉原正月買の事
- 一、散茶呑んだ程知る事
- 一、女の女に馴れ初むる事

五 百物語に恨が出る

- 一、家に傳はる言葉附の事
- 一、崩れ橋轆轤の事
- 一、現にも借銭は恐ろしき事

大臣北國落

忘れては春の夜や、花火の盛りを見んと、淺草川の暮を急ぎしに、九間市丸の大船、金銀の飾り浪に映つて、見るに小座敷九つ有るに付けて、名の面白し。一室には色好き男四五人、同じ枕に高雄が遺手の、千代が噂、揚屋は桐屋の市左衛門も好し、藤屋の太郎右衛門方も鼻口が良い者じやと、お町談話、其次の間に、無人島の大海老の沙汰、見て来たやうなる顔色をかし。また一室には、祝彌四郎がかりの、かはり離のつれ歌、永閑節の道行、艫の間には伊勢守が斗樽、高砂屋の白味噌、川越風の組籠、青鷲は大汗、眞名鑑は刺身と、取交せての騒ぎ、世間も恐れず、天下の町人なればこそ、一日五兩の船賃は出だせ、是れさへ奢りと詠め行くに、河武丸と云ふ船に、八疊吊の紋紗の蚊屋、乳縁緋緞子、四角の唐摺、匂ひの玉麗かせ、和國美人揃の枕屏風、高詩繪の書棚を飾り、替帷子の敷を見せ懸け、大振袖の腰元、御前様近き風俗して、茶臺の通ひ、軸簾の中には、人も大勢あると見えしが、琴三味線の音も無く、御手が鳴れば、あいあいと云ふ聲ばかりして、此奥ゆかしく、今日の見物は是れぞと、川中の遊山舟近くさし寄せし時、彼の蚊屋を疊む。内には腰の屈みし髣髴仁の、廣袖の襲着、彌右衛門立の袴に、綿帽子にて天窓を包み、目八分に見臺を直し、古文を勤學して居る。何れも興覺めて、是れは憎き仕方、何者ぞと見れば、吉原雀の早口の茂助めなり。此爲せ人は通町の高松三四郎なり。明暮自知を盡し、四年以來に七千兩行方知らず、武蔵野



の戀草に身の隠所も無く、舊離切られて行末は、北國に在る人、惡所の出合に、頼母しき言葉を殘されける、是れを頼みに旅初め、神田の筋違橋を渡りて、湯島の宮の前なる、藤の丸の膏藥屋に頼り、立ちながら硯借りて、君方への拾文して、まだ朝霜の木の葉に見ゆる、森川宿吹上を過ぎて、追分に差懸り、若しも呼返しに人や來ると詠むる後は、其事無くて、科無き一門を恨み、罪無き繼母をつらく、今は涙に群内編の襟を浸し、やうやう日本橋より二里、板橋の宿なると、年頃目を懸けし天晴傳兵衛、宵寝の治兵衛、猪首の小衛門、早口茂助、是等は三四郎が太鼓四天王とて、色里色町の詰開き、一度も不覺を取らず、當世男にして、娼の好くべき風俗なり。此度の首尾、せめては見送り申さずはと、四人心を一筋に、後を慕ひて追ひ付く。三四郎が見て、是れまでの志こそ嬉しけれ、さて昨日の太夫が振つての跡は、何としたと尋ね給へば、御身の難儀は苦にし給はず、何ぞや人の事をと、御異見申す。日頃は聞かぬ氣なれども、是れは許せと世に連れての御有様も痛はしさに、戻駕籠借りて、是れより末は玉鉾の、足許も塵埃に埋めば、是れに召せと申せば、方方が心底千喜萬樂是れなれども、乗るべき所にあらず、同じ歩行路と仰せける。四人涙を流し、斯かる分知りの大臣を、思へば口惜しき勘當やと、年頃貰ふたる物を、思ひ出だしてぞ歎きける。さて新造の旅なれば路銀は有るか互に巾着紙入搜せば、五人の中に金子一兩三步、銀が九匁、錢二百、昔は田町の露にも然て、今大切な銀なれば、随分始末の夜を籠めて、日數重なる山を越え、橋の浮舟際の際、松の葉末を走り行く、印の竿は降埋む、雪に降ある里間へば、福井の町に棟高き、小林仁兵衛殿に尋ね

着き、門家造の内を見れば、此霜月が髪置頃の兒を、小女が抱きて、山茶花の一枝を持たせても泣き休まず、母様へ連れて行きをれと云ふ。今日は佛に成つて戻らしやると申す。三四郎立寄り、是れの主様はと聞けば、奥様の墓參ましますと、啣ち顔にて申す。中陰と見えて、庭には四十九日の餅搗く音、揚麩の薫、荒和布刻むなど、世の中の無常、時しも参り合ふこそ悲しけれ。他に一夜も明かす方も無し、亭主の下向を待つべしと、軒の玉水袖に除けて、雪に繪などを書きて佇む。時に主は愁に沈みて歸り、三四郎を見しより、此度の御越心得難し、定めて彼里罷む事無く、親達の御氣を背き給ふと見受たり。御心易かれ、先づ此方へと有る時、斯かる折からと申せば、人間生死は遁れ難し、少しも悔む事無し、さぞ此度の御難儀思ひ遣られて候、殊更に各は頼母しき事どもやと、其夜は焼火して、旅の憂さを忘れ、明くれば十月廿一日、勝手にも笑ひ睨して、亭主も精進あげて、月代を剃り、座敷に出で、寔に此所は邊陲と申す雪國にて、春ならでは山の形も見る事無し、何をか響應の便りも無く、せめては今日の徒然に、家に久しき懸物あり、親類にも見せ申さず候へども、是れを御慰みにと内臈に入りて、梨子地の箱より取出だし、八幅揃つて見えにける。心も言葉も及ばれず、何れも近う拜し申せと、大臣も四天王も、詠めに飽かぬ有様は、皆皆太夫の姿繪に、銘銘書とぞ見えにける。とても御事に此君達の昔をば御物語遊ばせと、只管所望ありければ、何がさて此上は有りし様子を語るべし。先づ一番に立姿は都の三夕、格別世界の道中なり。内八文字に鑑取前、胸開け掛けて時ならぬ、雪かと思見る人若やぎて、女仙の洞とぞ思はるる。二番は江戸の勝山が、一







風變る男髪、逢初枕つれなくも、二十五まで振られて憎からず、後は手に入る親しみの、血文は消えず今更  
 に、三番は難波江の、藻に埋もれぬ螺の貝の紋所は、越中が心の盛りなり。見る人浦に山成して、俄か  
 に道橋其名を掛ける、我が渡りしは初秋の、しかも七日の初床に 朝を待たぬ別を惜み、東の門まで送られ  
 しが、誰れ忍ぶやら袖笠の、降るは涙を寫したり。四番は是れも大坂に、深き契を人知らず、神ぞ知らん入  
 幡と云へる忍草、亂れ心に成る時は、其身は我れに任せ、勤めと云ふも今一年、他へは首尾の帯解かじと、  
 男結と云へる證文も、忘れて忘れぬ 佛なり。五番は寝もせで待つ宵の、山時鳥談に鳴く、袖の橋かをる  
 とは、昔の太夫の有様を、今見るやうに筆に染むる。此女にも身の上を包むまじとの固め、疑草「と脱力」  
 申す大事の物を書かせたり。さて六番に書地の扇に、歌一首、逢はぬ戀の心ぞかし。一生の物思ひ、此太夫  
 ばかりなり。名は云はずとも合點なるべし。せめては記念に是れを見る事ぞ。今は鎌倉に居る由も由無や。  
 七番に懸けたるは長崎の花鳥なり。變つて風月の異な所、奴三笠を生更へて、また顯はるるかと思はれて、  
 飽かぬは袖に留伽羅の、煙に紅葉折りくべて、世に面白き酒の煙、其盃は珊瑚珠の、光も今に國土産。入  
 番は新町の夕霧が女郎盛りも死前の、風俗繪師も留めかねて、古今類無き遊女なり。是れにも讚を望みし  
 に、一つ有る命を進ずるより外はとばかり書き残し、其身は眞の夢と成る。げにげに夢にて候へば、必ず  
 惡所狂を廢め給ふな、假へ親仁は見捨つるとも、今一度天神を買ひ給ふ御身體には、それがし取立て申すべ  
 し。さて我等も勘當せられ、丹後に罷り在りし時、國許より親が相果て申すと、呼びにおこせしも、斯様の

雲の夕暮なれば、各吉例に任せ、今宵は一しほ勇み給へと、頓て酒宴を始めける。

津浪は一度の濡

寢耳に水とは過ぎにし八月二十三日の夜半、如何なる風の吹くや、須磨の高浪打重りて、難波江の漂着も見  
 えず、さし入る汐の新町、越後町の、熊野屋が門まで音無川と成りぬ。翌の日は少しの干瀉と成つて藻屑  
 の下のさざれ貝の、浦珍らかに女郎は、藤屋のあづまからげに淺棧の濡るるを厭はず、手づから玉拾ふ業し  
 て、飯事の昔を今に、はじきと云ふなどして遊びぬ。阿波座の明石屋の辻まで、人鷹の海の如く成りて、  
 漕ぎ行く棚無し船に、揚屋への通ひ、九軒は殊に湊屋の西より、沖乗る心地して、住吉屋に浮かれ寄りて、  
 小萬に水の見舞を申して、奥を詠むれば、お琴は首筋あちらへ成して、大橋は轉寝、長谷川は目付紋合はし  
 て、客はまだ來ず、何がな爲てと見えし時、格子に出づれば、如何なる者か手馴れし鏡臺一つ流れ寄るを、  
 引出し、ゆかしく見るに、はやら箱に、玉蟲、盆前の書出しども、お八が臍の尾、子の十二月二十六日の、  
 朝飯時にと記るして、鰻ろに包み置き、さても開がしき中に生れた事よ、此娘めは年弱ぢや、娼達是れにあ  
 やかりて、一人づつはと大笑ひして、其日も暮方に成れば、揚屋の門前に篝火焼きて、さながら蟹の鹽屋  
 の小藤を載せて、神主らしき人も共に浮かれて、舟こそ笹の一夜と歌ふ。東の方、妻川、葛城、夜の契を、  
 浪の額枕もをかして。男は棹さして、井筒屋の軒端に寄する。更け行く月の影を水に映して見る事は、また







何時の世に有るべしと、俄かに騒ぎ舟、女郎交りの枕踊、四竹の拍子に合はせて、其頃の時花唄、唐人の戀するは、きつくりきつちやななどと、分も無き事のみ。また小舟に女郎一人、菅笠着せて顔は見えず、鞆間の伊右衛門が騒して、人買船よとどやく。其れは賣物に極まつた女と云へば白けてぞ歸りける。其後此里の若き者ども、比丘尼船の仕出し、山伏舟、しらす海老賣る眞似、其ま三軒屋、川口屋の格子に差寄せ、酒事にして、山市の晴嵐、西湖の萬景、此一景に増らんや、目の見えぬ井八は不便と詠め行くに、西横町の片蔭に、繋ぎ捨てたる舟に人音もせず、小暗き艫の間を透かして見れば、黒き小袖の下臥、

是れは「と脱力」穿鑿する時、茶筌髪あまざらげの男、聲を震はして、戀は互なれば見許し給へと云ふ。さては主ある女を宇治川へ連れし古も思出だされて、世に無き事にもあらず、どさくさ紛れに、よい事と云ひ捨てて、船もさし戻さず時、宿の男、太夫様が見えぬと、浪を蹴立て尋ぬる有様は、武文が松浦を追懸くるに變らず、彼舟を捕へ、あらけなく、吟味する時、隠男を綱楫つなづかの後ろに包み、さばき髪に成つて、美麗き顔を變へて、人を惑する事あつて、此姿にして船に乗りしに、是れまで流れ過ぎぬ、其裸身は我故の寒さも然ぞと、上なる御着物を賜はれば、忽ち機嫌を直して、舟引戻すも晩し。是れへと肩車かたぐるまに乗せて、首尾好く揚屋に入らせ給ふ。手管も斯かる賢き人と有りたきものと、見る人の羨む。其名は涙もろき、衣ほすてふ天のと讀みし泊なり。此太夫は人の焦るる事今なればなり。其夜の客しばし女郎の見えぬ事を疑はしく思へど、斯道の粹なれば常に變らず、物の見合はせる中に、京屋の門より禿呼出だして當座書の立て文、淺葱

縮緬ちぢみの服紗包さほう潜かに送る。太夫開けて見るに、また今切つて温もりの冷めぬ小指、先程の御情忘れも遣らず、斯く志を知らず、猶行末とても變らせ給ふなど、そめそめの筆の跡、中程より襷たすき捨て、戸外に走り出で、其男を呼び懸け、そなた物識らずなり、年月戀ひ侘び痴れて逢はれぬ身なれば、夢ばかりの情と有るを見棄て難く、わりなき所を忍び、假にも枕を交はし、逢ひ初めての限り、思ひ切られよと云へば、此上には浮世に望み無しと云はれし言葉の下から、あさましき仕懸なりと、彼の指行く水に掻遣り棄てて内に入り、客へ一通の斷り、萬事許し給はれ、抑も傾城の身は貧しき親の爲めに、遍く主取をする事、親方も金銀に替へて、世を渡る業は何れも同じ。其れに疎略をして、勤めを缺く事勿體無し、況して人様は心を慰める爲めとて、然り難き日を此處に暮し給ふに、其氣は背き、男振などにて戀を求むる事無し。去にし年半太夫様に、秋田彦三郎が指切つて參らせしは、人の知らぬ仔細も有るに、太夫を戀知らずとも沙汰するぞかし。是れを思ふに、控ゆれば一分弱し、募れば身も捨つる程の事あり。此善い加減を教へて賜はれと、身任せば、大臣を初め一座至極して、今の世の御太夫、諸事餘るはと、横手を拍つ。其中に物事念を入るる男ありける。序ながら太夫殿へ尋ねます。見ますれば貴様にも小指切つて御座るが、其れは一人として御切り候事か、又は談合の上かと、今まで人の氣の附かぬ事問へば、人に相談してから、我身の痛さが止むては無しとの返事。いよいよ合點が參らぬ、間夫をさへ塞く親方が、よもや身に疵の附くを知らぬ顔は「はノ誤刻」爲まじと云ふ。太夫も呆れて重ねて詞も無し。是非聞かねば措かぬ奴なり。此座に年長けし團ひ



の女郎ありしが、各様に何祕すべし、如何にも我儘には切られず、好き男口説して通るる時、誓紙は品を變へ、爪も前かどに離すれば、此度無念ながら指なり。前の段段親方へ斷り申せば、姉女郎交りに、切つての後見捨つる男の吟味をして、初對面以來の勤狀を引合はせ、若しも手管の男かと、前の一座の詮議強く、此後の益、高島屋の參會の女郎はと、他の家まで問ひに遣はし、偽り無ければ、此男に返かれては俄かに淋しく成るべしと、やうやう定めて切る事と云ふ。然も有るべし、さては指とても嬉しからず、あまたの人に知らせて、何か樂みなるべし、上分別は深く成らぬしこしなしと云ふ。其れでは來ぬこそ増しなれ、内の女房どもに嫁入小袖を着せて、腰に萬づの鍵どもを提げさせず、米薪の事を云ひ止まして、錢とは何の事ぢやなどと、愚かな顔をさせ、蕘呑む時小指を反らし、酒の覆しやうを早く、空寝入を仕覺えさせ、無心云ふ時の狀を長く、泣きたい時に涙を溢すと、新しい嘘つくと、是れで別に變ることも無いと、笑ひ立ちにして、ああ幻の世界、片時も此處を忘れな、今にも知れぬは命、昨日の水を末期に、了溪和尚も夢なれや。

髪は島田の車僧

館薬師通、御幸町の邊に、門に細簾を懸けて、狭き所を善く住み成して、鼻口も然のみ手荒き事をするとも見えす、茶釜廻り清らに、階の子上がれば内二階に、衣裳箆笥あまた並べ有りける。爰に伴ひし人に享幸

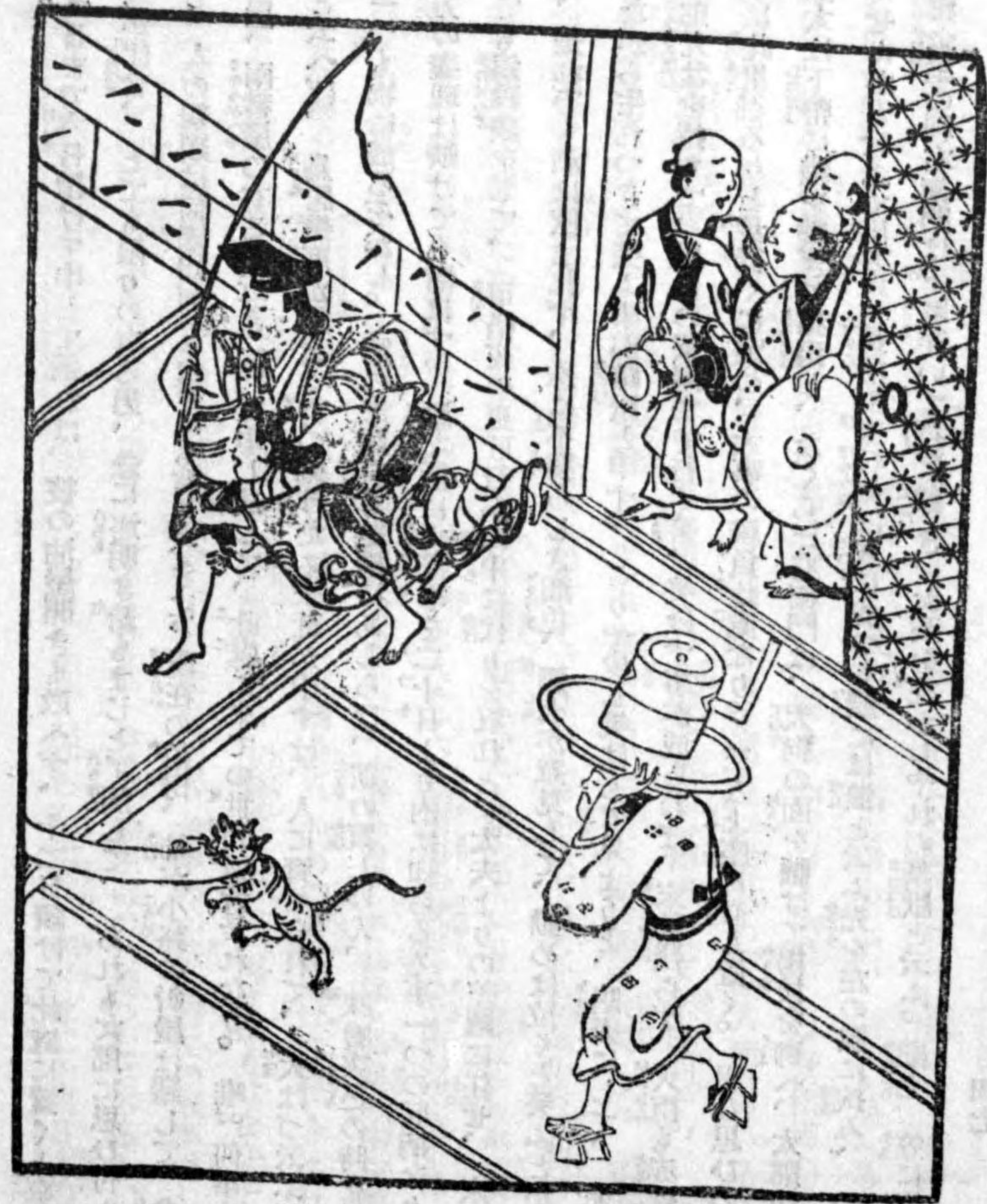
は何者と聞けば、島原への御せ早雲孫兵衛と語りも敢へぬ所へ、油屋の手代めきて二十四五なる男、布地の柿染に、細帯をして、花色の木綿褌襦見え透きて、懷には塵紙さへ幽かに、天窓つきは髪結次第に、其律義と後生大事と構へて、錢一文あたに遣ひ相には見えぬに、人は知れぬものぞかし、内儀に向つて、太夫が今朝おこしたる狀はと云ふ。封じ目に印判あつて、七月二十三日午の上刻と書き付けしを切り破りて、ろくに讀みもせず、こりや逢ふての詰め開き、今から行くぞと、汚れたる手を洗ふ間に、越後縮の帷子に、生平の羽織、飛紗綾の下帯、替草履まで氣付けて、有りし姿は忽ちに本大臣と成つて、疊より直ぐに三枚肩に乗るれば、立髪の小者、櫻紅縞の風呂敷包に、竹の槍杖を持ち添へ、後より續きて駆け出だす。さても都の自由さ、駕籠一挺三匁五分、雇男一匁二分、文の使五分、當座拂に萬つ斯様の分ぞかし。諸事卸せが肝入れば、五節句に一角つつ、此外盆前に晒半疋と、大晦日前に米の一俵も手を能く取らせて善し。其上に家賃などの無心は、嫌な顔しても苦しからず。今の男は三五の二十五、追附け合はぬ算用、請人厄介と、人を笑ふ我身も我物を盗みて、内の首尾は無い事で固め、女房どもに順志を燃やさせ、縁者の交はり疎く、隠居の見舞も忘れ、明暮分けも無き事とは思ひながら、今日ばかりはと忍び駕籠、松原通を急がせ、因幡堂の前にて必ず肩換ゆる間も前ちて行くに、新町通の邊に、昔から染手拭屋あり、その娘が五歳ばかりの時から、鼻筋差通つて、二皮眼の形美麗しく、伊勢土産の笛を吹きて門に遊びしを、あの兒はと思ひしに、今見れば其姿は無くて、髪頭もをかしう成るものかな、車の早緒と云ふ物を襪に懸けて、中抜の大根揃へ



る片手に、二歳ばかりの兒の鼻垂れて、天窓の辻曲うで、まだ泣きたいと云ふやつを賺して、小便やつて居る。彼れを思へば年久しう此道を通ふ事よ、大方大宮の溝蓋の石を踏み滅らして、羽衣と云へる圍ひに逢ひ初めし時は、内から揚鏡もりんと掛けて、其日拂ひにして歸り、四日も胸騒ぎして其銀惜しかりしに、今の奢に較べて其時の心を忘れ、浮浮と行けば、丹波口より見え渡る二町許りの野邊の面白さ、是れから出口の門までに、成程短い嘘を、幾つ吐かるるぞと有れば、小賢き頼間心得ましたと木綿四手の、夜前は鬼と一所に蕎麥切喰ふて、其れより達磨の雪隠へ行きて、紙燭の消えぬ間に愛宕焼と火渡して、其後で頼朝殿の月代剃つて遣つて、明日は盆じやと宵から門松立てて、急がしき中に、さる女郎様から着卸の袴、肩衣下さる、其外内證は仕舞ふたかと、金子二十兩、能登鱒十刺貫ふたと語る。こりや鱒ばかりが眞であらうと、笑へば笑ふて、随分早口に無い事二十七云ふ間に門に入りて、揚屋町の北口より南の門までは、太夫ぬめり道中百九十六足の所なり。此間にて小煎餅四枚喰はれぬ云ふ者あり。それはと神樂の庄左衛門、兩の手に持ちて喰ひ懸る時、女郎動揺作つて、可笑しさも今一枚残るを、門の鎖貫に上げて置く。これも一興過ぎて、丸屋七左衛門が店にて、呑懸け引懸け、硝子與平次が、下調子の小唄、男ばかりはをかしからず、太夫貫へと云へば、今日のお客はまだ深き御馴染に有らねば成らぬ内、遣手めが差心得ての返事憎し。其客はと穿鑿する時、東側の中程から、最前の男ちらりと見ゆる。さては油屋様のお逢ひなさると、少し急ぎ心に成れども、是れを口説すれば太夫が引ける、何者ぢややら知らぬが佛。明日は二十四日六地藏なれ

ば、二十九日まで六日續けて申して遣れば、彼の油屋聞きも敢へず、十二日續けて此處に置くと募る。とかくは太夫が仕合、とても限りの有る男、急に埒明き給もまじと了敵して、あれも女郎に思ひ付かせたき仕懸ぞかし。人の親類は何國如何なる者にも有るべきに、現在の伯母、姉が小路の針屋は隠して、念佛講影間に、酒屋、兩替屋の有るを近き一門に申し成して、此處に來ての世間氣皆是れなり。唯だ何事もすくばけが善しと云へば、鳥居幾度か越えて背の剝けたる末社が申すは、人に育てられて、大はづ云ふ程のお敵は、十に一つも物に成るぞかし。宿の夫婦をも結構にあしらひ、薪の買しゆん、味噌突込の時を沙汰する人は、大方の義理は缺けても構はず、厭な所に大節季を二十日より内に知らるる事一つの取柄なり。世は何に付けても銀詮議をして、可惜夜の更け行かぬ中に代りを取れと、太夫よりの差圖に任せ、末の女郎三人取寄せ、是れでも酒は飲まれず、殊に不勝らしき顔色、彌七が意見して、勤めは泣くと笑ふとが第一と云ふ。三人ながら生れつきて笑ふ事が嫌厭と申す。こりや少し笑はして見ようと、賭盡にして、笑ふたれば三人の女郎丸盆を持ちて、出口の茶屋まで行く等、笑はず事が成らねば、末社残らず、大臣も赤裸裸に成つて、日中に此里ぐるりと歩行くに定め、大事の勝負此處なり。三人上座に直し置く。思ひ思ひの仕出し、廣がり源太は下帯に猫を繋ぎて猿廻し、なぐら三右衛門は、天狗の面を懸けて楊枝を脚へ、太郎坊様はまだ見えさんせんかと云ふて出る。長柄の次兵衛は我に成つて鯛には浪と云ふ禿を左の脇に挟み、釣つた所と喚く。雁金屋の利右衛門は下駄穿いて春を戴き、お茶を挽かしやれぬ禁厭と云ふ。勘七、笠に書付をして







抜け参詣の眞似、此他の幫間鼓を鳴らし、一時餘りも騒げど、さりとは可笑しからず。女郎は三人心を合せ、身上がりの悲しさ、淋しき時の親方の顔色思ひ出して居れば、笑ひは爲いで涙ぐむこそ不思議なれ。京中の可笑仲間集り、可笑しがらぬのは口惜し。負に極めて何れも裸に成る時、三人口を揃へて、笑はんにしても見さんせいと云ふ。其時待ち給へと、彌七分別して、小石を紙に包み袖に入れて、耳近く寄りて低語くは、九月の節句も遠いやうだから今の事じや、後も先も爲手が有るぞ、先づ是れで忙しう云ふ拂を爲やれと、一包投げ出だせば、葵爾と異な事にて笑ひぬ。

男かこ思へば知れぬ人様

三浦の隠居、新町の和泉に着きし。新造出でて、伊勢屋の久左衛門は蒸籠山を成し、庭には金銀の鳥臺、巻樽、箱肴、衣裳の色襲ね、古の衣掛山を此處に移す。都には有りて無き事なり。幫間は善左衛門、ちんば新介など勇みを爲し、酒宴半ばに、下谷筋の然る屋敷方より、大杉重に五色の網を懸けて、今日の祝儀とて送られしに、見た所の草盡、野邊の秋風に薄も萩も、宛然靡き合へる、蓋を開ければ切箔に埋もりし鶉立ち騒ぎて、己が模様には、是れぞはつとしたる慰みなり。暫し詠めて後、情らしき太夫、籠鳥の雲を戀ふも、我身の曲輪住居も、思ひ同しと、南の障子を明け給へば、物云はぬばかり悦びて駈走り、江戸なればこそ斯かる事もぞ、今朝より遣手の種が承りて、使の者に祝儀とて、物を取らする心覺えの書付を見るに、五

十兩替へし一步の残り少なく成りぬ。是れ皆姉女郎の世話ぞかし。折節會津の客、小船町の宿を連れて、此里初めてなれば、萬事善きにと云ふ。大方定まり有り、亭主に銀三枚、内儀に二枚、惣内へ二枚、若い者に二角、遣手に二枚、入口の茶屋に二歩、泥町の編笠茶屋に一步、銀九枚と一兩二歩、是れ中位の附屈なり。揚錢、太夫を晝夜七十四匁、格子は五十二匁なり。是れは上方にて天神と云ふなるべし。晝ばかり二十六匁なり。さて正月をする時の様子はと聞けば、太夫様への遣ひ金、先づ十五兩、他に小袖一襲、禿に小袖代金子三兩、遣手に銀二枚、是れは年の暮に取らせ、春は小判一兩取らすなり。轡へ金子十兩、内へ同じく五兩、勤日大晦日より十五日まで、十七日、八日、二十日、二十五日、二十八日まで、正月買の役なり。右は六十目小判に直し、六十二兩一步にては、諸事仕舞はると云ふ。傍から思ふた程の物入りにもあらず。面白きは初買なり。是れが成らずば、それぞれ爰にも散茶と云ふは、振らぬと申す心なり。近年の仕出し、二丁目の玉屋、兵庫屋、大津屋を是れから見れば、揚女郎にも然のみ劣らぬ姿を、一軒に五人十人づつも見せ掛け、大方は唄うたふて弾かざるは無し。書物見るも優し。菊の一枝に詠め入るも心ありげに想はる。或は手相撲、又は何個呼ぶも有り、火渡し、糸取り、淨土双六、心に罪無く浮かれ遊ぶを、目數奇に、どれにても一步に定めて、たとへ知るべ無くても、望みは作配する男二階へ上げぬ前に、金子を請取り、ちんともかんと云はせぬ事に、埒の明いたる事ぞかし。佗びたる人の遊び所此處なるべし。或時優形男、其年齢は二十六七にして、形の美しくしき事、立別れ因幡の山のと詠まれし人の若盛よもやと想はる







る。頭巾深く忍び笠、斯かる格子に立ち寄り、玉鬘と云ふ女を思ひ初め、假の枕を並べし後、間無く通ひて、早心も空に成る雁の歸るより、また其鳥の渡る折節まで馴れても、文取り交はす事も無く、一度も分を立てたる事も無し。人こそ知らね、いつとでも、上帯も有りのまま床に入りて、しめやかに手までは締めて語るに、假にも卑しき言葉無く、御袖の留木さへ常ならず、次第に女郎の身取らひて有りける。秋も最中の十三夜の月待つ暮に、御歸りを引留め、是非に其情あれかしと戯れしに、逢ひ初めし時知らせ申せし通、二世と思ひし妻に後れ、未だ其悔みの事休む事、其姿に貴様が似て有れば、過ぎにし思ひ晴れしに、せめてはあだなる枕を並ぶ。斯くて春にも成らば、誠ある情を互にと、哀れなる物語に、涙もこぼさずおはしけるも不思議は、願巻解き給へる事も無し。今宵は頻りに留めるを、憂たてくや思召して、静心無く箱階子下りさまに、紅の二布物裾に引きはへ給ふを深く隠して、さらばの聲も後無し。さては如何なる太夫様逢ひ給ふも知らず、御口説のうち、賤しき我などにと、思ひ念切れて、下男の團介を頼み、御行方忍びて、何處までも見参らせよと云ふ。土手の下道に懸り、観音堂の表門を二町ばかり北の方へ行きて、簾掛け籠めたる水茶屋あり、此内に入らせけるに、數多はしたの女房腰元、御小袖を召換へさせ、御手拭とり奉れば、また有るまじき若後家なり。其まま御乗物に移して、飛ぶが如くに早御佛も見えず成りにき。團助も腰を抜かして、やうやう彼の茶屋ににじり込みて、あらましを尋ねければ、彼れは然る御方の奥様なるが、おつれあひに離れさせ給ひて、御髪なども切らせ給ひ、世に變りたる御物數寄、心隨せの御身とて、鏡袋

百物語に恨みが出づる

鷲の子を三光に附くると、鳥其聲を囀るぞかし。昔梅が枝と云ふ天神、お情無いと申す言葉を、一日の内に二百も云はるる。耳に立つて、或人知らせて、其後は止む事を喜ぶ。其家の姉女郎の眞似をするにや、聞き咎むれば定まつて癖あり。新屋のあま辛氣、木村屋の白癩、扇子のあまあす、八木屋のつがもない、金田屋の名利、明石屋の煩さ、丹波屋の無下ない、藤屋のてんと、堺屋の下卑た、松原屋の氣の毒、伏見屋の憎やの、鹽屋の其れとても、京屋の何がさて、大坂屋の微塵、住吉屋の今に限らず、榎屋のけりま、湊屋の神ならぬ身、茨木屋のそもや、此他遺手禿までも口癖あれども書くに盡きず、大方の事は人も見許せかし。遊女の身ほど大事に悲しきものは無し。請け覆す酒に表がへの袴も厭はず、大奉書を用捨も無く使はれ、町からの太鼓持に挿櫛を取られ、馴染も無き男に引つ扱の帯を貰はれ、揚屋に子が出来たの、且那の娘か嫁入せらるるの、見もせぬ芝居の請棧敷が有るの、御寺に地藏堂を建つのと、皆借錢に成る内證遣ひ、折節は小鴨の味も思ひ遣られ、鯉の糸造も九軒では喰はれず、三つ葉の浸物など、せせり箸して、澄まし



汗吸ひも敢へず、楊枝を遣ひ、納戸飯にも淺漬ならでは、萬づの肴も禿の時喰ひ覺ゆる事あり。是れは此里に限らず、女郎は何國も變らず、假令年を重ね、懇ろなる客の前にも、喰はぬこそ見好けれ。されば連歌にも食物は酒ばかりぞかし。上戸には無心も云ひ好けれども、座敷が長し。下戸に紋日頼めば、益掛けて態野參詣をする云ふ。際な男は晝から来て、三番太鼓の過ぎまで居れば、大方は八つの鐘が鳴れども飽かず、直ぐには歸らず。また格子まで送り、小者に提燈消させて、揚屋の女子を戻し、是れまで送りで参つた徳に、ちとお袖へ手を入れましょかと、嫌な風なる男振、算崩しの袖縞に、黒い半襟を懸けて、青茶小紋の細帯、めくら縮の袷羽織、白鮫の小脇差、濃い柑子の革踏皮、毛雪駄を穿きて、綿入の頸巻、夜なればこそ門で談話も成れ、一座無しに逢へばこそなれ、何事も浮世とて、しなだるるを柳に遣つて、幾度も目を塞ぎて勤めしに、また中戸の腰懸も冷えて、思ひ残す事も無いとてお歸り、下下にも優しく言葉を懸け、其れまでは是非と身を固めしが、揚口より取亂して、やうやう衣裳を着替へ、膳を坐れば、折屋の辰が聲して、また格子を叩く。京橋の吉様が悲しや逢はねばならず、不斷清の姿を恥らひ、燈を背き、闇より手を取交はし、四五日の首尾を語れば、先からも此中は内蔵の大普請、鯉川の石垣を親仁が念を入ると、贅を云はるる。其石垣が崩れたら大事かと、一つも耳に入らず、大方にしてお歸りを嬉しく、跡をも見ず戸を鎖して、身じまひ行水までして、届の文ども認む、此勤めの忙しき、天満から出づる質編織りても世は渡るべきにと思ふも早忘れて、傍輩の女郎あまたに、仲間の焼炭二人合ひの薬籠を懸けて、是れ

も娛樂のともなひ、今日吉田屋の喜右衛門嘶聞きやつたか、其女郎の名は云はれぬ事、轆轤頭の脱けて、龜堀の崩橋に出でて、其夜逢はんす、新町町の今津様に見え、其身は何の覺えも無く、床に寝顔の煩く、此女郎慶分に遊ばしけると云ふ。近付き彼岸の入、涅槃二十二日の事こそ怖けれど、賣日の續くに物思ふ。今から寝られもせぬ夜半なれば、百物語始めて、何が出づるぞ檢にと、年明前の女郎の、しかも不敵ない人座を占めて、小橋の井戸へはめの子どもが歎き、人喰祖母の昔、大和の孕女の談話、彼れ是れ取交せて物語は百にも過ぐれども、何の驗も無し。次第に嘶變りて、身の上の恐ろしき、人を騙せし事どもを、今思へば千日寺に然る方様の石塔を建つる奉加の半分餘るを、身揚に差續ぎ、又は長門の助様に切りもせぬ他の髪を遣りて上らせ、下る事は成らず、最惜や堺山の口に夜番をして、浦風が嘸と思ひ遣る。其れよりは肥後の久様こそ稱十露盤をも一代手に持たず、人さへ五十人も役はれし身が、お内儀様とは別れ、今は高原の邊にましまして、龍頭を擔ぎ、熱田大明神様のお初穂を申し請に歩るかしやると聞くも悲し。金屋の七様、八様お兄弟は家も質に流れて、其れより松屋町とやらに引込み、夜さへ編笠を着て、連れ節の讀賣、上履れ聲の隠れ無いと、聞いて来た人も有り。島田屋の善様は四百貫目二年には早う埒が明いた。常には虫も踏まぬ方様なれども、世渡りとして泥鰌突に成つて、天満におはしけると云ふ。長堀の木様が見えぬと思へば、勘定が合はぬとて、親方が縛つて、詮議をするといの。其金は遺失しましたと云はんしたら、つい濟まうに。さて津村の茂様は、入聲の所を追出だされささんしてから、よもや心太賣は爲され







まいと思へば、案の如く天王寺の南門で、行人に成つて、後の世を深く願ひ給ふとや。こりや若し善い大臣に生れ變らしやんして、己れがまた前の世で傾城して逢ふ事も、是れには些少頼みが有るなり。誠に此年月いやと云はさぬ仕懸、其人も此客も、有る程は取り失ひ、世に在る身を捨てさせ、其後は文してさへ問ひも遣らず、或夜は忍びて門に立たるる佛を知らぬ顔に通り過ぎ、申し交はせし入墨子も今の勤めの邪魔になると艾の煙に焼き失ひ、俄かに紋所を染め潰し、親の所は云ふまいものと悔み、其時其時に變るは此流れの習俗とは云ひながら、親しき時はうらなく、命も其男には惜しからざりに、心から心の鬼の物渡く、一人一人涙に沈み、暫し身を震はして歎く時、天井の裏板響き渡り、屏風襖も鳴り止まず、四方の隅より青雲落ち重なりて、今申し出だせし人達のあさましき姿、幻に顯れ、少しは恨みに思ふ身を、何とて見棄て給ふぞ、日頃の偽り返すぞと、放ちたる爪、黒髪、日帳も要らぬと歎き造る。是れに恐れて思ひ思ひの詭言すれども、家の内の荒るる事休まず。中にも物賢き女郎考へて、各揚屋の算用残りはと、高聲に申せば、現にも世の中は借錢ほど好かぬものは無きにや、此聲聞くと化したる形消え失せけるとぞ。

好色二代男

諸艶大鑑

卷三

目録

一 朱雀の狐福

- 一、龍宮勝りの下屋敷の事
- 一、初めて遊女文封する事
- 一、島原の内證見通しの事

二 慾捨てて高札

- 一、江戸に隠れ無き仲人唄の事
- 一、悪所船は見えぬ人顔の事
- 一、三野の西尾浪の影映る事

好色二代男

諸艶大鑑

卷三



三 一言聞く身の行方

- 一、抜け参詣の娘はまだ分無き事
- 一、新町出口の茶屋少濡の事
- 一、局に優女置く事

四 樂助が鞆猿

- 一、世帯に積り知る事
- 一、萬づ遣帳引合せて見る事
- 一、太夫用意挾箱の事

五 敵無しの花軍

- 一、九軒に夏の名花集まる事
- 一、女郎は蔭の間に心あるべき事
- 一、此里の太夫以前の形は無き事

朱雀の狐福

東福寺の隠山忌に詣でて、通天の紅葉見るに、今は梢に残り少なき、人も散り散りの夕暮、欄川の水の音までも多めきて淋しき道連に、踊子の師をするお龜、九兵衛と云ふ勇と語り行くに、さる方の下屋敷へ是非寄れど、黒谷の邊に竹一叢の構あつて、見た所は然も無く、門に入りての美美しさ、是れを新隠れ里と云ひ習はし、上京の人の遊山所とや。九兵衛が案内して入れば、座敷は昨日の騒ぎの跡とて、能衣装取り亂し、筋男の面も踏み分けて片寄せ、鞆垣の柳は根引にして置く。何事でか有りつる。また數寄屋の懸繪は雪村の觀音と見えしが、御手に庖刀と眞魚箸持たせ、醜寺と落書、さても惜しき事かな。また南方の切戸引き明くれば、兵庫砂蒔きて、遙かなる隠れ縁に蘭鉢三十並べて、其奥の室に鬢切したる女、小姓七人も見えしが、皆十五六にして何れか厭なるは無し。其中に一人、寒き折節なるに、白小袖一つ着て、足に金行燈結び附けられ、しかも結びし欄目に封まで附けられ、涙ぐむ「みノ誤」し有様、是れは合點の行かめ時、ここ預りし年構へなる女房出でて、九兵衛に頼むは、此こそさん殿、過ぎつる夜、お座敷にて燈火に行き當り、其まま消えぬる科とて、御酒機嫌にて斯く遊ばしける。見る目の痛ましければ、早く御託と申す。其れまでの事にもあらず、御目に懸るまでも無しと、其難を逃がして行くに、是れが御内證間とて見する。八疊敷の所に、四つの隅に炬燵を四つ切りて、同じ色なる蒲團を懸け、足を差込み、枕は一所へ



寄せて、御断を申すと云ふ。物の自由捨て、斯かる華麗の遊興、町人の分としては天の咎めも恐ろし。さりながら成らば爲ても見たしと、火の有るを幸ひに、九兵衛と枕近寄せて語る中に、最前の女、薄茶など運びてもてなす後、甚六とて萬事の輪を預りし男出でて、九兵衛が参つたらば、此文持たせて晝より前に遣はせとの御申付と、棚より出頭箱を下ろし、御状と香箱を渡す。今鳴る鐘が九つと驚き、人には暇乞もせず走り行くに、知恩院の門前より時雨れて、やうやう大和橋に渡り着き、人置の五郎四郎が許にて、差替も無き一本借りて、急ぐ次手ながら、壬生に寄る事ありて、野道を行くに、七十ばかりなる婆の雨に濡れて物悲しき顔色して、我が先に立ちて行かるるを、母の事思ひ出だして、傘を貸して送れば、此老女嬉しさの餘りに、問はず語も聞く程耳よりなり。少し袖を引きて、こなたは操様と好い中知らぬ事かと云ふ。是れは奇妙じや、そちは島原の人かと問へば、さは無くて隠し給ふ女郎の身の上知らぬ事無し。今入文字屋の二階で、今日は小太夫様のお腹が疼む、夜前の酒が過ぎた、井筒屋では石州様の黒子を彫らして御座るが、有つてから美しく顔じやにと、見たやうに申す。是れ不思議なり。懐の文取り出だして、上書を見せず、是れは何處へ持つて参ると問へば、其れは三夕様へ正月の事、心得たとの御状なるべく、此太夫様は物事勤めを大事に掛け給ふ事かな、まだ七十日あれば、其内には素い客も羅るべきに、年取りはつさぬやうに、彼方此方の長文章、殊に上包二重に封じ目には印判定紋を押して、御念の入りたる事ぞかし。永祿の頃までは、世間に狀文さへ包みて封ずる事無し、況してや遊女の文などは、當座の慰みに見

棄てしに、昔此里六條に有りし時、玉蟲と云ふ女郎、客の方へ錢一貫の無心、始めて封じ文遣はしける。其れより次第に二十兩、三十兩の御内用申し越され、懇ろの男、爲替手形より恐ろしき世とは成りぬ。京に限らず、娼の印判持つは宗旨改めの他、質の時要なるべしと笑ふ。聞く程をかしく、今の太夫様達の身持さもしき事は無し、溜り金あるを、さる揚屋利廻しに貸し、または私衣裳の中綿に拵けこみ、四五年も勤めの内よりも、かせ世帯の心懸、手桶、米櫃、杓子、菜刀、遅からぬ調へ物して、好誼ある町家に預け、伽羅も貰ひ溜めて焼かず、着物も白小袖を頼まるるは、爲て遣る人もむつかしからず、是れは定まつて襦衣なれば、其まま取つて置かるるに勝手なり。萬つの巻物は下されてから、仕立てて着ねばならぬ、薄汚れて妹女郎に貰はれ、身を斬らるるより悲しき首尾ぞかし。さる太夫様は此程も爲家の歌書を取賣に渡し、雲龍の卓、香爐を賣り捨て、皆負通に代へて、さもしき心根のほど、一人一人産んだやうに云ふ事、物毎恐ろしく成つて行きけるに、朱雀の寺近く成りて、我が住む里も見えければ、語るに暇無しと、懐より一つの書を取り出だす。上書は噺町の日記なり。此二十年以來の諸分、是れに洩るること無し。かまへて疑ひ給ふな、我が云ふこと偽り無き證には、今行き給ふ先の揚屋に、女郎集りて、今日の雨中に、よもや男はわせまじ、いざ寄合出だしの振舞とて、鯛は杉焼、葱も喰ふて、匂ひは後で壁土を嘗めて止めよと、物に馴れたる女の知らせて、箱に箸も亂れて、目の所の穿鑿、可笑しさも只今なり。其中に物をも喰はず、素湯に粉薬を好み、亂れ髪なる太夫は誰が子とも知れず留まつて、お腹を痛みと云ふ時、遙かなる巖よ







り、斑なる小狐の彼の人を見て、遁げ去らず喜び成す。姥、目の色變り、其れと連れて、向ふの穴に入りて跡無し。さては豫て聞きつる島原狐なるべし。善き事聞き過ぎて、宿屋の入口より、集錢出しの一文の残りは無いか、父無し子のお腹が疼みますかと、大聲あげて申せば、何れも臆潰して、誰が傳へたぞと吟味すれども知れず。太夫達、沙汰無しのお言、何せうとも儘なり。とかくは寒空にも成れば、手前捲への夜着蒲團申し請けて、其後も彼の手帳に合せ、人の噂を見通しに申して、欲しき物を取つて、此所の御鬘の塵を取り止めて、白川の流れの末に萬づ代を祝ひの水、お龜酒屋と成る事、日頃上戸の娯樂。

慾捨てて高札

人間は慾に手足の付いたる者ぞかし。爰に壺口のお綱とて、世を媒として渡る者、戀の中橋の廣小路に住みける。或時、男世帯にして年久しき瀬戸物町の酒店に來て低語くは、幸ひの御縁が御座る、さる方に金子二百兩と、十八九なる小娘を一人付けて來る、是非聘ばしやれと云ふ。其小判は切れも無く、輕目も無いかと問へば、駿河町の勘四郎包にして渡しましたと確かに申す。其娘の顔はと聞けば、跛は見ゆる程で無いと云ふ。みつちやは無いかと問へば、まだ白齒ぢやと申す。眼は別の事は無いかと尋ねれば、耳が二つ無くば、其儘去れと云ふ。見ぬ商事は成らぬ、せめて三野の西尾ほど美しくければ善いがと云ふ。媒の鍋氣色變へて、今の時花太夫、金車引きても五日や七日には逢ふ事稀なる娯縁と、同じ日仰しやる

も愚かなる事やと、大聲に笑ふは大八車の如し。足下に有りし冷水を蹴立てて、天目も踏み落して歸る。是れを想ふに鍋が申す如く好き女に敷金付けて送るは、他人の所務分取つて、跡甲はぬより酷し。死ねかな眼利じろ、慾の世の中なるに、淺草川の惡所船の乗場に、札書き置きしは、夜前二挺立ての戻りに、御侍衆上下乗せけるが、お顔は見知らず、舟より上がらせられし後に、鼠羅紗の紙入、金物に藤蓼の三つ紋、此中に一歩二百五十、三足づれの獅子の目貫、早細一條、女筆の立文五つ、此外花車道具の品品態と書き残す。此主様へ有りのまま戻したし。何時に由らず舟着にて、燃杭の戸右衛門と呼び給へと書き付け、申の六月二十九日の夜、戸右衛門船と動揺む。折節此處に有り合せ、此人達を乗せて御急ぎ合點しや、あれなる都鳥の飛ぶが如くと云ふ。我が思ふ事を尋ねたし、拾はれし物の中に、若し二十二日より六日まで、毎日届の文は有らずや、萬づの物は惜しからず、其文賜はれと云ふ。文に限らず、一品も取るべき物にあらざ返すべし、疑ふ事には無けれども、二十二日の狀の書出しはと尋ねける。其れおる覺えながら、今日涼風の吹かぬ事、櫻田の音信絶えて、此宿花も無き里に、墨繪の御扇子、雪の芭蕉はいやよ、何事も男は偽りの世ぢやもの、野上の女の手枕も、我が夢比べて見ること皆そなた様、此あとは許せ云はれぬと、船人も共に大笑ひして、此道の奥深きは人に語られぬ事のみと、彼の紙入を返す。金子は汝へと申せど、無用の御仕方なりとて欲しがる氣色無し。昔は何人と問はれて、目の雲袖を傳はせ、櫓柄取り捨て、我れ今こそ、もとは宇都の宮の者なるが、神にも佛にも、戀にも親仁にも見離され、斯かる賤しき世渡りすれば







とて、筋無き物を取るべきやと云ふ。さて戀にもとは如何なる御方を、そも忍び給ふぞと聞けば、昔日御町に名の有りし太夫に、一人も逢はざるは無し。されども新町の彦左衛門抱への太夫西尾を二歳餘りも焦れしに、障る事ありて首尾せぬ中に、身は國元を追ひ出だされ、また此所に来て、せめては三野に通ふ人の足手影なりとも見しや思ひ晴らしに、舟も一しほに早め、行く人の心、待つ人の心を思ひ遣ると、戀の唯中を語る。やれ其の西尾こそ我も焦るる君なり、是れに有る物も其太夫の益仕舞に要るべき事と、差心得て持つては參りしかども、遣る首尾無くて歸り様に取落せしぞかし。其身に成りても主を尋ねて返さるるは、前代例無き志なり、釋迦も女郎もよも返すまじ。此事太夫に語りて、是非戀の媒妁せん、太夫否と云はば分知らずなり、いやならん「ぬノ意カ」返事ならば逢ひ給ふかと根を押して問へば、是れは情無し、夢にさへ眞の姿を見れば命と云ふもの有るべきや、折からは幻に見る事も、百度と云ふ時、空俄かに薄曇りて、堀兼の井の邊より、觀音堂を限りて、夕立の頻りに、風の神も袋開けられて烈しく、神鳴も撥の續く程打ち鳴らして、遣手の光が障より恐ろしく、管など深く被りて、袖洩る水に夏も恨めしく、茂りの蘆添へに立つ浪は、やから綱を打つ音のみ、螢も先船の火繩ゆかしく、蛤の拔實、蠣殻なん岸のしやれ貝の光も目にあやなく、口に忙しく念佛申して、道鐵が庵も未だ遙かに、川瀬の浅き方を見て行く水の上に、今までは有りとも覚えぬ紫たちたる筋生えて、居姿の女忽然と顯れ、襟袖して髪はしやら解けの後つき、やれ命を取るは、押せ押せと、水押に立上がりて聞けば、唄うとふやうにも有り、正しく初山が上調子の聲

とも聞え、市川流の琴かと疑はれ、浪の底にも吉原ありやと、先立つ女の面見まく欲しく行くに、後見返へれば西尾なり。是れはと驚き、言葉懸けても返事せず。舟人の戸右衛門申すは、我が心玉にもせよ、思入の浅からぬ證を見せんと、招けば領く、笑へばあいを成し、何時と無く消えにける。大臣是れに憐愍深く、太夫に此事を語れば、其れこそ思ひ當りたる人様なり、勤めて三歳ばかりも過ぎて、脇など塞ぎて、情も知らぬとは申されぬ時、さまざま口説きましても、其お連様に逢ひ馴るれば、従ふ分けも無く、徒らに過ぎぬ。今其御成り様にておはしけるに、逢ふて進ぜいでは、とてもものに貴様一座と頼めば、是れ變つたる浮世遊び、彼の戸右衛門を引合はすに、西尾が萬事のこなし、忝なことも、尊なことも、嬉しさも、一つに括げて皆男泣にぞ。

一言聞く身の行方

神風や伊勢の右望都と云ふ座頭、五音の占を聞きて、萬つの事を見通すぞかし。或時難波の春に住所を替へて、梅の假宿を定め、且那廻の御師彦六太夫を道すがらの友として、鈴鹿川を越えて桐の朽橋と詠みしも是れなる滴り、あれなる岩のとつ鼻に、年重ねたる蜂の巢の有るはと、目の見えぬ人に教へるも可笑し。腹を抱へて上れば、蟹が坂を下るに、此所の我まま雨、夕日は照りながら降りて、參宮人も立騒ぎ、丸餘賣る軒端に、三方荒神引掛け、そりや當るは、退いてと、與作丹波が馬方の言葉つきも忙しき折節、拔



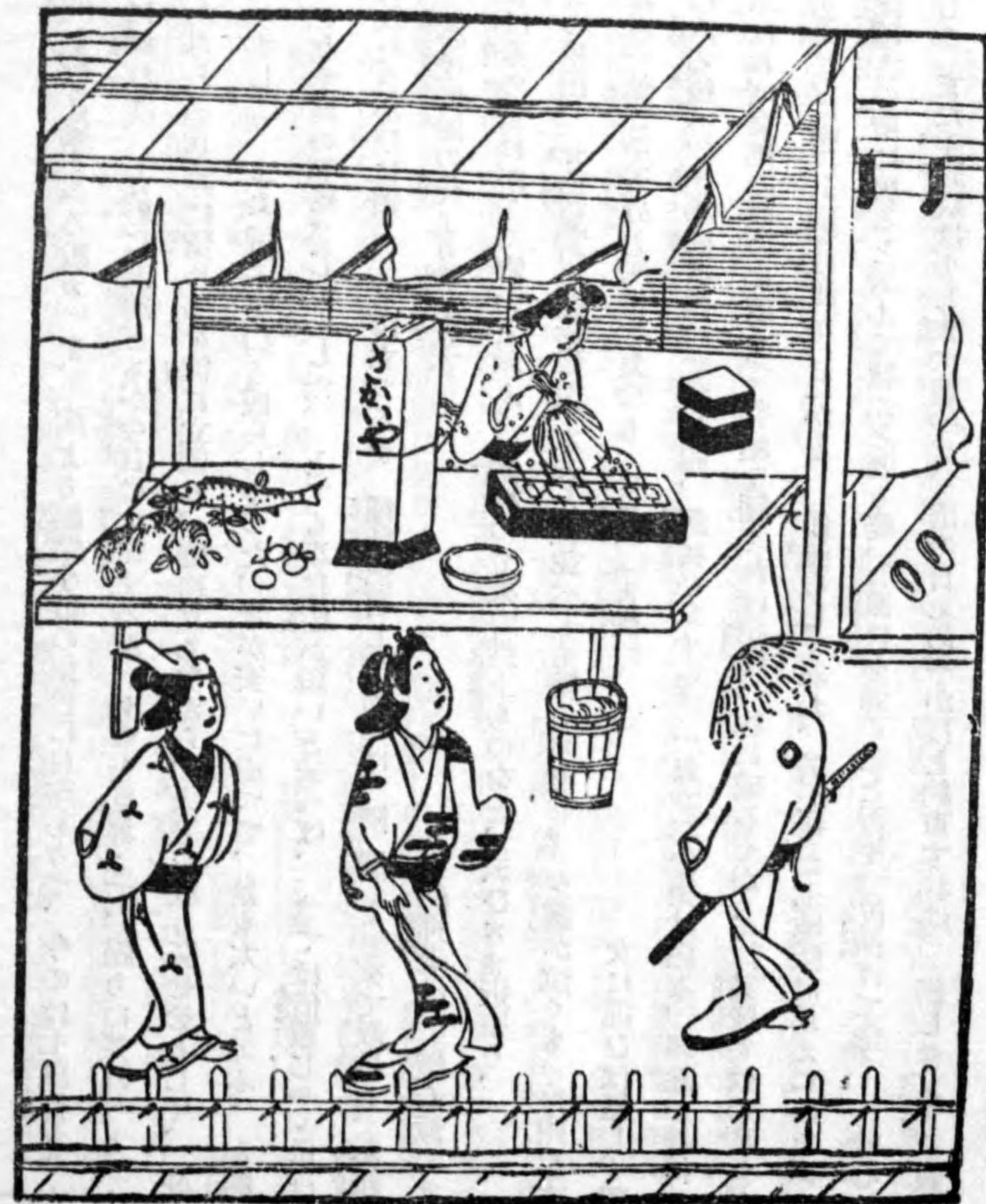
け參詣と見えしが、菅笠に國里の書附も無し。皆豊後紋の脇明け、またそんな事は知らぬ尻付なる娘九人行く中にも、少し髪縮みて色は淺黒うして、しほらし。木蔭に雨宿せしが、つれなき松に何時まで、濡れ懸つた袖じやものと云ひ捨てて行くを、右望都聞きて、今の少女は、行末必ず遊女に成る者と云ふ。其れは知れぬ事なり、世の中の巾着切も、腹の中からの其れ者にもあらず、百菊作るに由つて花變じて咲き出づる。平野の上人に備はれば、里人其ま難有し。公家も装束無しには膏藥賣の顔の白い者なり。一切の人間其職に移せば移るものぞかし。諸職人の手間取弟子等も、親方の勤めの外、冬の夜の氷を叩きて、手の中の荒るるをも厭はず、私仕事を拵へ、其銀一匁に成る事、岩に花咲く心地して、新町の暮を急ぐ風情、過ぎつる正月布子を盗み出だし、相弟子の羽織を借り、小倉帯を前結びに、盆の雪踏を取出だし、床の髪結に物好みをして、鼻紙半帖思ひ切りて折込み、道行盡しの淨瑠璃本、皮付の大楊枝、喜三郎が琢砂をたしなみ、宿を出でて一丁ばかりは足元も定め、其れより飛び立つ心玉にも、彼の一粒の銀を弄ろうて見ること幾度か御堂の前に在りし。折からの草花を買うて、其心には優しくも提げて、こちらの花鳥に今を盛との嘘は悪るからず、敵に逢ふたらば、さう云ふて誑らしてと、種種に思ひを運ぶ。此間の娯樂、日頃は脇を曲げて金櫃を使ひし辛苦も此時忘れて、東の門に入ると、氣はさはさはと成つて行くに、扇屋の萩野後れ無しの二つ折に、髪先長く丸顔の美しくさ、沖之丞に、源平香合の道具持たせて靜かに泰かに行くを、皆見戻るも道理なり。思はく阿波座に有れば、太夫などは目にも懸けず行きて、局へ直ぐには入ら

ず、態と門を歩き過く「る脱力」を、内より結柴小紋の鼠色に目印ありて、今のは七藏様じやと、遣手をつけて袖に縫れば、九軒に友達どもが今日は大寄するが、ちつと見舞ふて、歸りに其れへと云ふ。先づ逢はんしてからと、是非に留めるを機に立歸り、庭に立ちながら、火箸を取り灰せりして、此中は珍らしい雪が降りまして、また御子が白う成らしやつた、米が安いに由つて、足も太いと云ふ。女郎其れは聞きもせず、こりや良い羽織さじやんした、とても事に術が短いと云へば、さては借着じやと思はしやるか、親仁が呉れたさかひに着る、と腹立つるを、種種佗言して引上げ、隣局より来て取持ち、否應無しに戸を鎖せば、勝手屏風の先より敷座、

火鉢押退け、燈心滅して上着は脱ぎ

て、今夜は豕の荒れがして寒いと云ふ。餅持つて来て進上ものをと、云ひさま近寄り、ろめ、この思出、井筒屋の大座敷に小太夫と枕並べしも變る事無し。夕霧か泣くも、丹州が大聲も皆心の臟からなり。位こそ五分と四拾六匁なり、目鼻、手足、女に違ひは無し。起き別れて女郎は内に入る後へ、遣手煎茶持つて来る時、銀拂ひをする。一匁で二分掛け込み、剩餘の錢持ち来る時、何とも物云はねば女郎の取りに成る、言葉を懸くれば遣手の物に成るぞかし。其後名残の暇乞して、また立戻り、そこらに書いた物は無かつたかと、仔細らしく尋ね、若しまた七藏様は見えぬかと云ふて来る人あらば、謠稽古の所に居ると云ふて給ふと歸り姿、東口を過ぐると否や、尻括げて急ぐ。此心に成つて見るも面白し。また手間取は少し味に遣つて、雨の日しめやかにと約束すれば、新しき傘を買うて、二十本







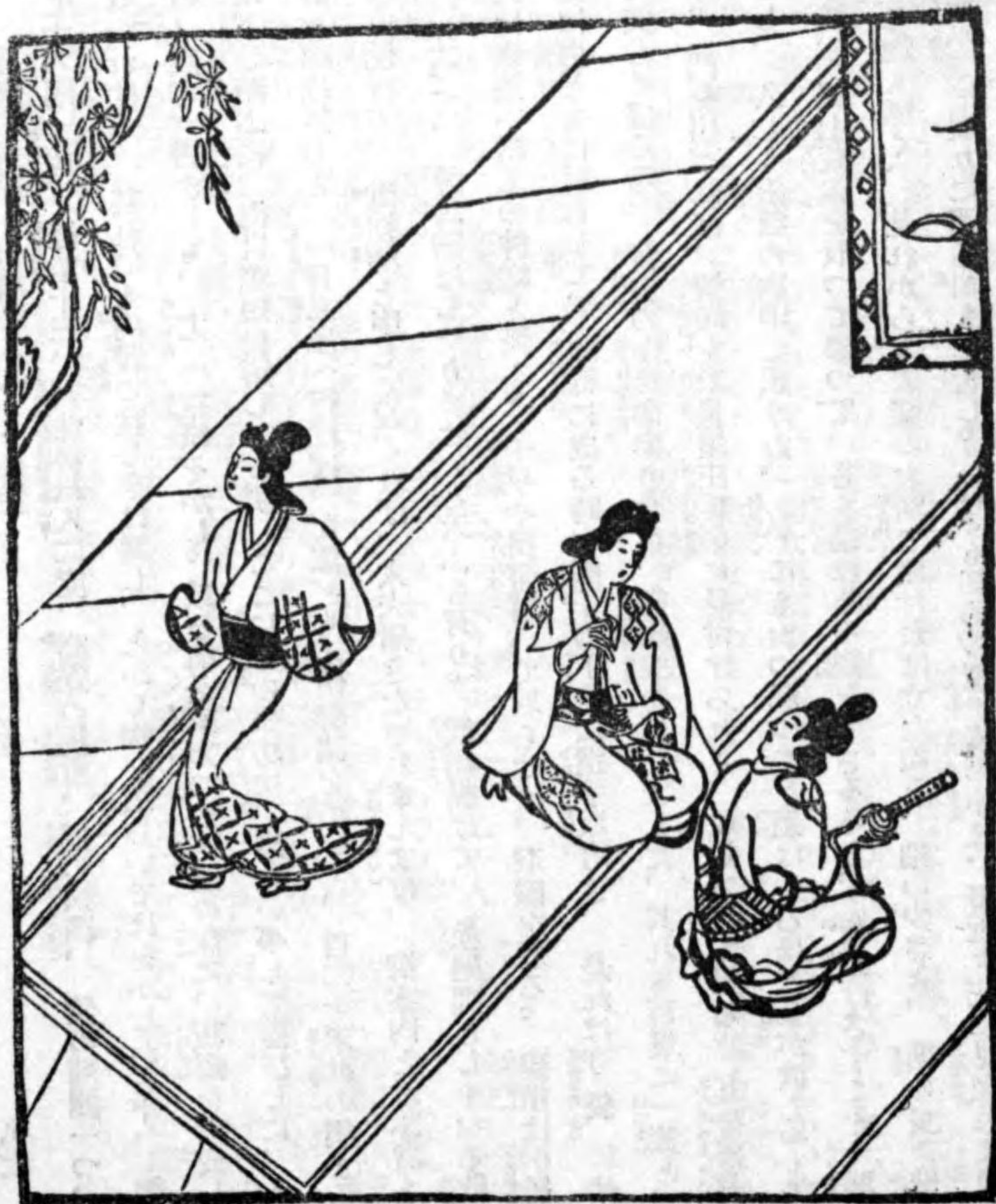
の内と、大文字の書付、米糴さして、袂に大豆を入れ、面に釣格子の有るは二匁取のしるしなり。扇に揚りさまに、米大豆などを覆し懸け、今日出雲加賀の入札に行きて、其れからはれへ参つたと、餘勢なる商賈談話、箱屋の腰つきは隠れも無し。やうやう三十日に二十四匁取の中を、十三匁出してする事は、博多の小左衛門が大判の風車を拵へ、長崎屋の出羽に取らし、禿の金作に唐人罽をさせしより較べて、是れが奢りなり。定宿の茶屋見渡せば、店に柁のかい敷、鯛は薄鹽して小板の蒲鋒、蝶螺、蛤、鮓は天蓋釣にして、車海老は錦を争ひ、口鼻が赤前垂は夕日にうつろひ、麗越しの目遣ひ、客を忙しくあしらひ、菓子盆、油差し、兩の手に持ち出て出で、戻りに茶碗火入を提げて、鍋の蓋を明けて見たり、買物の帳を付けたたり、一人して萬事の埒を明くる。此處もそれぞれの思はく、折節は撥音もして、恐れる人も無きに、自然と此處の小唄は低う、物云ふまでも乙へ入りて、物靜かなり。或時、伊勢の彦六太夫、右望都同道の後、四五年も過ぎて、大坂に罷り、御祓曆を配布しまふて、隙に成りての夕暮、彼の四町を詠め歩行きて歸途に、越後町の吉野屋の邊の店に、賤しからぬ女の、髪は投島田に結ふて、小いたづらなる脇顔、立寄りて見るに、無黙の大學を心靜かに讀みて、人近寄れば秘す風情、何とやら孔子の娘めきて、堅い所に柔かなるものごし、是れに思ひ附きぬ。惣じて人を侮る事勿れと、言葉を下げて戀を仕懸け、密かなる揚屋に呼びて、假初ながら更くる夜を惜まれ、酒も匆匆にして、床は取らずに、語るより優しく想はれ、物云ひに少し訛り有るは、西國衆かと尋ねければ、如何にも備後福山近き里なり、人の成り行く末は知れぬものぞかし、

斯かる勤めの身にとは、神掛けて思ひ寄らず、十一歳の春の頃、女友達に誘はれ、伊勢まで参詣せし道にて、雨宿つれなきに、何國とも知れぬ座頭の坊の云へるは、あの娘は遊女に成る者と、先も見えぬ事なん申すを、心腹立てて、何をか申すぞ、我れ人知れぬ旅なれや、國元の親は男女の召使さへ三十人に餘りて、有徳人なるものと思ひしにと語る。横手を拍つて、其時の友は我れなり、五音を聞くも名譽なり、身の上悪しくは爲すまじと、親方に年の内を貰ひて、故郷の妻にも此事を明し、連れ下りて山田の片蔭に忍ばせ、松の門を鎖し込め、少女に物讀み教へて、色も情も魚類の味も知らぬ身と成りぬ。是れも増しなるべし。

樂助が鞆猿

元日より大晦日まで、毎日濃茶一服、伽羅三燒、蠟燭を一挺つつ燈して、一年中に銀三十枚ならでは入らぬものなり。他より見て是れほど大氣なる事は無し。楊枝三百六十本、遣ひ捨ててから些少なり。さる人庭櫻咲きて、見に罷りしに、昨日も客ありし跡と見えて、紅梅染の手拭掛は、信長の時代物、檜垣の蒔繪好もしかりしに、其竹縁の端に、丹波筑籬に入れて、杉箒を洗ふて干して置かせしは、此心入の煩し。暫く詠めし花も、淺まに成りて立歸るを、主留めて、馬刀の吸物出だせど、嫌な所ありて、酒も飲まずに立ちぬ。人皆たしなむべし、箸何程が物かと云ふ。萬づに付けて算れば大分なり。太誠持に遣帳を見るに、四







年半に七十六兩一步、襟數十三、其他鼻紙入二度、寢覺の提重、桐の挾箱、紫の蒲團一つ、色品二百三十  
 四度に取りられる。其れでも内證の宜しきは無し、とかく物を遣らいではをかしからず、物呉るる友と法  
 師を「のノ誤カ」書きしも、尤の草紙ぞかし。或る御公家方のお居室の床に、板銀を山成して、欲し相な  
 る下下に下し給ふに、御自筆短冊嬉しからず、ここに都の樂坊主、爲たい事して遊びしに、人に物取らすは  
 ど心の好き事は無しと、一日丸屋へ行けば、女郎どもが伊勢講を結びて、百二十末社の集まる中へ、巾着  
 に有るきり明けて、御初穂と申して致ぐれば、太夫着きなされましよば、御案内と云ふ者も有り。四つ這  
 「に脱カ」なつて、神馬飼はしやりませいと云ふも有り。爛鍋提げて、松尾様としやべる飲炊の初を捕へ  
 て、是れは縁遠い結ぶの神様と笑ふ。千早や掛帯解いて取らせば、羽織を取る。脇指は引船に、印籠は禿  
 に、着物は男どもに取らして、赤裸に成る時、緞子の下帯に遣手取付き、是れは守袋にせんと引解く。  
 後ほど可笑しく成る時、背虫の作兵衛参り合ひ、御編笠を貰ひました、其れも百貫に一蓋と、ぬからぬ顔  
 して申す。門を出づれば、焼印を三星屋庄兵衛に見付けられて 取返されて歸る。其後善都聞き付けて、  
 御見舞申し、久しう銀氣の物申し請けぬ、私にもお取つて、遣はるるほど金が欲しやと申す。座中可  
 笑しがる時、彌七荒鍛を取つて参つて、さあ遣はるる銀を下さると、荷擔げさすこそ一興も有れ、今は  
 早取らす物も無く、是れから太夫様のお情で無ければ立たぬと、袖の少さき、裾の長き借着も思はしか  
 らず、中京まで取りに遣る間も見苦し。賢さも初めの薫、噪の中は、軒近き花に見惚れて有りしが、やれ

お風邪引かしますなど、禿に嚙き給ふ間も無く、御挾箱取出だして、御紋付の着物、羽織、其他申すに及  
 ばず、中脇差まで用意ありて、大臣有りし姿に爲し給ふ。其頃合はせらるる客、寺町の二三様、六條の轡  
 様、彼れ是れ三人ありしに、皆此の如く替衣裳を拵へ置きて、自然の御用に合はされしを、今の不自由さ  
 に見較べ、昔の幅十が一つにも有らず、一切女郎萬事は男次第なり。物を遣らぬのみか、物日をさへろく  
 には勤めず、馴染も無いに節句を頼むの、庭錢は止めにしやと、有り來りたる祝儀も匆匆にして、然りと  
 ては、おかた取る日も末には成りぬ。人皆賢過ぎたる世なり。

敵無しの花軍

花柳卯月八日に定め、吉田屋の喜左衛門方へ、色深き太夫天職を二十人の大寄、越後の竹六と云ふ男、假  
 初にも小構なる事は嫌ひなり。六條の一日買と申すも、此人初めての都上りにせしとかや。今日また北面  
 の長縁に花桶を排べけるに、春の名残の藤は、野田東瀨寺の葉末を求め、生玉の若楓、佐太の芍薬、淺澤  
 の牡若、中津川の花菖蒲、御堂の白牡丹、野里の美人草、玉造の二重芥子、木津の大手毬、長町の薄花葵、  
 今市の栲、中島の畫餅、天満の五月躑躅、安部野の風車、森の早百合、三津寺の夏菊、十三河原の撫子、東  
 高津の橘、下寺町の卯の花、釋迦誕生ましますも、斯かる花園にての事とや。何れの女郎衆も、たとへ月  
 頭に、齒黒を飲み給ふとも、止まるべき時は止まるべし、脇の下からも危し、口から産み給へと、厭がら







る事のみ申し盡して、我我は志あつて、舍利寺に主を連れて参るなれば、其後は各御心のままに、名花蔭に何ぞ甘き物参つて、相手無しの間遊びと申せば、一度立出で、思ひ思ひの暇乞、彼の花軍は見ぬ唐土の事、目の前の天人、通路の雲川が、久しい顔も飽かず、見捨て行く。後にも咄と笑ふ體休むこと無し。是れは新屋の初雪、高瀬の方より、禿に切溜の桶持たせて送られけるに、萬づの花の中に、知れぬ草の一もと有るを、名を指して争ひ果てぬ時、小差出たる下男、其れは皆縁への差合、茶引草と申す。また連玉の一枝を、身揚り草と云ふ物と申す。花さへ興覺めて、身に徹へたる草の名を嫌がり、一人一人大座敷に入りて、盃の取揚手も無く、小唄をうたひさして、其一家の女郎五人三人づつ片寄り、何が云ふぞと、次の室に差足をして聞くに、頼みにせし男の家質を敷き、上町の母親店まで来て、呼出さるるもつらし、禿も裕時まで綿入着せても置かれず、空が曇れば、長柄の傘無き事を悲み、夜は常座買の蠟燭、茶も人並に節めねばならず、二布も晝の床は恥かしく、萬事に付けて、此勤めの初め情無しと云ふて、何の役にも立たぬ事をのみ高瀬、見る人も無しとて、湯漬飯の早喰、看箱には山椒の皮ばかり残して、手洗ふて自然に干上がらせ、忍びて見る程をかしゃ。人は蔭の間をたしなむべき事なり、殊に女郎の身はむつかし。過ぎし年、村雨の降らぬやうにて降りて、人たらず雨も氣の毒なる日、さる太夫様塗下駄の道中、豊やかに有りしを、是れは見物と待つ効無く、九軒の横切れて、西側の座頭の許へ寄られける程に、何事かと井八が窓より覗けば、小者が振袖、上に引張り、竹の小笠を擔ぎ、軒漏る雫を除けて、腹心の自由に

行かるる様見咎めて笑ふ。太夫殿の淺葱繻子のいたはりも、入蔵が木綿着物の濡るるも、悲しさの同じ事と笑ふ。さる太夫殿は中戸より干鶴を焼くと、忙しく云はるる。せめて居室に上がられてから、云はれても好し。或る太夫殿は格子へ紙賣を近寄せ、拾一匁錢にして取るより、三分輕い分には取つて歸りやと、世間も構はず、節季聲を出して、見れば秤を持つて居ながら、賤しきは是れぞかし。また厭なる女郎際日に、宿の唐敷に出でて、片肌脱ぎて、捌き髪に成つて、片手に水飲みながら、しころ榎の拍子打たるを、男物蔭より見て、戀を捨てける。一夜阿波座の東南側の籬に、點火の仄かに、寢所横縞の蒲團も有り、耳組の敷藁も有り、松屋町焼の土火入に、反碗の眞入、取集めたる鍍金煙管、片方に客の文を寄合讀に譏る。壁に耳當てて聞かれず、皆是れ見て笑らや、詰出す談合をするといの、瓦町の拔蔵が味を遣らるる。今おれを勤むるも大黒講の懸錢を借つて、とやかく間を合はす成りをして、太い事を云ふ。云はれぬ店出しで、紋羽二重一疋、多分買懸つておこしたであらう。いやはや、似た顔色をして見せれば、俄かに厚敷はき掛けの帯が可笑しい。供は町の夜番ぢやといの。とても續かぬ男、ふらふらとして置くがぬるい。五月の跡先もさして、若し續かば御祓どもを當て付け、七月には淋しがらして置くこと、さてもさても苛い物語、如何に其身なればとて、誠に思ふ者を、人中にて掻き探しけるは憎し。我物遣ひながら、遣りながら、大坂一番の白痴様なり。品こそ變れ、大方こんな事なるべし、分別して深入せぬが善いぞと思ひしも、其時に及びては定め難し。また傾城なればとて、皆同じ心入にもあらず。過ぎにし藤屋の吾妻などは、



客に逢ひ初めしより、首尾の別れまでの状文一つもあたには爲さず、終りに人に見せける事も無く、退きし男の沙汰する事も無し。勤めを大事にして客の氣を背かず、さのみ鈍き所も無く、一代其名を流す。遠國の人の目にも、闇中にも、其時の太夫どもは、問はで太夫とは見えける。今時の太夫さのみ美しくしさも昔に變らずして、次第に小女房に成りて、仕出しの良き天神と取違へ待るは嬉しからず。然れども、善うは價值付けて、圍ひの良きも天神に並べて、梅の花と菜種の花ほど違ひあり。天神の見好きも、太夫に較べて大方は變道具が違ふ。まだ何處を違ひは無いか。

好色二代男

諸艶大鑑

卷四

目錄

◇ 縁の掴み取りは今日

- 一、戀は近道の難儀の事
- 一、三浦の娼大寄の事
- 一、身は汚れても男嫌の事

◇ 心魂が出て身の焼印

- 一、紋は仕懸櫛の事
- 一、十六色を一色も喰はれぬ事
- 一、詫言して俄聲の事



三 七墓参詣に逢ふは昔の

- 一、死なれはせず坊主に成る事
- 一、揚屋遊びも留り時の有る事
- 一、女郎身の上物語の事

四 忍川は壺が越す

- 一、古金棚から仕合出だす事
- 一、思ひまま普請して見る事
- 一、日待は手管の事

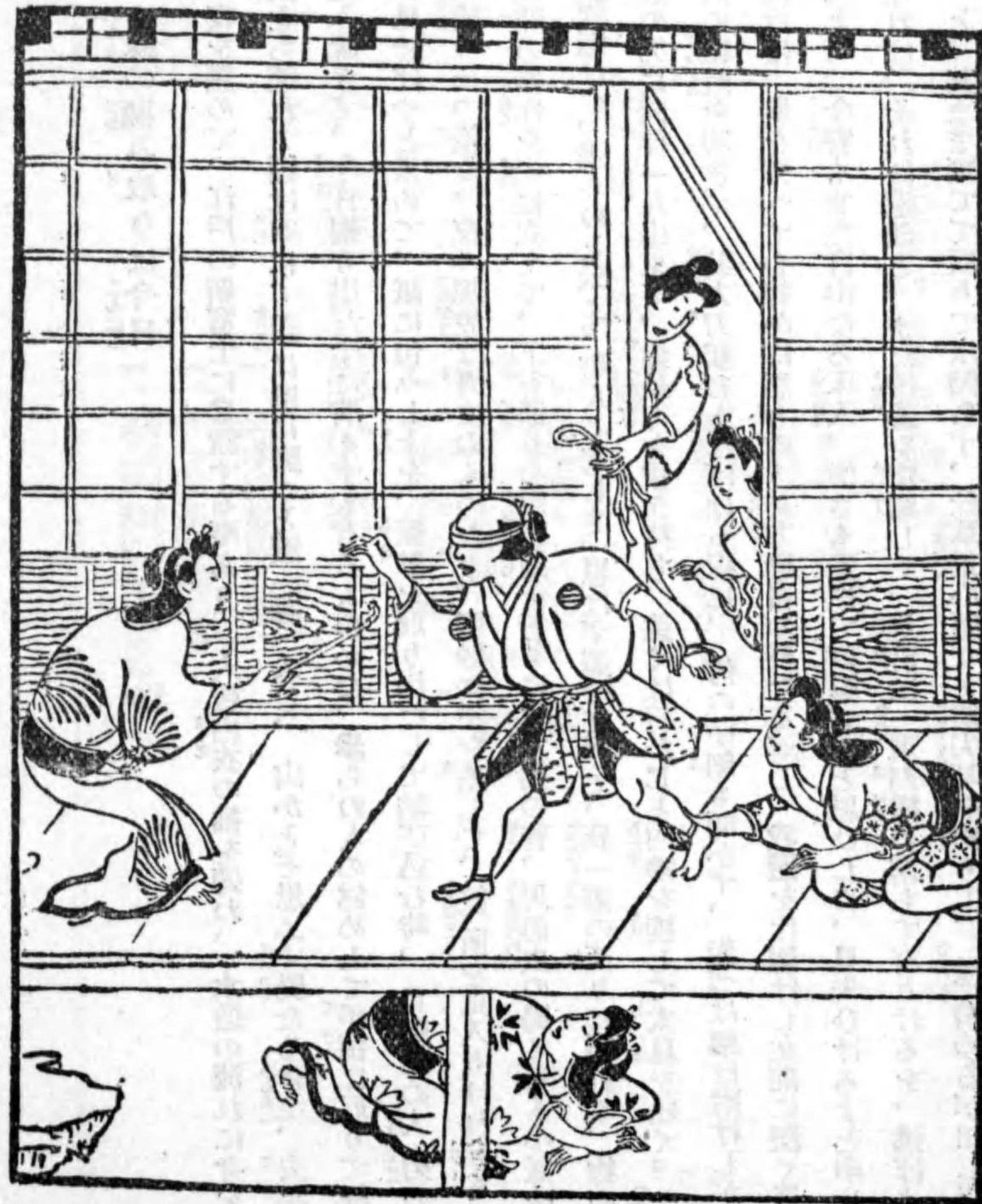
五 情懸けしは春日野の釜

- 一、洞の紅葉見る事
- 一、きさか茶の湯の事
- 一、苦紫都にも成らぬ事

縁の掴み取りは今日

水無月の夜を籠めて、江戸の新富士に参詣する事あり。人皆白衣の袖を連れ、水道の流れに身を清め行くに、松明立ち連れて煙は空に、諒は風に靡くと讀〔詠〕みし、山かと思ふ才覺なる神主、去年降る雪を日蔭に埋み置きて、今日掘り出だすに消えずも有るものかな、参らぬ人の爲めとて手毎に取りて歸る。是れは大夫に見せばやと求めて、紙に包みし上を、服紗を取り出だして結び込む時、目馴れぬ大男の夏ながら紙子に朱鞘の一つ差し、夜の編笠は濟まぬものなり、服紗に手を差して、紋所を見入りけれども、咎めせず、鞆間の新作を先に立てて、下谷通りの田畝道を行くに、水鶏の音、馬追虫の鳴く音も小氣味の悪く思ふに、聲懸けて、遣らぬと云ふ。町人の悲しさ、思はず遁げ延びて、萩一叢の茂りに隠れて、物の様子見れば、最前の男に同伴一人出来て、鎗長刀を抜き持ち、遠くは行かじと四邊を捜して太息を吐く。一人の云ふは、我宿の組垣を叩きて、助太刀頼むと呼ばはる程に、何の仔細も聞かず、先づは驅け付けしが、して是れはと聞けば、胸を押へて心靜かに語りぬ。其方思召の外なるべし、我戀を仕懸けし女郎に深く逢ひ馴れし男めと見えて、今宵もまた自由なる床入、憎さも爰にて刺殺さんと思ひしに、見失ひけるよと申せば、是れに類友なれば、それは道理と、また四邊を穿鑿して、足許に一重羽織の落ちて有りけるを、逃げさまに是れを落すやと、其まま棄てて取りては歸らず、此草叢心懸りと鎗尖耳を擦りて、魂消ゆるが如し。昔男の







其時の事を思ひ遣ると云へば、新作も今は口を開きて、過ぎし年の三十日の夜、萬づの買ひ懸り、店賃乞ひ立てられて、隠れしは今の切なさよりほと云ふ。此中でも大笑ひして、其れより道を急ぐに、また三野〔山谷〕歸りの酒機嫌の男ども、無分別に抜きける。とかく夜は通るまじき所なり。やうやう大門口に走り込み、足を定め、伊勢屋の久左衛門方に行けば、皆待顔に撥音を休め、二階より来る張貫の藤助、鈴木町の才兵衛、平太蜘蛛の勘八、その他をかしい夥間の若い者ども、何れも下座に固まる。大臣汚れ足を見せ給ひて、太夫を思へば富士より磯傳へに歩行や跣足とのたまへば、新作大聲上げて命を二つ拾ふて來たぞ、この御祝ひに七日が間大噪きと、新町の三浦隠居の、君を残らず揚げましてと申しも敢へず、お宿の喜び、されども、どなたを誰れと枕定むべきも無し、大臣幸ひの結び有り、目無どちを始めて、取り當りたる娼様をそれぞれの縁ぞと有れば、何れも喜ぶ事限り無く、藤助、紅打の手細に目を塞ぎ、裏附の袴裾高に、黄色なる肌着一つに成つて我が娼取る日此時なり、辨財天女も憐み給ひて、見好き御方に取り當らせ賜はれと、觀念して、敷板踏み鳴らし、物物しや手捕にせんと、此處の隅、彼處の屏風を叩き廻りぬるは興あり。女郎は心中に顔を懸け、顔はくは太鼓持に抱き附かれぬやうにと、身を縮めて駆け廻る。徒らなる女鼻撮むも有り、または髪に畏懸けるも有り、寝て歌唄ふて逃げるも有り、終に捕へる事を得ず。小座敷の入口に、最初から逃げもせぬ女の有りける。腰にしがみ付き、これじやと眼を開けば、若野とて局女郎なり。是非に及ばぬ仕合、一座笑ふての後、新作が番とて身拵へして踊り出づる。抑も此男、背短にて、猪首に

して、口中厭なこと有つて、片足少し長く、白目勝にて、天窗は六筋右衛門にて、何に一つ取得無し。是れに取らるること悲しく、おろおろ涙に成つて駆け廻る。新作豫て足音を聞き付けて、好き人ばかりを心懸けるに、案の如く、若い太夫様に取り着き、是れにするぞと苦々しくも遁さず、目隠しを外す時、我身は親の日じやかと云はれければ、其まま放ちける。急がしき中に軽口とぞ響めける。險しく追ひ詰められし女、袖垣を越して縁の下に屈む有様、いとはしたなく見えける。折しも打水のしめやかに、袂も裾も浸して、其儘は座敷に上り難し。假初の事も、悪しく申し成す辨間口にて、まだ下野の邊は、晩稻田を植ゑますとや、五月乙女が入る由、其御姿にて履はれて御座りませいと、愚かなる者どもの沙汰なり。數年此町の諸事を見分け、聞き知る程にも無き事なり。美はしき衣裳附の腰るをも構はず、唯だ新作が手に入る事を情無く思はれてと有れば、眞ある所を何れも感じける。新作も是れを聞きて、其れほど嫌はるる君を捕へてから面白からずと、是れまでと止めける。

心玉が出て身の焼印

世に無理は虎落の目安を書くよりは、接木に一輪咲きし簪を折るよりは、銀極めの遊女を唯だと云ふは、横に車道ぞかし。川原町四條の角屋に湯屋あり。菊屋の小八、二階座敷に東山の風待てども、汗の止むこと無し。彼の湯に入り罷りて、役者交りの人込、ざつと揚り場に散らしなど飲み、浴衣疊の間見合はせける



に、三十四五にて小作りなる男、損ねぬ鬘を撫でける。其櫛見知の有る二つ紋なり。友とする人に、灸の蓋をして遣りながら、語るを聞けば、我が太夫に逢ひ初めて、まだ間も無きに、某が定紋附けること、祇園八幡自慢はせぬが、成らう事かと、人に聞けがしに咄す。廣い都に居ながら、さても疎し、あれを知らぬげな、戀の目印とて、其時逢ふ程の客の紋所を書かせて、櫛何枚か拵へ置き、其日のお敵に合はせて挿すは嬉しき事にもあらずと、紋ある櫛を二三枚取り出だし、小者などに取らして笑へば、彼の男短く二つに折りて、大釜の下に燻べける。猶赤面して着物取り急ぎ、白柄の脇差に氣を附け、喧嘩眼もむつかし。益無き所にと、足早に歸りて、彼の里に離れば、折節扇屋の長左が座敷は、今日嘉祥喰とて、二口屋が饅頭、道喜が笹粽、虎屋の羊羹、東寺瓜、大宮の初葡萄、粟田口の覆盆子、醒ヶ井餅、取り交せて十六色、斑女様への貢物、勢田の長橋幾世と云ふ禿捕へて、我れ人前にして、旨き物を喰ふも、今二三年の娯樂、何なりとも望み次第、太夫様達も喰ひたい虫は鳴けども、身過とて堪忍強い事やと、西瓜を香の圖に切り散らし、末社の左兵衛が願、廣口傳左衛門に成りたしと云ふ。女郎なればとて腹は無きものか、さらば喰つて見せんと、さながら山吹餅も色深ければ、御室の櫻の實など、齒に乗せても面白からず。さる太夫殿、葉隠れに物の美はしき葡萄一房見しを、はれがなと思ひ、手枕をして何時と無く寝入らんしたとて、小才覺らしき引舟が、絹平袷蒲團を腰より下に懸け置く。前袂みの帯自然と解けて、

然かも拵指反つ

て色あつて、少し髪縮みたると思ひ合せ、此無疵千枚道具なり。こんな物を買はぬは、目の利かぬ大臣やと、せめては見て居る中に、正しく左の袂より、鼠一疋飛び出で、葡萄に喰ひ付きしを、追ひ廻はして行くに、火入にせつなく驅け込み、また袖口に入りける。座中不思議の想を成し、もをし、もをしと起せば、太夫目覺まして、險しき夢を見し事よと物語ありける。先づ色の淺黒い坊主めがと咄し出だせば、其座に林庵居合はせ、是れは私の身の上のやうで、氣味が悪いと申す。心には懸けさんすな、其他二三人して、己れを追ふて廻る程に、火へ入る事も構はず、恐ろしくて逃げけると云ふて、脇腹を見給へば、火傷ありありと、是れは如何なる事ぞ、身に覺えの無きと歎き給ふ。附者の女郎、初めの概略を曝けば、太夫涙を溢し、何をか祕すべし、我が一念に一房を思ひ入り、鼠と成りし夢見しが、さてもあさましや、勤めの身程厭なる事は無しと、有りのまま申されし心中感じて、世間へは沙汰すること無し。唐土の畫師も姿の牛と成り、上戸の目からは横川の杉も皆酒林と見ゆる。雷嫌ひの近くには、碓も挽かれず、可愛い女郎の出齒は、判官殿の生れ變りかと思はれ、頬先の赤いも合點にて、懇ろすることをか。女郎も明暮の勤めさへ憂たてき事なるに、何んぞ間夫狂ひすること常の女の不義よりは憎し。人の妻に成る事は、譬へば賤しき者の娘も形に引かれ、姉の死後へ行きて、年寄の男持つも有り。商賣の勝手づくに、下人を引き揚げ一つにするも有り。敷銀を見懸け、在所より養子をするも有り。七明年なる親ども云名して、年長けて娘は思ひの外美形に育ち、男は元天窓に成るも、未は見ぬ事なり。是等の女の身にしては、當世男の河原者の風







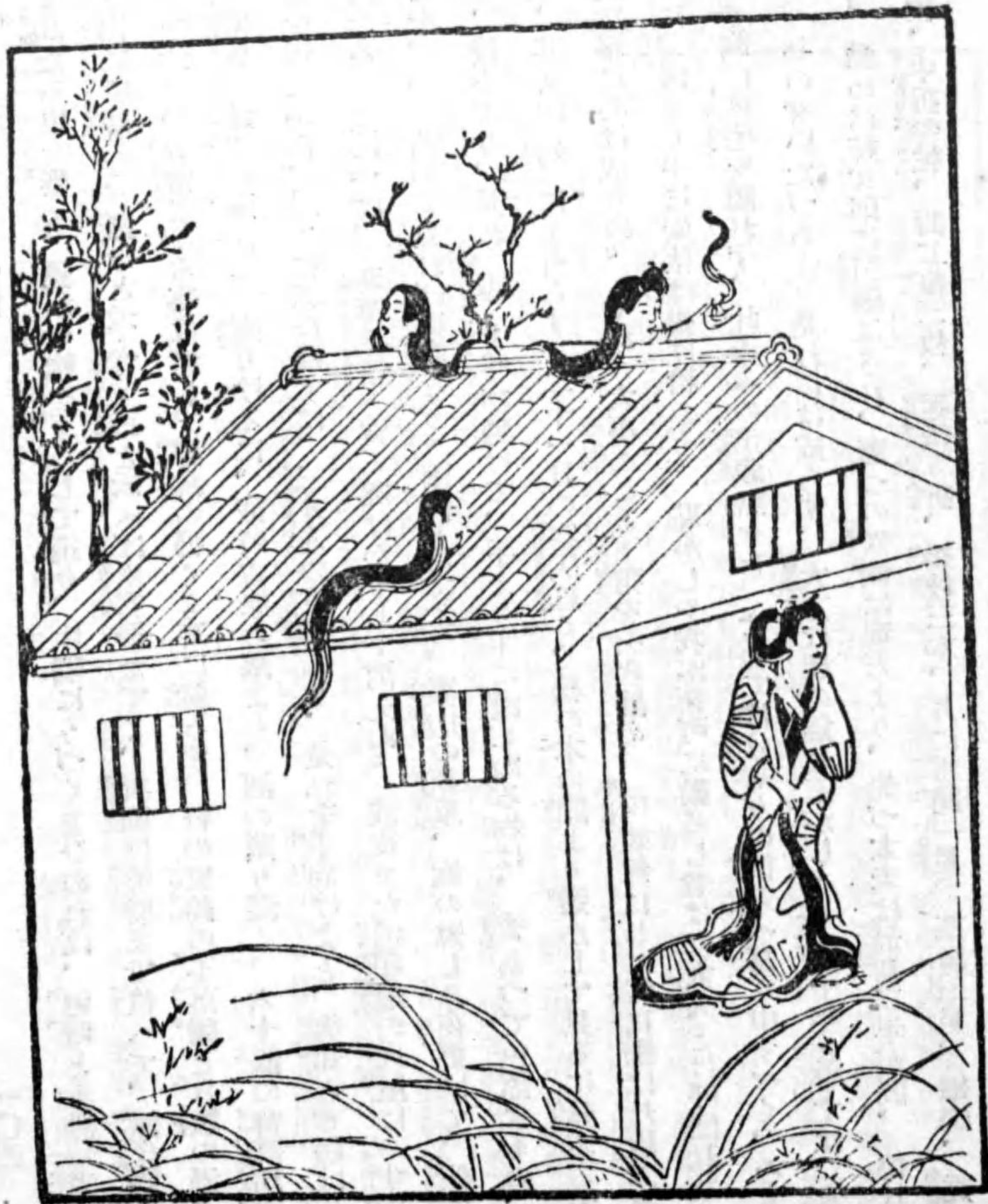
俗を寫して、中折の髮先、拭白粉の地顔など見て、あんなを欲しやと、思ふも憎からず。其れさへ隠居様恐ろしく、茶の下の薪を減したり、眞綿引くこそ有れ、何れ嫁取りて人の懐子を乗物直ぐに奥座敷に掻入れて、愛敬の守護札交はすなど、貝桶渡し、奉公躰の置き所、腰巻したる女、長柄加への品を盛り、千代襲の白無垢、皆紅に着替へ、娼介添、仲居、腰元さざめき、釣夜着、長枕、帶懸の屏風、此床初め、女郎狂ひとは變りて、一代一度の大願、下帯ばかりの裸參詣、振られる氣遣ひも無し。また丸盆に二つ盃、石皿に小蛸魚裂き入れて、口の欠けたる徳利に小半合入れて、隣から来て、鼻口が取持つ縁組も、世の娯樂は同じ。とかくは身過が大事、明日から精を出しやれ、井戸は遠けれども浅し、酢醬油が入れば筋向ひに有り、今夜は宵から寝やしやれと、燈心滅して歸る。女郎の契も、馴染みては變る事無し。萬づ勤める男には、大方の事は始末して、物遣はせぬこそ善し。一年に埒明く身も、少しは間の有るものぞかし。あまたの男に逢ひ馴れ、手管するもまた男なり。然かも醜男に物まで取らして逢はるる太夫あり。親方には損を懸け、其身痛め、何が男珍らしかるや。いろいろ分別して見れども、是ればかりは合點行かず。

## 七墓參詣に逢へば昔の

親仁の手前、八十三度の訛事も、元の木阿彌、藤は松に連れても屈曲は直らず、可惜春を過ぎて、今と成つて、合點が行けど六年晩し。過書町の祖母聲にまで、世に捨てられし身は、まだも坊主に成らひではと、三

十六の夏四月二日より、墨の衣に變へて、南中島に好誼ありて、長柄の橋本寺の跡故りて、塚も鋤かれ、年貢地と成る片蔭に、玉笹など切り敷きて、結べば柴の庵、崩せば舊の野原、夢の假枕も無く、小鍋一つに盆二枚、是れでも埒の明く世やと、蚊拂ひの團扇を樂み、念佛の代りに、歎きながら月日を送ると、調子違ひの小唄、三味線に合はしうとも思はねば、人に聞いても貰ふまじ。されば東の小相撲と云ふ里に、身を長明が方丈よりは軽く、一疊敷の板屋を造り、四つ車を附けて心の行く所へ引いて唄ふて、撥音を明暮の娯樂にせらるる道心者の有るとや。近くは良き友なるに、是れも如何なる人の果ぞかし。よもや團ひなど買ひし男の時とは思はれず。怨めしの世や、備利國が針立に成るも、木半が土人形をするも、島吉が小道具店出すも、是れ皆味な事知り過ぎてなり。女郎の襦袢を見出だし、揚屋も見えぬ客の内談を頼み、遣手も氣に入る顔をして見せ、町からの友も萬づの差圖を請け、此里の男達の若い者も自ら近付に成り、東西の門番も聲を聞き知り、物遣らぬ末社までも付き随ひ、口拍子の萬六、舞まひの惣太夫、此所の物もらひ、犬も見知りて、咎めぬ程に成りて、さのみ物をも遣はずして、慰みの深く成る時は、手前に有る物を遣ひ絶えて、世間にはき掛け帯の時花る時、袖縞の丸紐も思はしからず、同じ着物を下上に替へるも、五度や三度こそ、不埒を宿屋より見て、後には逢ひたがる女郎も除けて、自づと氣の毒重なるに、荷も思ひ留まらず行きて、人も面白からぬ落の嘶、格子塞げて、差し捨ての杯手に觸れ、やうやう白齒の袖に便り、上する女に水一つと云へば、返事もせず持つて来て目の上から差出す。是れにも懲りず臺所になじり込み、







ぐるり高なる娘を譽め、棚から物を下ろして遣り、片隅にうづくまひぬれば、何時とも無く道方する男も、心安立出でて鯉など擲けと云ふ。否と云へば當言憂たてく、折節は煙管まで浚へて、無念覺えて幾度なるべし。今此身程氣散じなる事は無し。野鳥の鳴くも耳に闕らず、軒の風鈴の不落離と日數の過ぐるも由無しと、無常野の焼場を隔夜して廻りけるに、或時吉原の墓より、酒の薫り深く、六十餘の背高坊主出でて、我れ佛體を得ながら、浮世に思ひ残すは、三升入の吸筒あり、是れを手向けよと、御知らせ賜はれと云ふ。御身如何なる人と問へば、葉帯葉帯と賣る聲ばかりして消えぬ。或夜また道頓堀の火屋に一寸法師の夏書して居るを、心を留めて見れば甫春なり。雨降り風立ち、築山の新墓、物の淋しき夜更けて、此處に繞りて立歸るを、後ろより、是れ志と呼び懸けて、手より手に渡しぬる物は、香あつて色黒きもの、唐胡桃ほど丸めて、其女は幻にも有らず、二十一日の空仄紅く、松の木の間より透かして見るに分ある姿、後世を忘れ、異な事に心は成りぬ。やれ一大事ここと下帯を引き締め、汝如何にして假に顯はれ給ふぞ、殊更今は夏なるに、何とて手に炭俵は掲げ給ふぞ。恥かしや我が新町に勤めし昔は、太夫とは呼ばれながら、内證の苦しさ胸に火宅を離れず、此苦みの遺瀨無きを、せめては分知りの御方へ語り申すべく、そもそも傾城と成る事、其の身いたづらより是れには成らず、大方は親の爲めぞかし。公儀十年と申すは、水揚の日より定めぬ。勤めは姉女郎に引廻はされ、萬つの當飼は親方より、先づ太夫は最初二年の間、毎日伽羅二燒、奉書五枚、中折半帖、封じ紙三枚、延紙五折、揚枝三本、月に雪踏一足、草履三足、蠟燭、禿の仕出しまでも、内より拵へぬ四季の衣裳も、正月には上着二つ、下着二つ、埃取の木綿着物一つ、四月に袴二つ、五月に帷子二つ、單衣一つ、七月に帷子二つ、浴衣一つ、九月に着物一つ、仕立直し物一つ、其れより下、位次第に萬事の相違あり。天神に一年、圍ひに半年、店の女郎には三十日、諸事を内より賄ふ事、心易き程客も早く附くものなり。禿に髮結はすまでも相違は無きに、太夫の禿は、月に二百、天神百、圍ひ六十、局の禿に三分、斯様に異なるなれば、位に成る程身持のむつかし。二歳過ぎて、銚銘さばきの身と成れば、着類の他は手もめと成つて、色揚げの染賃、糊の錢まで、勤め内なれば、貰はいで成らず、呉れる男は稀なりと、涙を流して申す。聞きて一つも役に立たぬ事なり。さて持ち給ふ炭こそ不思議と申せば、過ぎつる十二月雪の夜に、相果てる時まで、此炭の口を開けず、浮世に残すを、惜まれし一念の、手は汚れても離さずと云ふ時、種種の女の首が飛び來りて、彼の遊女の身に喰ひ付いて苛む。是れは情無し、各の亭主の白痴にて身上の續かず、地黄丸飲まるるを、我れが知つたる事か、身は賣物にて、人を誑らするが本手なりと申せば、ばつと消えて、禮場の朝風茂りの草蓬蓬と、石佛は在りし儘にて立歸る。あら恐怖やの。

忍川は盃が越す

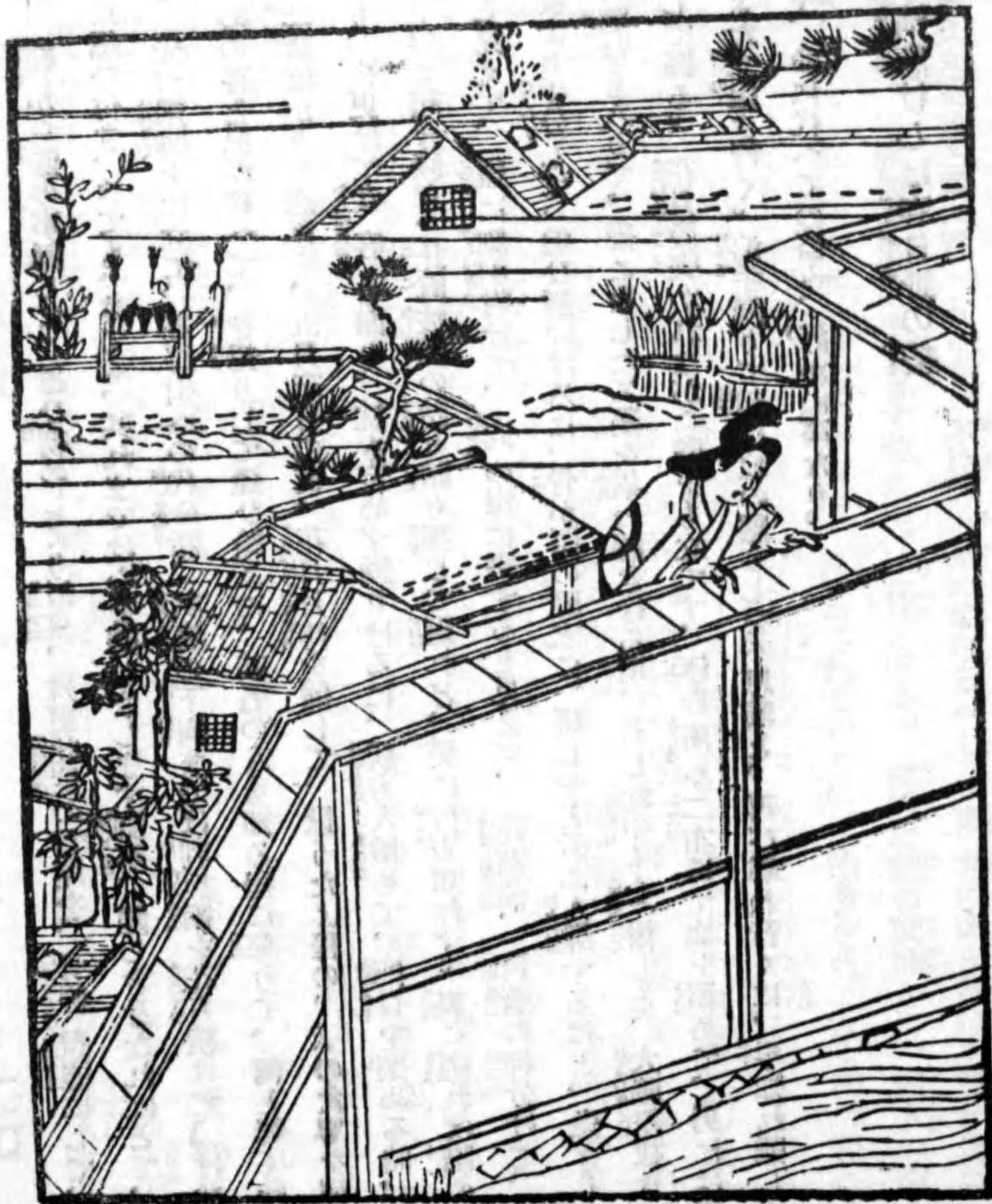
江戸じやとても、遺失してある銀は無し。さる時、大門筋の仕舞棚に昔長持の目出たきも煙幾度か遁れしを、誰が持ち飽きて、今賣物と成りぬ。或人求めて、申を洗へば、雲紙巻かれて、二重底に、百兩包にし



て、空所も無く排べ置く。此者俄長者と成りぬ。こんな仕合、女郎買の當所には成らず。とかく行かねば見えぬに由つて、戀も無かりしに、八丁堀の薪屋の手代、三野に懸りて、それぞれの娛樂、前巾着限りに、局歩りきして、彼れは鼻筋通り過ぎて思はしからず。是れは物云ひが氣に入らず。其處なは振袖厭なり、又は眼つき細過ぎたり。髪縮みに思ひ付けば、手足が太し。小唄能く唄へば色黒し。出尻は嫌なり。耳の小さいも宜しからず。瘦せたは面白からずと、三町残さず、二十四五遍も見合せて、後には目紛れして、心の急くままに、つい揚りてからは、何れにても可愛さ變ること無し。女も此男の心根を早見透し、嬉しがる事のみ話し出して、別れさまに扇を取りて、また逢ふまでの形見にと、當字交りの古歌書きて、此中に來よとの、言葉違へるは厭だによと、門に見送り、おさらばへと云ふ。此忝なき、外に何か有るべし。歸りに駒形の茶屋へ寄りて、打置の温飴急がせ、酒一つ過ごして行く時は、川尻も恐れず、二本道具の大名も、此身變ること無し。先手はいはいと聲懸けけれども、天下の町人の氣儘は、足早にも除けず、宿に戻り、親方の十露盤持つて居るは、負六法組の反刀よりは恐し。心魂に是れは忘れず。直ぐに歸れば善きもの、無用の辻に、揚屋歸りを訪めけるに、其年も花月が仕出し、洗鹿の子の虫盡、本國寺の、おつやが一つに三歳つつ心を盡し、六年目に着物二つ縫ひ立て、染めぬ先より、一つは御所方上がりぬ。今頃は是れ五十兩に調へて、さる人都土産に送られけるとかや。分ある下着、中は國盡しの縫紋、武藏の此處に活如來、彼の男見初めて、局の娛樂を忘れ、禿に組りて、お名を聞き分けて、手遠き戀の思ひ立ち、且那にお断

り申して、また十年切増して、前銀借れども、百五十目、とても是れでは抄取らずと、明暮分別して見れども、天から降らず、地からも湧かず、世を觀念の明窓、心の月も射し入る、軒には霜の曙まで、獨り寝られぬままに、身を一萬兩持に成りて、先づ普請からして、人もあまた置きて、花月を請け出だして、遺手にも宿にも、小判の花を降らして、京から妾を置きて、物の靜かなる向島の下屋敷、二百人前の淺葱碗、三町ばかり牡丹畠を拵へ、我家の自由は、花車に乗つて歩行きて、鼻も人にかませ、月代も夢見て居て剃らせ、油火見すにと、胸算用すれば、一萬兩も二年までは無し、三萬兩の分限に成つて見て、思ふままに遣ひて見るこそ、心ながらをかしけれ、せめて命の内の思出に、花月に假の枕もがなと、人の知らぬ涙を流し、所詮長らへて居るに、斯かる憂き事も有りと、半欄より仕着施の正月布子取り除け、脇差は取り出だせども、否否死んでから、此戀の便りには成らずと、先づ心に合點をさせる内に、横雲を引捨てて、夜も白け渡り、奥に戸開くる音、且那が睨して、利兵衛、利兵衛と呼ぶる。心元無く内に行けば、俄かなる依頼事、太儀千萬ながら、其方は高野山に參るべし、母の三十三年なり、毎年一兩つつ掛けて、三十三兩、是れにて石塔を供養し、日牌を建てて歸れ、何時その年は、我が參詣申すべしと、今まで御骨桶も是れにと、また親に別るる如く袖絞りて、路銀珠數まで賜はりぬ。内儀も手拭、霰に大豆など煎り交ぜし菓子袋の餞別、志ある下女どもも、思ひ思ひに御明も托てける。頼てと立ち出で、品川の片原町にて、旅裝束を取捨てて、横渡しに三野へ上がりて、日頃立寄る茶屋を頼み、伊豆の大臣に仕立てられて、種種手を盡して、花月に逢は







せけるに、頭から餘の事無しに、思ひ初めしより以來、殊更此度の首尾を、骨佛證據にして、残らず語れば、不便に思ひ付き、さても、さても、其れまでは心を盡します御事、臆しき身なればとて、あたには爲すまじと、先づ飛脚を仕立て、高野山への代参詣、其者の下向までは利兵衛を花月續けて上げ給ひ、自然の馴染、勤めの客と思ひ替へて、身揚りして逢ひ給ふに、其名の人も知る程に募りて、何となく此男も通はず絶えて、三歳ばかりも過ぎて、五月三日の夜、花月月待を催して、歌うたふ程の、人の女を宿に招き、酒の事重なり、夜更けて女客も歸り、枕も定めず睡りけるに、親方人檢めて、門口を閉める時、花月が見えぬはと、下男も起き騒ぎ、此處彼處の詰り詰り探して廻れど、更に行方知れず。裏に廻れば階の子懸けて、堀に退道と見えて、鹽に細引附けて、向の岸に寄すると見えて、花菖蒲、村瀧の押分けて、其足跡を慕ひ、日本堤より手分して、追ひ懸けけるに、骨が原の野末に、嬉しやと云ふ人聲するはと、急ぎし内に見失ひける。折節秋も入りて、麥こなしたる藁を累ね置きける所、若し此中も心憎しと、大脇差抜きて、あらまし突き探して歸る。花月股突かれながら聲をも立てず、疼む所を二布にて血を留めて、男には何とも云はずして、また立退き行く。追手歸りて鞘に血の懸りしを不思議と、再び尋ね行くに、早知れ難し。請出す事の成らずや、命に代へての盗み、好かぬ事なり。

情懸けしは春日野の釜

戯女の袖吹き返すと讀「詠」みしも、木辻の古歌の姿なるべし。東北の突き抜けを鳴川と云へり。昔薩長大將の息女に、中將姫の誕生まします跡とて、三棟と云ふ。此處に藁の屋幽かに、燈火の消えがてに、誰れ住むとも知れぬ所へ、此里の變化たる人に、誘かされて行くに、色ある女、人も待つ程こそ有れと、少しは恨み顔にて、太子の御傳記を、つい讀みて居る面影見るに、大坂にて盃の合を頼みし事も有りつる女なり。爰に名を變へて、橋姫と云ふ。其まま鬼にして、噛み殺されたくも有りて、其夜は闇を幸ひに、娼まじりに揚屋探し、妙庵方には、井筒、さほ野、此所の出来もの、難波に何か劣るべし。此里はすべて團ひに定め置きぬれば、良い分別が損ぞかし。井筒屋横手の權之丞まで、詠め廻りて、一人も残さず呼ぶに、十九人より他無し、昔に變り物の寂びける。さる人の大屋敷に集めて、どれに心を寄するとも無く嘆きて、風呂焚かせて、男女の亂れ入り、戀の夜なればこそ、晝は愉快過ぎて有るべし。翌の日は末の秋の中日、洞の紅葉も今と、色町より直ぐに誘はれ行くに、かすり井も朽葉に埋もれ、袖垣の森の邊は、櫻狩の折節、所の人の手馴れし振袖を打懸け、ばらりと落つるは、袖に時雨の音のみ。若草山も名を變へて、枯葉の東原に軒敷かせて、是れはまた高尾、牛籠も中紅なるべし。夕日の射し所も無くて、詠め暮れなん、酒の後亂れ、一番囃されしに、秋鹿の近く集り、果てればさまざまに立退く。笛は無かりしに、鼓にも寄るやと優しく思はる。一つは上手の験なるべし。また梅もどき荒らする小鳥を、宗益と云ふ人の吹矢にて一羽も留まらぬと云ふ事無し。鴨は申すまでも無く、雁も吹矢にて留める事、また有るまじき名人なり。歸途は春日







野に入りて、尾花片寄せ、萩ばかりの野に行けば、此前幾佐が此處にて、茶の湯出だせし所、其れよ其れよ唐蔦の懸りし、岩を目覺に尋ねければ、石の割目に其時打つて、竹花入懸けし折釘残りて、昔を今に、やれ懐しや、其女是れなる栴より鎖を下ろし釜懸けて、そこに袋棚、ここに懸物は、大坂より言づかりて、宵に渡せし男の文を、其まゝ一夜に表具して、手拭懸の竹こそ枯れつれ、蔀石は人も崩さず、ここが腰懸の跡、其日も忘れず、神無月の初の四日、霜は日影に消えず、奈良草履の穿替へも、如何がと思ひしに、挟み箱より大杉原を取だし、何東か假の飛石に排べて、客を通せし事、世に聞故れて、大和屋が狂言の種とも成りぬ。斯かる所に惜しき女にて有りつる。其翌の年の二月に森五が七日の能を見に罷りし時、故郷にて高間に逢ひし、昨日別れを今日忘れて、幾佐に思ひ付き、七郎兵衛が小座敷も、櫻無き山に櫻を見ると思へば、素人書の襖に、石竹は長う、柳は短く、鶯の足に水掻の有るも面白く、床に入りての手鍊、互に位取つて、日を續けて五つ、情名残も無く、物の見事に振れども仕方憎からず、十四日の薪を見果て、明日は大坂に歸る夜、率て去ぬ男に是れが成るものかと、黒髮跡は見苦しき程切つて、俄かに泥み、身は任せながら、其れでも帯は解かず、涙溢すばかり語りて、明日の目留めて、若紫と云ふ野懸遊びに品替へて、幕十張二丁程の間に所所への仕出し、女郎十八人、大鳥居まで忍び駕籠、其れより木地の平笠に紙緒を附けて、上着を壺折、皆竹杖もじやれて、晝までの酒限り知られず、また都にても成るまじき旅送りに逢ひて歸る。業平も是れにはよもや。

好色二代男

諸艶大鑑

卷五

目錄



戀路の内証疵

一、島原大夫花奢遊びの事

二、大判釣つた我も物好過ぎる事

三、仕合せは俄聲入の事



四、夕七分の玉も徒らに

一、阿波座は忍び揚屋の事

二、年忘の職立に口明きて居る事

三、軒下の難義世はなまよひの事

好色二代男

諸艶大鑑 卷五



三 死なば諸共の木刀

- 一、三野若山今少しの事
- 二、花夕刈漢聲を賣る事
- 三、太誠は沓の次良が事

四 夜の契は何じややら

- 一、長崎金山袖乞に逢ふ事
- 二、俄衣裳は才覺の事
- 三、花鳥尤咄しの事

五 彼岸参りの女不思議

- 一、町の女房品定め事
- 二、戀は見え透く幕盡しの事
- 三、遊女は昔の残る事

戀路の内証疵

雪の中より咲き初めの、花崎が申し出して、其比都の御太夫六人心を一つに、生花の會せられし事、優しくも見えて、梅水仙の二色眺めなり。柳の己れと枝垂れしは更に心も移るぞかし。また天性を受けぬ玉簪を、窠咲させしは花も傷みて、長の短い女郎の無理に爪先立てて歩まるるが如し、美しくうてから嫌な所あり。さる太夫殿、常にも短氣にして、良き客取り放されし事度度なり。禿が水次持ちて参つて、置所悪しきと仰せける程に、また置所を變ゆるもお氣に入らぬとて、花切の双物にて打ち給へば、鼻の先に當り、生れも付かぬ疵附きて、末に勤めの歎きとも成りぬべし。今の奥州に少しの面疵如何にして附けるぞや。有つてから太夫に備はりし女ぞかし、二つ取りには無くて有りたし。禿も召使ひなればとて、さのみ荒く當るべき事にもあらず、次第送りの皆朋輩ならずや。難波にても木村屋の越前、柳と云ふ勇深き手管、後には血文の取り交し、萬更世の勤めも外成し、命も捨てて掛かる時、親方切諫して、重ねて逢はぬに託言しての後も尙止めず、十二歳になる禿を三日物をも與へず、括り揚げて、折節は身より血を滴らす憂目を見せつれども、頼むと云ふ一言忘れず、又は假にも主なれば、太夫様の御事に、身の碎けるも厭はで、舌喰ひ切る所存見えし時、細解きて、其れなりけりに濟みぬ。其れより日數経りて、越前少しの事に、彼の禿を人中にして、焼きたる煙管にて打たれける恨み、宿に歸りて申し現はし、難儀に逢ひつる事も有り。柳八が八千







代に忍びの濡も、禿が危き手引せし事にて、昔日井筒屋にて、女郎縁の板敷に長居して腰冷え渡り、取外されし音、一座の耳に入りて笑ふ時、其儘禿、身悶へして泣き出だし、暫く止むこと無く、此座の興も覺めけり。人立寄り如何にと尋ねけるに、今屁をこきましたを、宿に返らば、よもや此儘は措き給ふまじ、抓り殺さんすで御座らうと、また泣くを、やうやう諫めて、太夫様の手前、よしなに申し成すも可笑し。此賢さ女郎の心助けぞかし。京は嘗て禿の才覺も要らぬ所なり、引舟あるが故なるべし。太鼓持、末末男、なかなか間夫の成らぬ所ぞかし。女郎しどけなく豊かに、外の男と同じ枕物語、旨過ぎたる交りなれども、脇から眼を遣る女郎も無し。況して宿より忙しく心も着けず、床放れての朝、夜前の首尾互に聞く事も無し。遊女は斯く物和らかに、人に身を任せて、氣に入るものと覺えて卑しからず、都の風俗に何れか増すべし。一切の本地も此處なれば、此道の學問の島原にて、十年ばかりに諸分覺え給へ。十萬億は唯だ黄金なり、此卷巻に賤しき金銀の沙汰宜しからねど、元來は此事なれば、云はねば聞えず、云へば口説に成つて、人の欲しがる物は是れながら、花奢には見えす。出口の藤屋に、上京の常法師の物數寄にて、若戎の懸繪に、釣の糸長く、大判繋ぎて、左の脇に挿ませけるが、此處にはまり過ぎて、人の目立つ事を、彦右衛門も心有りて懸けざりし。惣じて出過ぎたる事に善き物は無し。源助が額も、まんが尻つきも、寶物で無けれど、同じくは人並が善し。大臣も内端なるこそ奥ゆかし。其れでは此里面白からず、日に増し夜籠めての騒ぎ、太夫を自由せしを見ては、偶逢ふ男の恨むも理なり。六條の時無用の買論、大坂の法師の浪人

に刺殺されしも、丸屋が座敷に那波屋を見せ掛けて、野鐵砲撃ちしも、中らねばこそ有れ、威勢に任せて、我儘すること勿れと、皆早合點なる男們、端近く酒にして、今日も夢に暮れて、また明日の慰みを、思ひ思ひに申し合はする折節、算崩しの布子に、馬乗の開きし木綿羽織、目貫の落ちたる小脇差で、古編笠の下に頭巾深深と、鼻緒違ひの雪踏を履き、親骨の無き扇を翳し、揚屋町を四五度も行き返り、外にも出懸けたる太夫も有れど、心を留めず、小歌ある所をも耳塞ぎて、立戻りては彼の店先に佇むを、始めの程は指さして有りけるが、戀は何れか、此娼様達の中に、彼の男の思ひ人ありやと云へば、はしたなき女は笑ふ。情らしき方は、己れかも知らぬにと、襟を重ね直し、風情變へらるる、興あり。其後出額の源助と見懸けて、遁さじと飛び附く。覺え有らばこそ二階へ駈け上り、日比勝手を知つたこそ此時の用に立つ、裏へ逃げ延び、肴置の戸を差籠めて隠れぬ。彼の親父無念と齒咬を成し、錆びたれども怖き物を鞘に納め、己れ幾程か、此世の酒は吞ますまじと立歸る。様子知らねば大人氣なく、彼者に手も指されず、源助が行く所探して見れば、汗は玉成し、脇差の抜けぬやうに下緒と持ち添へ、人聲を聞いて力を得、水が呑みたいと申す。さても氣の弱い奴と叱れば、命勝負と、女郎に寶懸仕手の無いとは、其身に成つて見ねば切なさも知れぬと、口は減らず、やうやう立ち出づる。子細語れと申せば、皆私が悪るう御座ります。今の浪人は、我宿の向ひ、丸太町に年久しき住まひする、あれが娘三歳の霜月に、店に遊びしを、愛の餘りに、遠掛に抱かうと呼べば、走りかかつて下に落ちて、浮世の限り脈も揚りて、氣附も通はざりしに、百年目とて、



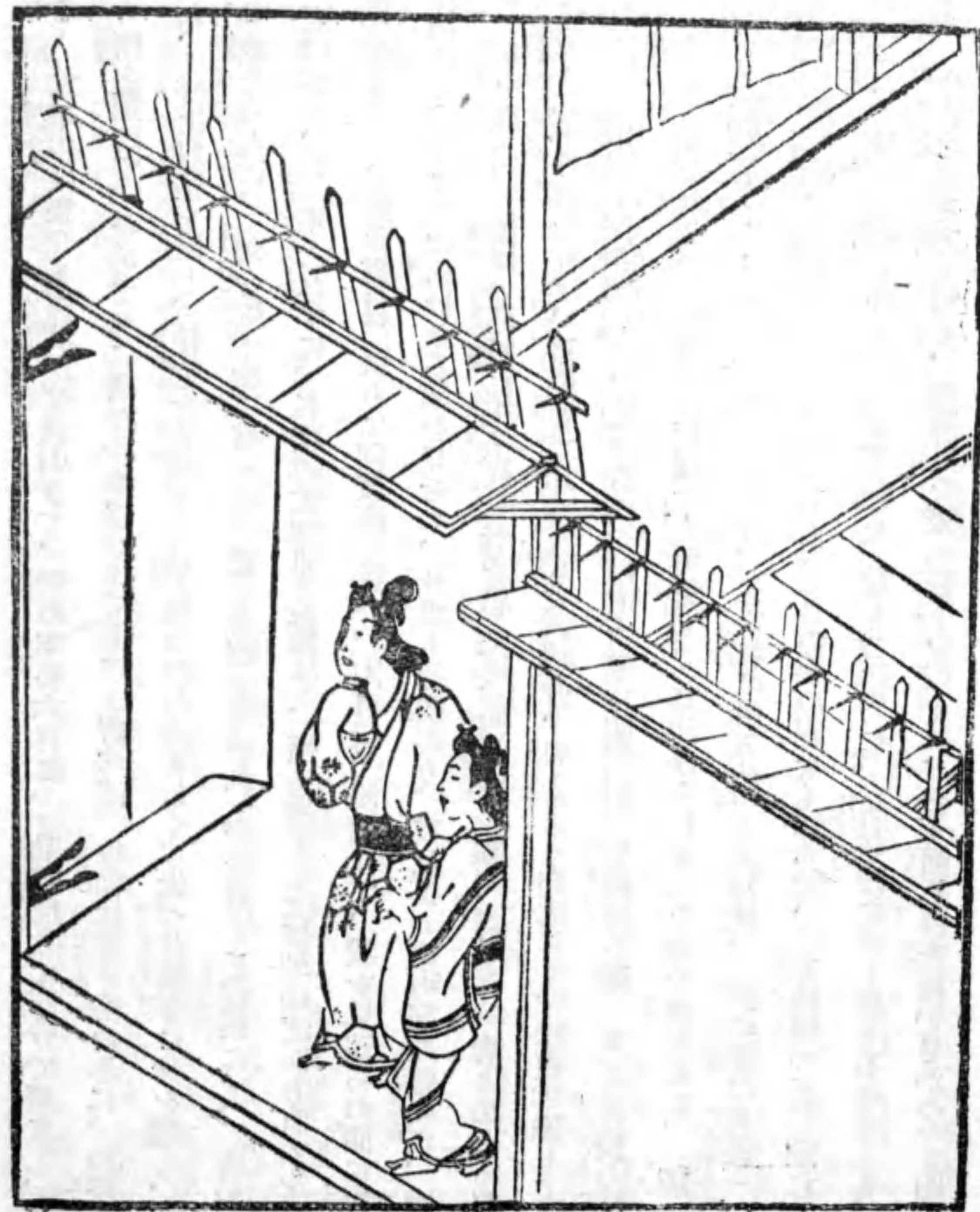
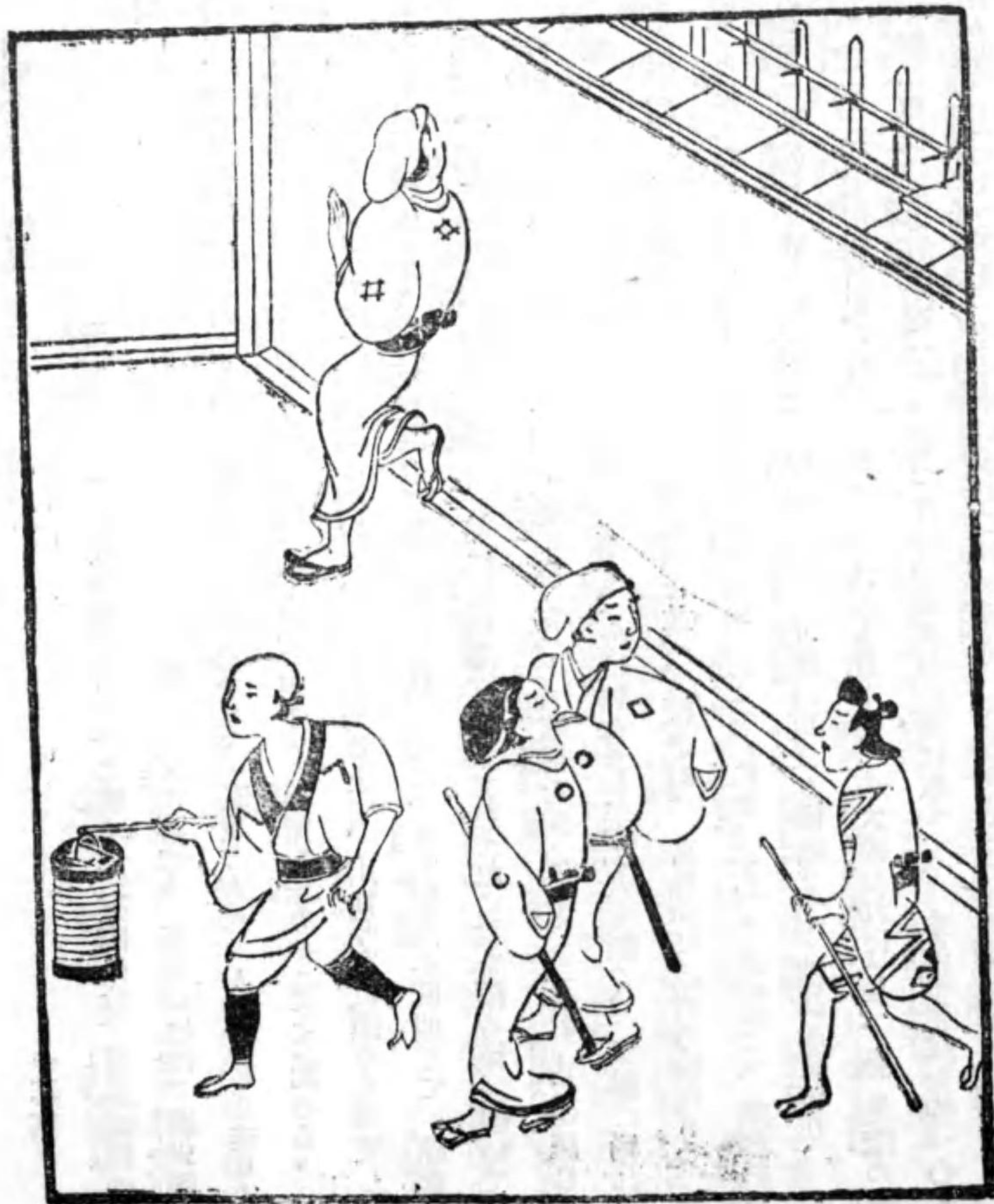
我に恨みを爲さざりし。後命は有れども内股打碎きて、歎かはしきに年を重ねて、此娘今十四歳に成りぬ。姿は都に又都の女なり。是れに付けても母の親我れを憎む事、尤と思ふ中に、尾羽を枯らして立てぬる力も昔取を捨てて、人置の囃が平に物せよと、勧めるを幸ひに、此色里の奉公を極め、身の代を渡す時、抱への親方我れに同縁問はれし時、よしなに申すべきを、少しの思ひも明様に語る。此事止みぬ。其れを其れを恨むると聞いて、此程は宿にも返らずと、始めを申せば、さても、さても酷き仕方なり、面影さへ美しくければ、女郎の勤め成る事ぞ、殊に脚布より下の思ひとは、今歴々の太夫達に、尻腫物も有り、田虫も有り、見える所の錢瘡も、是れには土龍の手して掻くが妙薬なり。さて此娘を其儘は措かれし、是れを序に源助に持たすべしと、此座に有り合ふ大臣取持ち、是非に貰ふて不思議の縁組、知れぬ世なり。

四匁七分の玉も徒らに

世盛の時、長崎通ひの商人より調へ置きし天川の玉一つ有り。少し疵物なれども、四匁七分あつて色好し。勘清織の前巾着に付けて、腰に紅葉の秋は、名月と云ふ娼に親しく、物の哀れをも知らず、人の分散に逢へるも可笑しかりしに、今身の上に目安附けられ、足元から酉の霜月に、入口には番殿しく、談道具の除け道も絶えて、皆貸方の物に成れる。やうやう家に久しき飛鳥川の茶入を、妹が轆轤引に静め、定家の三首物の表具外して、亂れ箱に疊み込み、漉き紙と見せ、彼の珊瑚珠は、猫の首玉に緝け込み、人の氣の附かぬ様に

して除けける。其年中は扱ひも培明かず長引きて、明の年の六月に、勘定仕立て三分で済まし、裸で立退くを、何れも情を懸けて、せめて身に着たい物は取つて退けと許せば、折節は帷子時なるに、色好き小袖を五つまで重ね、汗に肌着を浸し、住宅を立退く。早此心のあさましく、先づ旦那寺に身を隠し、茶入、懸物を江戸の有徳なる人に、判金五十枚に替へて、悲しき事を又忘れて、吉原の忍揚屋にて、吉おか「三字吉岡カ」に面白がり、二年たたずに、名残の太鼓叩き揚げて、残る物としては珊瑚珠ばかり有るを、伏見町の加賀屋より然る方へ、銀三貫目に賣りて阿波座に通ひ、山口屋、湊屋にて、我を見知らぬ鹿に焦れ、秋の野も次第に枯れて、今までは化けたる尾を見せて、此處も道塞がり、其れより新町筋の端局に、唐崎と云へる女に、夜の契を籠め、藤屋の葛城に相任せし昔を思へば、四年跡の雲立ち騒ぎ、奢りの山も見えず成りにき。頃は極月二十日過なれば、算用して見て人も來ぬ時分、暮方より物淋しく、殊更雪降りて横風、廓に居る空も無く、出口の小間物店に佇みけるに、村川六郎左衛門が、酔機嫌の睨して、長袋の煙草入が有らば取つて置けと、門まで送る女房に言葉残すも可笑し。見附けられてはと身を縮めるに、跡より砂の善兵衛、年忘れの戯立持つて、若し白魚が無くば、お吸物は輕う蜆、大汗雁、膳の前は貝盛一つで出しますと、世の忙しき折節、仕舞屋の大臣は、二十七八日の夜の闇をも知らず、大挑燈の光に連れて、六尺小者手車に乗せて、鈍太郎殿も賢くする事ぞかし、我も昔は男に、竹杖持たせし事も有りこしものと、八幡口惜しく、今宵傘借る方も無く、關町筋を東へ軒下を行くに、必ず節季の夫婦いさかひ、四十ばかりの







女の聲して、餅も搗かず朝の薪も絶えて、年取る所が有るかと思へ。其隣には、取揚婆様の御座つた、さあ腰を抱けと云ふかと思へば、初聲娘の子でも苦しう無いと父が喜ぶ。其向ひには、燈火竊かにして四人寄り合ひ、附目の跡で置かぬかと、貫錢の音は小勝負なり。其東の方へ、人けはしく走り入り、氣附けよ水よと云ふ中に、もは「二字最早ノ略」叶はぬと泣き出す。極樂を忘りやるなど勸める。人間一度はと思ひながら、餘所を歎きて行くに、南側の酒屋に、大釜が鳴るとて、山伏呼びに遣るも可笑し、何事が有るべし。其れより半町程過ぎて、まだ夜深きに鶏の聲不思議なるに、水右衛門が眞似して、諸藝を仕入る。犬に烏帽子を着せ、猿に袴肩衣、鼠の宮参り、前に反橋懸けて、それぞれに世を渡る業、覗いて見るも獨り笑はれて、此處を行くに、厚鬘の若き友、松離の爲めにとて寒聲を使ふなど、哀れ古を思ひ出づればなつかしや。都へ上り太夫どもが精進日を買ひし事も、今は難有きと云ふ人も無く、世界に稀れなる物を使ひ捨てけると思ふ所へ、丁銀入れし箱四五十荷も肩を並べて續きぬ。有る所には有る物なり、道頓堀の西より此銀借ると見えたり。欲しや是れ皆正月を任手の無い女郎們に欣ばすべきものと、無用の慾心出で来ぬ。次第に色里の節約しく成りぬべきは、此所の限、北濱の東より横堀まで、棟高き屋作り、人の指圖の分限に積り、總て三千七百貫目足らぬとかや。されども日本第一の大湊なればこそ、勸進能の金一枚棧敷も明けず、銀二百枚の手水鉢も買つて、肩つき一つ百貫目の質に取つて、水仙の初咲を待つ心も有り、白屋の六兵衛が開き分けし小鳥を、七十兩に求めて秋の朝待つ人も有れば、世は好き好き慰み、遊女程安きも

のは無し。自由ならぬ物ならば、人に命も有るべきか。さても浮世かな、男は勝れて、然かも分の道に賢く、心も賤しからず、女郎に懸けたらば、始めから誓紙なども出て、二度目には門までも送りて、人にもひけらかすべき男は、揚屋に近附さへ無く、酔ひも寝もせず歸る。また借家の者にしたらば、秤鹽賣るべき小男、片言交りの高咄、太夫に膝枕して、禿に腰を打たせ、寝ながら呑みて、亭主は輕薄盡し、若い女郎を呼び付けて、革足袋を脱がせと云ふ。着物は太織を花色にして、幾度か洗濯、袖も奥口に縫ひ直し、肌着は腰切に、白木綿の單衣、嫌な風俗は口利く局の女郎も言葉は懸けまじ。彼の親仁め人に遠慮も無く、女子們を呼びて床を取らせ、太夫を先へ遣つて寢温らせて置けと吐した。構はぬ事ながら、聞いて無理な事に腹立して、面切り割りたし。昔は我も野間屋の萬太夫に相任せ、野菊白菊二人の引女郎に、兩の足を摩らせ、遣手のよしに忝いと百も二百も云はせしに、残る物とては鶴菱の下着一つ、是れも破れ時に成りぬ。今一度欲しや。

死なば諸共の木刀

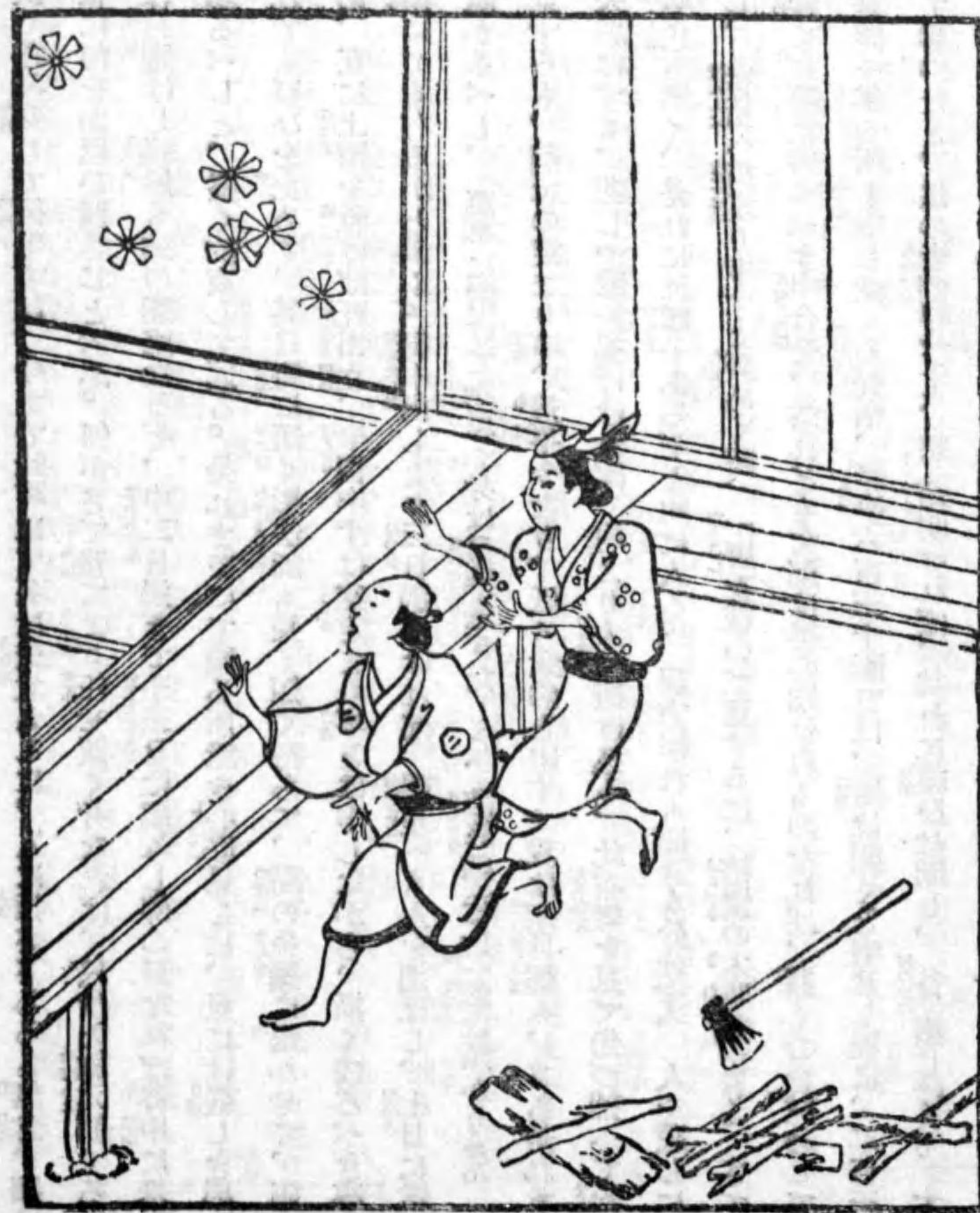
今日あつて明日は露も消ゆるに間の有り、稻妻、石火、煙草呑む間も、女郎の命程果敢なき物は無し。其れじやとて、先は見えぬ世の中、一日勝りに馴染めば、人程何愛「二字可愛」らしき者は無し。半留と云ふ男、三浦四郎左衛門抱への太夫若山に、年久しく相任せ、勤めの程も今一年に足らず、何處にても出前の女



郎は淋しく成るものぞかし。若山賢き太夫にして、お敵の氣を取る事を得て、贅音に變らず。是れ一つは半留心のまま役日の外勤めて遣らるる故なり。一日逢はねば、太夫も思ひに沈み、半留も通はぬ日は無し。或時申し交して纏てに請出し、本妻にしてから不足なき女なり。若山萬づに此上は無き志を半留まだ疑ひて、よき間を絶えて十日に餘り行かざりしに、其中の文書き盡して、後は涙と云ふ字ばかり百も二百目も、筆續く程封じ籠めて遣はしけるに、態と返事もせず、或日作り文して持たせ遣るに、太夫其日は葛屋の市左衛門方に、市谷のさる御方に出合ひ、一座に花夕、荊藻、連弾、連唄、古今名譽の上手、梁の埃も落ちぬるばかり、人皆心を移しけるに、太夫は唯だ思ふに迫る胸を擦すらせ、今日も又見えぬかと、人知れぬ涙の袖口へ、禿が状一つ差込み、心は先へ飛びて、箱階子の下様暴けなく、小座敷に入りて、明るる間も遅く讀み初むるより、常とは變る浮世や、苟に爲まじき夜遊に、身代残らず打込み、菰を被るより外は無し、日比互に申せし事も、勤めの障にも成ればなり、今よりは我事忘れ給へ、更に恨みに思はずと、眞を盡して書き送る。若山驚き、其夜に男着物一重ね仕立てさせて、明けの日早く、金子十四兩添へて送り、とかくは逢ひまして申上げたし、不憚に思召さば、夢も早く見え給はれと、くれぐれ申し傳へける。半留其衣裳を着て、忍姿に小者をも連れず、柵まで便り、顔見合せ、一度に泣き出だして、是れにて語るも由無し、太郎右衛門方へ行きて、若山申すは、さてさて氣の弱き御事なり、假令身を捨て命を懸けて、逢ひませいで指くまじ、御身は廢らず、御家の廢る事さのみ御歎きは口惜し、如何にも成らまじき御事に非ずと諫めて、先

づ御盃と快く呑み交して後申すは、今まで此町にて名は先立ちしに、人に指ささるるも無念、願くは一所に死なば、世に何をか思ひ残さじと云ふ。何がさて豫てより任せ置く身なれば、只今と腕元明くるを押留め、此處にては目懸けし揚屋も跡の迷惑なるぞ、中二日過ぎて十三日は頼みし佛の目なれば谷中に参りて、其れより必ず参るべしと、堅く約束して返る。是れまでにて残る所無き心底見しに、世には嚴しき男も有るものかな、是れでも疑ひを止めず、其日晝に傾く影法師も長く短く待ちて、局の金彌に退かせて、兩人入りて跡を鎖し籠め、互に上着を脱げば死出立、半留申すは寔定まり事とは申しながら、斯く成るべき事は知れぬ身の上、書遣にても有るかと云ふ。御申出しより三日過ぎければ、親里へも人を遣はし、七日に當る時に文を見られて歎かるべし、萬事に附けて物思ふ身は最期急ぎたしと、臨終確かに二念は無かりき。返す返す我れ故憂目見するも、前世の定まり事、最早今なり、低う念佛と申す。我は題目稱へ、さあ是れまでと取り附く時、太夫思はずも、悲しや聲を揚げければ、内より大勢駈け込み、此有様を見て先づ捕へて詮議をする。半留騒ぐ氣色も無く、是れには様子あるぞと内に入る。親方何れも聞きも分けず、人を殺しに参りける者只は措かじ、番所へ御断り申すと辨めく時、一腰を抜いて見するに、箱置の木脇差なり。さて様子は、あの太夫、豫て女房に持つべき申合せ、然れども女郎は奥の知れぬものなれば、斯く心を試めして、我心に叶ひなば、是非一年の所を申し受くる覺悟、諸事六百三十兩では、埒は明くと申せし程に、二百三十兩の借金まで持つて参つたと、供の者們呼びて、挟箱明ければ、其れに違ひは無し、各感しける。太夫も更更身







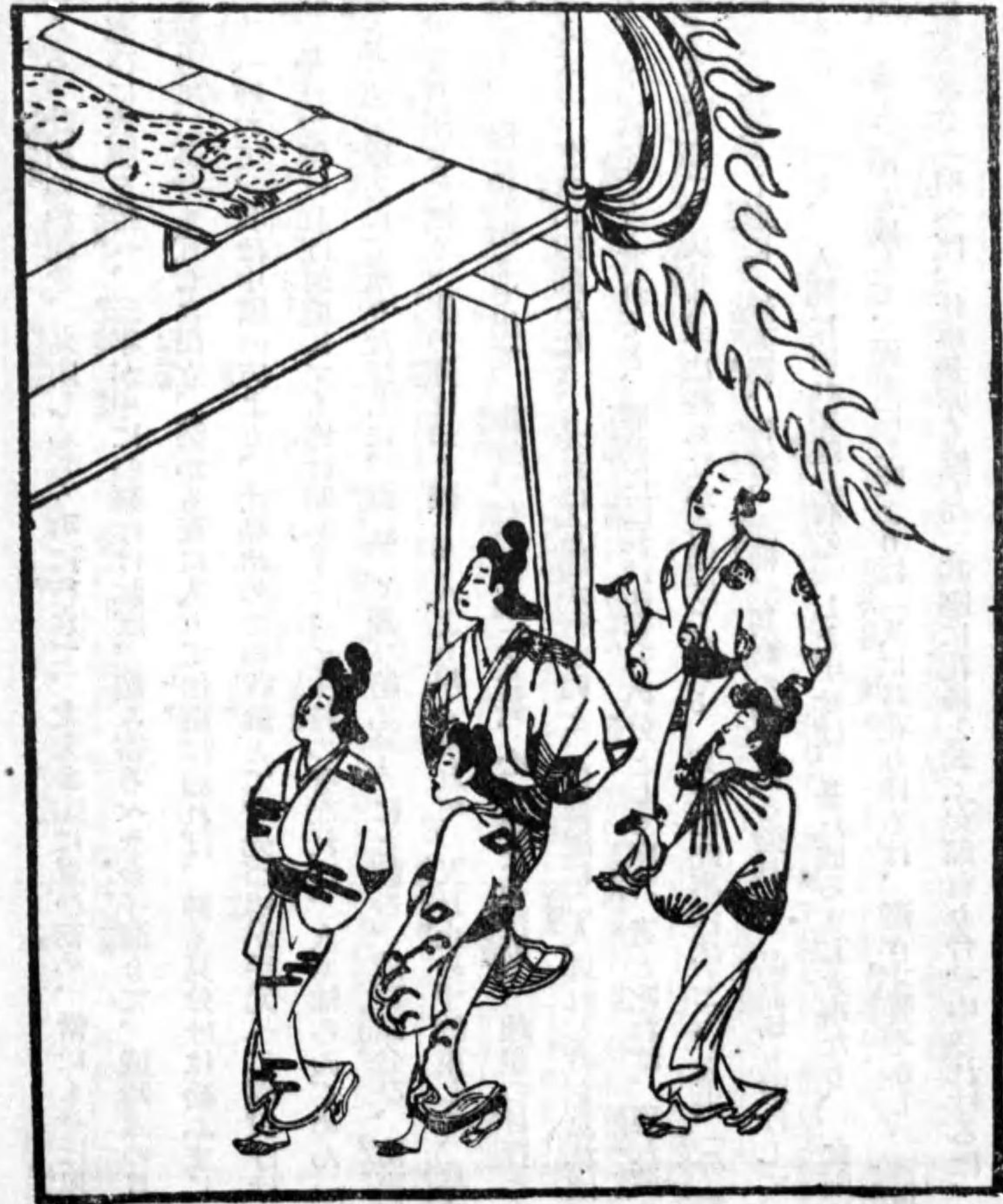
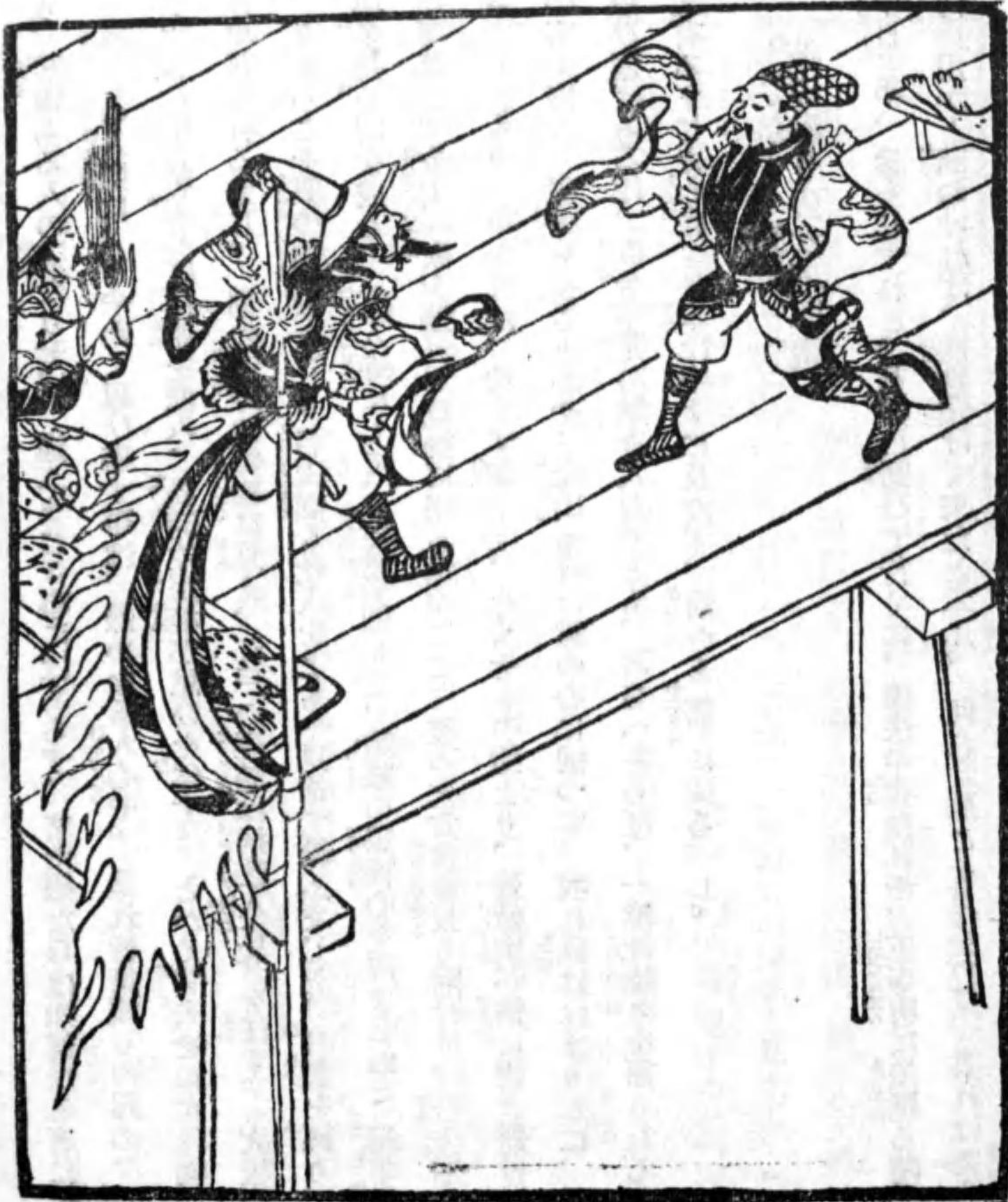
を捨つるを、罌に成つて少しも惜まぬに、可愛しき男を殺すと思へば、自然と聲を揚げぬ、命が惜しきものかと、剃刀持つを各押留むる。男も是れに至極して、此上は我れに賜はれと請出して、存知寄る仔細あり、先づ親の許へと、其日直ぐに、本國に馬乗物を推へて送りて、其足で直ぐに、宿は太郎右衛門方にたて、立出し伊左衛門抱への明石に想ひ附く。女郎の分は然にはあらず、殊更若山様の跡なればと申し、若山手前の義理は、早此里を放れ常の女なり、年頃好みゆゑ身を自由にして猶はしける。大事の時の一言氣に合はねば、重ねて逢ふ事は絶えたり。またも女郎は貴様を見立て、常常の志も有り、外には望みもあらず、色遊びを一代止めふん、我がおつかなく思召さずば逢ふて給はれと、沓の次良、そしりの仁兵衛、其頃山谷の洒落者なり、彼們を戀の橋懸けて申し遣る。渡違へる男們にあらず、さまざま明石に勤めて、御逢ひなされば、此町の通ひ男、あたら名物一人無いものに致しますと歎く。そこはとも有れ、智慧自慢をして、我れ怖ろしくばとて憎や、さらば逢ふて爲こなして見せばやと、始めから風變りに持つて參つて、兩方共に上手、人も見習ふ程の事ぞかし。

## 夜の契は何じややら

一切の人もなり、殊に遊女は人を侮る事なけれ。昔は玉花金殿の眠りも夢に變りて、今松門に霜露を凌ぎ、高名埋まれし御方も有り。ましてや末末、昨日は天秤を惱み、今日は枴一本にも成りぬ。長崎の町放れに一

村の乞食住める。此所の色深き、丸山しんちう町に行きて、太夫金山に思ひ初め、常にも身は卑しからず持つて、忍び忍びに衣服を拵へ、三年が中に心懸ければ、頼み寄るべき金子溜りて、或時人の見知らぬ供廻りを、男も勝りて、其身も宜しき出立、然かも夜に入りて仕懸けぬれば、神も見分けは給ふまじ。丸山の案内する者の方へ尋ねて、我は中國の方より、此島始めての祝儀とて、先づ唄が手元へ二兩投げければ、俄かに笑ひ機嫌、是れで無ければ何處にても埒は明かず。さて主持の身なれば、人も知らぬぐめん「三字工面」に、金山様とやらを國方にて承り及びしに、御快く逢ひ給ふやうにと頼む。成程請合ひ、萬事好しなに申し成して、其夜首尾させける。床の譯は知り難し。人より早く別れて、又日止めず約束して、早我れも宵よりの酒に亂れて、後は臺所まで出て、數多の女郎を手に入れ、心の儘なる折節、此里の目賢き人の參り合せ、身振見るより、乞食の四郎めなり、是れは合點が行かぬと、供部屋に二人連れし者を見れば、案の如く仲間者なり。さては正しく其れぞと、聲高に己れは飯貫ひの分として、慮外者と叱れば、現れ渡る瀬瀬の立浪の羽織そこそこに着て、大小も手に持ちながら逃げて行く。其夜に此事沙汰して、太夫一分廢る時、夜中に着物拵へ、其散らし形に、缺五器、竹箸、面桶、其物の持ちぬる道具を、品品切り附けて、世間晴れて我が戀人を知らすべし、人間に何れか違ひ有るべしと申せば、是れ成るまじき事なり、女郎は斯く有りたきものと、優しく申し成して、過ぎにし時よりは一入に時花りけるは、深き才覺ぞかし。模様悪しく申すも、世に無き事さへ唄へば、此事是非も無し。其座に花鳥と云ふ女郎有り合せ申されけるは、我身も同







し流れなり、知邊ある人の連なりせば、逢ふまじき事にはあらず、また戀ならば如何なる者にも情を懸けてこそなり。勤めの人様に、とやかく思ひ盡す事は、愚かなる人心や。是れ皆世渡りの爲め、唐土人にも嫌な枕を交す。それれも馴染めば出船を悲み、松浦佐用姫が思ひを爲す。とかく間夫せぬ女は物の哀れも知らず、面白き事嘗て有るまじ。都の吉野は鐵職に見え、江戸の尾崎は病難人に身を任す。大坂の夕霧は座頭も一度は、是れらこそ眞の傾城ぞかし。名山様も此人をよもや見捨て給ふまじと、日數を經りて、秋舟も入れば、此津糸錦の山を成し、唐人寺にして、菩薩祭催して、種種の鳴物心を澄ましぬ。毎年見慣れて變らぬ事もまた可笑し。金山一家引連れて見物に出る途中にて、彼の乞食書讀投り附けて、行方知らず成りぬ。世の人も見ても隠れも無き事なれば、捨てず開けば、そもその戀より、皆金山が情に書き續けて、我れ故に御名の立つ事を悔み、國處を去るとかや。金山も今は實の心に成つて、我れ眞ははまりしに、其難を救ひ、斯くまで思ひ運ばるるは、假令手足の無き人なりとも、耳さへあらば、一度此斷りを語りたしと、少時涙に沈む事、又有るまじき心底、日本は申すに及ばず、唐へも話に成るべし。

彼岸参りの女不思議

さあさあ中日じや、参らじやれと、是非に誘ひて行くに、佛法の晝なれや、下寺町に差懸る時、薬屋に走り寄るを、何の用かと訊ねければ、珠數預けて來たと云ふ。何れ女房こそ見に行け、其れは要らぬ物よと、

無分別仲間、難波の大寺に入りて、東門中心の額の銘も貴からず、十五社の新左衛門が烏帽子可笑しく、奥の院龜井の流、あらまじに見廻りて、茶臼山の松蔭に坐して、諸人の有様を見るに、此廣き野山まで、所せきなく、小提開くべき方も無し。寺内は幕打續き、草庵も思ひ思ひの知邊、猶清水天神の貸座敷も寒くて、此繁昌唐にも有るべきや。男女の中に今日の七不思議は、二十四五の後家と見えて、可惜黒髪を截つて、風俗も浮世を捨てて捨てず、紋無し鷲茶の物を着ると思へば、下は紫鹿子のひつ返し、左に一本襦袢を提げて、先立たれし配夫の事ばかり思ふ様に見えしが、右の手より袖香爐出して、下女に附かせて、然かも白齒なり。また十八九なる大振袖の娘、肌には黄爵金のひつ返し、中に玉虫色の輪子、上には福島絹を空色にして、墨繪の山水、朱印を紋に附けて、曙染の裏を貝の口に衿け合し、帯に木綿の小倉縞、然かも細し、釘削る弟子も爲まじき物なり。供の下女二人、共に龍門の大幅、白縮緬に梅の落葉など散らしたる帯するぞかし。二王門を出る時、四十三四と見えし女房、地無し古着物に、金入りの帯して、仲間らしき者に、つぎつぎの袋持たせて行くに、袖を數多附きける。袋の口明けて、田樂串を二把つつ遣つて通る。貰ひながら籠は無しと笑ふ。また浮世小路の早駕籠、三人共に揃への大紋、逢坂までの御約束、是れで下ろしましよかと申す。中より物越さりとては優しく、汝達精を入れて、一入早かつてと云ふ。さては忍者のさては問屋の蓮葉女なるべしと見る時、左右の脇を揚ぐる。四十七八なる囃が、汚れたる露草色の布子に昔塗笠に、觀世紙捻の緒を着けて、古き綿帽子に、寺の禮扇を持ち添へ、袂より鑿錢取り出し、三人の履貫







六匁分渡し行く。椎寺の地藏の前を西へ、また少年も二十には成るまじき女、地は薄玉子に、承平の染紋、下には花柴の千種返し、虹縞の糸屋帯、少しは譯らしき風情に、二つばかりの娘の子を抱きて行く。目附、鼻筋、其れが實子には疑ひ無し。機嫌の好きを、憎くさげに抓りて泣かす事、度重なりなば命の程も危なし。また神子町の東より人の女房とは見えて、物に馴れた相なる風俗、着物三つながら黒きひつ返しに、黒糸の縫紋、目立たぬ茶もうるの帯して、此程年切りて置いたらしき下女に、嵐が狂言を、咄しを、口から果てまで聞く。我を見せに遣るは、内へ返りて問はれし時、語る爲めじやと、懐より鬘鏡取り出して遣らる。石の鳥居を入る時、あら縞に海松茶の裏を附け、下に貫物の菜種色なるを着て、白綸子の中幅の帯して、取揚髪、物塗りたる顔にもあらずして、人は見てびっくりする程美しく、其近所の者と知れて、後世大事に構へたる男、是れは御内義參らじやつたかと云ふ。彼の女上氣して、内を天王寺參りとは申して出ましたれども、此處で逢ふたと云ふては下されたと頼む。彼是心を着けて見れば面白き事のみ、皆贅附けて見よと云ふ。其れも難し、氣を留めずに見ること慰みにも成るべし。それそれ御所染被一連皆好し。其跡の本地の笠、是れ一じや。それより浅葱鹿子、取り物ならば今朝の花持たせ行く女房。いやいや上物は黄八丈の裾に、水車附けたる女。おれは龜井の水で見た紫鹿子と、皆男の有る者に、云はれぬ品を定めける。誠に今日の參詣幾萬人の女、近年は太吉彌を移し、風儀好く、何れが嫌なるは無し。あの幕の中には、太鼓、鼓、細工、淨瑠璃、流行唄、十種香の香り、連伊をする所も有り。一節切の連吹き、人形舞はし、猩

猩吞をするも有り。野懸振舞に木具拵へ、また重箱に飯入れて、あへ物一つ瓢箪の酒も樂みは同じ。緋幕に、括枕の見え透くに、風呂敷引張りし中に、入子鉢の明窓を枕にしたも、夢幻の春じやもの、恥ぢぬべき事にもあらず。例へば唐總の玉を爪繰りもせず、贅に見せ懸けしも、湯出蓮提げたる參詣も、願ひに隔て有るべきや。袖を絶えず太子堂まで詣でながら、信心に拜する人は稀なり。女は大方立ちながら返る。佛も可笑しかるべし。糸櫻の咲き初める邊に、五月の幟にもしたり。幕の中より、下に白無垢、上着は黒羽二重の紋無しに、黒き帯して、紙緒の草履を穿き、人に見られたき風情も無く、初心には歩けども、上がへの蹴出し、腰の捻り、翳す手元まで、何れ優らしからざる所無し。其美しくさ今朝より勝れし女、幾人か面影に立ちて忘れざりしに、さても有るものかな、麥島の中に紅梅の散るに近けれども、未だ梢には開き残りし思ひ成して見るに、人は近寄るに、戀の變る事多し。次第に是れは是れは、道理でこそ有れ、昔日藤屋の太夫背山なり。勤めし時の形は無きに、町の女房とは大きに違ふものかな、今は人の其れから其れまで切の身とは成りけるとや。此太夫に思ひを盡せし伏見町の呉服屋も、昔を淨土衣更へて世を見限りぬ。折節殊勝にこそ。



好色二代男

諸艶大鑑

卷六

目録



新龍宮の遊興

- 一、太夫左門又髪を生す事
- 一、四つ袖大夜着の事
- 一、二人寝の湯枕の事



小指は戀の焼付

- 一、短氣の墨染伏見夕霧が事
- 一、扇に残す今班女が事
- 一、桃林の犬情の道知る事

好色二代男

諸艶大鑑

卷六



三 人魂も死ぬる程の中

- 一、格子の先は疊腰懸の事
- 一、人知れぬ文の置所の事
- 一、間夫はうつけの成らぬ事

四 釜まで琢く心底

- 一、京は銀でも自由させぬ事
- 一、初物出し遅れの事
- 一、三野丹州庭働きの事

五 帯は紫の塵人手を握る

- 一、門の中より送盃の事
- 一、島原の風呂に入らねば知れぬ事
- 一、太夫唐土人を見遠へぬ事

新龍宮の遊興

御室の名木咲きて、酒幔高樓寺前の花と、彼地の人の眺めしも、此處程には有るまじ。乳總隠す女より、胸明け懸けて見せたる和朝の風俗増すべし。萬づ隠す事に好きは無しと、妾者を聞き出す御池の種が嫉も申せし。難波女に姿の足らはぬ所無しとて、八方好しと云ふ者あり、常住長衣を好む、何ぞ片足太きを歎く。また藤屋の太夫に、遣手右の方に立並びて、何時とても道中を大事に懸くる。或時氣を着けて見るに、耳より下に流れて、少しの腫物の跡、人の眼に懸かる程には無きに、女郎は難しきものなり。是れも今は乗物の窓より花をだに見する奥様と成れば、何が有つても構はず。また島原の太夫左門が行方は、兩替が手前に有るものを腫け出して、身請の間も無く、天窓剃りこぼして、袖は黒谷の片里に、男の道絶えて、世に身過とて、今までの偽りも怖ろしく、朝に血を出だす指を悔み、夕に求疵を悲み、稱名の暇無く、後の世を忘れぬ身にも、春の花には美景に引かれ、都の町は厭聞く時、曙櫻見る事に忍びて、大内山の蔭に急ぎて、見る人無しと加賀笠脱ぎ捨て、女の童に持たせ、昔の残る袖口より、打疊の短冊巻き延べて、萬年筆を染めも敢へず、捨てし身の、と五文字書き附ける折し、葉隠れの枝に、宵に懸けしや、蜘蛛の糸筋千度の網に、飛ぶ蝶羽を留められ、蓬蓬然として、彼れで果つべき夢蟲の命惜まれ、朱骨の地紙に取り移し、露草を蹴ぎ、次第に弱るを歎き、涙鑿がぬ玉の如し。愁に沈む時、彼里にて相馴れし人、自然と通り合せ、根柢分け入







り立聞して、これ御法師様、只今の言葉の末誠にはあらず、蟲の命をさへ憫み給ふ御心に、人間の命は何とて救ひましまさぬぞ、當て當てしく申せば、此比丘尼暫し差俯向きて物をも云はざりしが、人の情は世に在りし時ぞかし、相見る事も辛やの姿と、法衣を面に押當て、上氣忽ち汗と成つて、脣の動くは、六字を稱へて、また様變ゆる氣色は無し。彼男猶歎きて、蝶より脆き命、目の前の黄泉と、澤の流れ手して心忙しく結ぶ時、左門法師取り付き、此身後の世は鬼の物ぞと、大地に法衣脱ぎ捨て、早駕籠に移して、鳴龍の遊山屋敷に忍ばせ、心のままに日數経りて、春は梅林に舞子を集め、夏の夜は蚊退の間とて、薄絹の障子の中に、五尺四方の盆石に、水行燈仕懸け、宇治、勢田の螢を取寄せ、涼風の外に、散切の女童子四人、皆緋縮緬の廣袖に、金の團扇を翳し侍る。秋は廣澤の月を手池にして、影は二つの枕に赤し。冬は洞に一里を構へ、白炭を焼かせ、雪の夜は餛の間に籠り、斯くて三年経り行けば、黒髪昔に伸びて、二度の姿見とて、可笑しき事に入るとて、直徑三尺五寸の水晶の玉鏡を、遙かの國まで申し遣りけるを、又無き戯れと思へば、三野「山谷」の盛り、高島屋の清左衛門抱への太夫、花月、三笠を同じ心の友、平六、平内、對平と、名に立ちて、元より年買ひと定め、四季の衣裳を請合ひ、様様求めて遣はしける。二人の女郎勝れて美形なり。毎日肌着と、下の腰巻とは使捨てにして、親方の中にも公儀の出立に變ること無し。今時の太夫も、其れに心は變らねども、斯かる本客無し。或時平内が申し出だして、名前に床道具も難しく、本町の越後屋に申し附けて、裾無しの大夜着、兩方に袖を四つ附け、長一丈五尺の白天驚絨、さながら雪の富

士も動くが如く、留木の煙立ち並び、花月に平六、三笠に平内、後差して隔て無き枕、是れも成るべき事なり。大坂にても中の島米法師、藤屋の金子に逢ふも、さのみ戀にもあらず、無きにもあらず、世の氣伸し是れぞかし。榮耀の仕所に極め、茨木屋の次兵衛座敷に、夏を凌ぐは行水と、道頓堀の千日寺より、毎日清水を汲ませ、大釜に移し、白檀を煎じ出し、此匂ひを樂み、横に長き大盥に、女郎も同じ枕に、二布裸に打解けて、何程か湯を水に成し、座頭に按摩を取らせ、禿に足の裏を搔かせ、六月中旬に、御所柿を好み、此有様華清宮も斯くやと思はる。曉風殘月、夜の涼、今朝思へば夢。

小指は戀の焼付

夜船に乗り遅れじとの早駕籠かと思へば、伏見御が通ると云ふ。是れは京都を忍び大臣、色里を仕過し、又は中分の人の遊び所には、撞木町無くば、事の缺けるなるべし。廓の外に京屋の七左衛門、大和屋の七兵衛とて、卸宿あり。是れに夜明を待ちて乗せて返る。三人懸り銀一兩の定めし、揚屋は江戸屋、八幡屋、笹屋の清右衛門に行きて、此里の女郎見る事、目利と云ふを觸れて、親方の家家に入りて、目好にする事なり。小便の小路と云ふまで、残さず眺め廻りて、心立つにも構はず、同じ値あらば、見好きを抓めと、七八人集めて、三疊敷ついに仕切りたる間の障子を取り放ち、酒は定まつて、川海老の吸物に、舊米の奈良茶をかしく思ふ時、竹田の院の鐘も、衝き出だし共に七つなれば、少しは心忙しきに、京橋の旅籠屋の亭主



らしき者、西國の侍を同道して、あらまし内儀に頼み置きて返る。女郎様は何れかと僉議すれば、彼男待ちかねて、御合力に近い所から、呼うで給はれと申す。差心得て、不斷御開の有るを取寄せて、盃初めて、女郎が差さるれば、戴きて、内儀に納めと申す。餘り短う御座ります、せめてお一つ上げましてと手を叩きて、何ぞお看と申せば、御無用じや、國元で鱈も鯨も喰る、寢所はまだかと云ふ。とかく御心任せにと床に入れば、

女郎身拵への中を、欠伸幾度か、さても遅しと舌打して、國の女房們ならば、早う來いと呼ぶにと、獨言云ふ中に、門の戸けはしく扣きて、何れも御本陣へと申す。弓矢八幡残念と、歸り姿の然りとは痛はしく見れば、赤顔の大男、鼻も勝れて是れまた可笑し。此町は一夜限りの客珍らしからずと云ふ。また腰張思ひを殘せしを見るに、落月短朝涙移と、確か禪筆にて書き散らすと申せば、其れも珍らしからず。數多の出家衆にも、馴るれば總路と、何事をも有りのまま語る女郎あり。其様卑しく思へば、歌の詠方覺え、大内の事ども見たやうに知るは、是れにも子細あるべし。此里の變つた事を聞くに、一文字屋の喜右衛門抱への夕霧は、都の人常常申し交せしとかや。彼の男八幡屋傳右衛門方より呼びに遣はしけるに、黒髪截り捨て、身は坊主衣を着て、申し合せし姿に、今日思ひ立ちて斯くの如し、方様にはと申せば、此男涙に沈む。宿には驚き、親方に附けて様子を聞けども申さず。我ばかりは恨みと申し寄り、二言は無し。太鼓の藤左衛門いろいゝ宿めて、今は茶筌髮殊に面白く、手を盡して逢へども、其後は譯の立つこと無し。また扇屋の八左衛

門抱への常盤は、一條の革堂の前なる、橋の清と云ふ男と二世の語らひ人も知つて淺からず、此敵如何なる事にや、京の籠者「牢舎」をせしに、深く歎きて髪を切り爪を放ち、猶此時見捨てじと、文書いて送りて、明暮諸神を祈るも有り。加門は、苟に上野に行く人の情を忘れず、扇に残されし一首に毎日狂亂して、今班女と名に立ちて、遙かなる届けの取り遣り、是れも本戀なるべしと云ふ。また桔梗屋の最中は、類無き戀の大奴なり。歌一際唄ふて、心中に辨へ有つて、人を見限ること無し。女は別の事も無くて、人の思ひ附く所ありける。何時の頃よりか、京役者山川と云ふ美男に心を移し、問屋町の思はくを外に成して、世間取沙汰をも構はず、ばつとしたる浮名なれば、自ら勤め淋しく、親方切諫に、さまざま手を盡して、折節春雨の夜、桃林に追ひ出し、浴衣一つに、辛やの姿、烏羽玉の取揚髪は白き筋無き瀧と亂れて、木蔭を宿の枝泄る雲に涙を争ひ、春の夜の夢ばかりとも讀「詠」みしに、今宵は秋の夜とも思はれ、惜まぬ曙は深く、猶頻りに車軸して、行く水の流れ程身のあさましきは無し、泡の今にも命の消えるに、山川の音もせぬかと歎く。世に情は懸けて置くまじきものにはあらず、犬さへ我を悲み、宵より共に濡れて、物こそ云はね、伽とも成れり。竹垣を潜りて、行方知らず見えねば、是れも憂たてかりしに、常の別れに跡を慕ひて、京の道筋を覺えて、山川が住みなせる板戸に近く聲の忙しきに、寢覺めを驚き、門に立ち出で見れば、彼里の犬なり。如何様にも心得難しと、其夜を籠めて、一番鶏の二の橋で鳴く時、やうやう駈け着け、清右衛門に様子を聞いて、とかうは命が有る故に、由無き思ひと心底極むるを、いろいろ異見申し盡して、親方







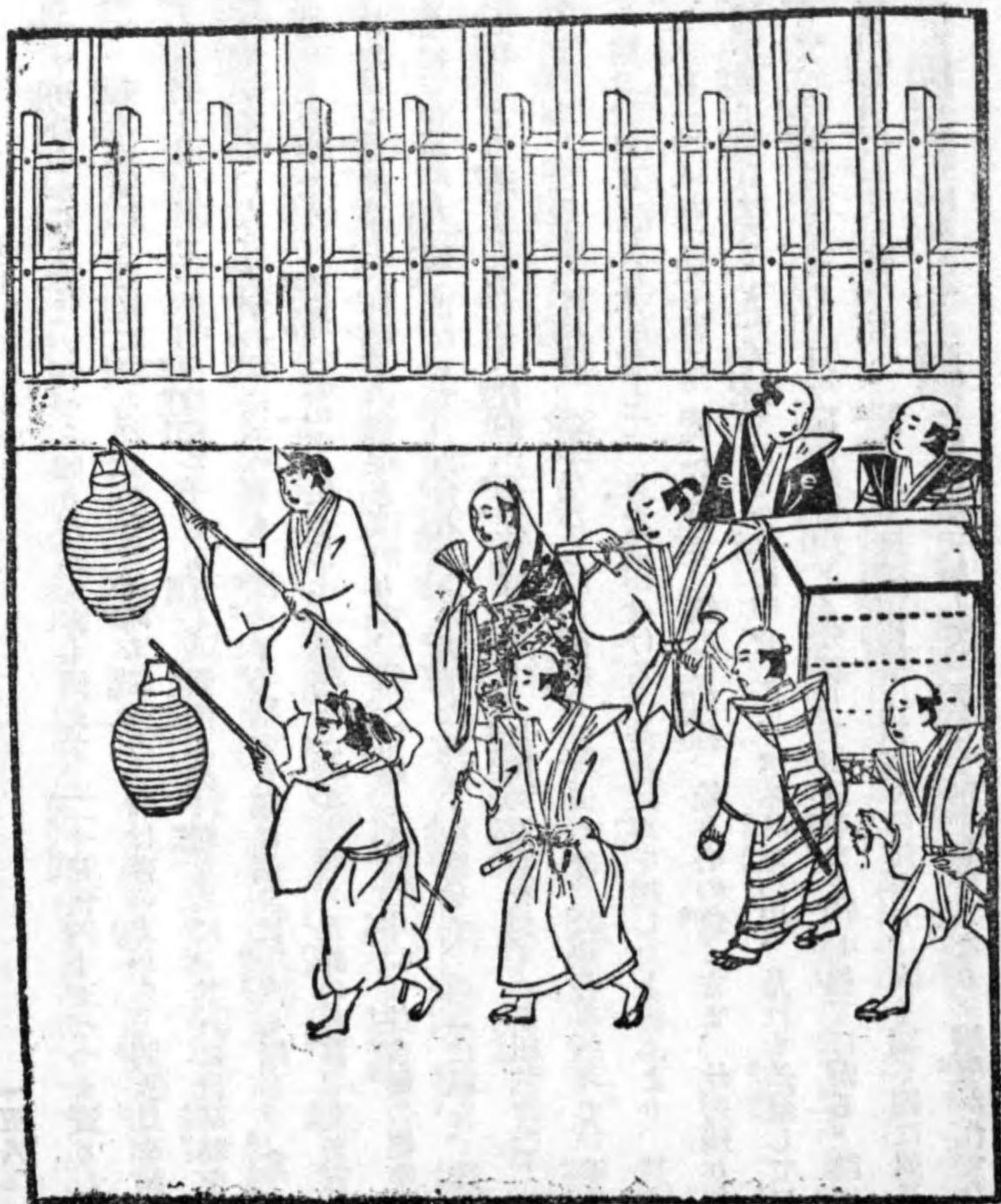
にも内證申して、また昔の如く逢はせけるに、猶二世までと申し交し、互に小指の先に、燈心を束ねて油に浸し、自づと消ゆるまで顔見合せて固めけるは、例無き事なり。後には見るも怖ろしく、何れも親方に残る年を貰ひて、山川に請出して、日頃の思出是れぞかし。此里なぞに以前は斯かる優しき事の無かりしに、次第に女郎むつしき世とは成りぬ。

人魂も死ぬる程の中

梶の葉に墨筆を手向け、女郎の身が稀に逢ふ夜ならば悲しさ何程と、初瀬、高間、是ればかりは好う云ふた面色、戀知りの様に聞えて、さながら織姫の盆の仕手が無いと、今一つ無心云はれ相なる風情と笑ふて、一年に一夜の男は親方こそ損なれ、太夫御達は構はぬ事、お返りなされて、且那の面を見ずに、今日井戸替への、索麴の伸びたを參れと又笑ふて、其跡は女郎無しに、京屋の端居して、祇園の山鉾の咄べんべんと、月落鳥啼、秋の初霜置き渡して、軒も物凄き半天を、怪しき光の飛ぶは人魂なり。其形杓に似たと申せば、其まま秤の如し、あれは女郎衆に物を高う賣りぬる小間物屋が死ぬるか云へば、否否今の人魂は、貸しに行く者であらう、さ無くば彼れ程、早うは飛ぶまいと云ふ。あの人魂は遣ひ過した者であらう、頭を大きく出て、跡が細かつたと申す。あの人魂は大員で御座らう、事は、物前に九軒を、編笠も着ずに通ると云ふ。人魂も咄し下手かして、頭から消えたと云ふ。今の人魂も主無しと見え、夜更けて出て歩りく程に

と云ふ。但し間夫するかと笑ひ立ちに、越後町へ廻れば、丹波屋の格子より、疊み腰掛を出して、其れに坐して、しめやかに語る。男は暗がりにて、撫でて見るまでも無し、鏝三分なり。其東にも、見知つた揚屋獨り、源氏火にて文を読むなど、たまかな事なり。其東の門口に、附紙をして置きけるは、遺手の暖く男に、小宿へ返つた間を知らず爲めなり。此道に入りて、外なる智慧も出ると、南側の軒下を行くに、禿が雪踏の音を止めて、機人形の歩りくが如く、忍ぶは合點行かぬと立ち留まりて見るに、勘右衛門辻まで来て、此所には、糸引く化物の有ると云ふをも怖れず、少時四方を見晴し、懐より文取り出して、井戸蓋を明けて鰯ろに差込み立退きしが、また見に戻る身振、小さき姿して、それぞれの賢さ、未だ物せまいと思へば、さて是れには宇佐賀の森の神主も目利違ひ有るべしと、歸る跡にて取り探して上書讀むに、名こそ無ければ、其太夫が手に疑ひ無し。人の氣の着かぬ状の取り遣り、戀は見赦せと、明ける人に説言して、其儘に捨てて、北側の局に、鑰盗み出して、錠明くる音、火の番の太鼓に合せて、さても好かぬ事なり。此處にも天職に手管開山女あり。さる格子には、紙盃に割竹を傳はせ、酒買はずなど、何事もすれば成るものなり。さる門には、小倉縮着たる人、挑燈持ちて躡ひ、細目帷子着て、左巻の木綿帯したる男は、太夫と話め開き、正しく替男には紛れ無し。或は座頭は大小を差し、武士は法衣を着、前垂置手拭に様替へ、身を實して逢ふ事、世上晴れての女郎狂ひとは格別ぞかし。是れも其時流行物にして、如何なる格子にも、二人三人立たざるは無し。田樂屋の甚吉們も、晝は袖無、夜は高宮縞に着更ゆるも可笑し。女郎も間夫する時は、







此里繁昌して勇む心からなり。いたづら知りながら客も絶えず、三十日に四十五つとも賣りしに、今は惡所も止めて、親方の氣に入る様に爲られてから、何時も閑なり。昔は客の方から、明き日を頼みしに、今の正月の事を九月十日「月カ」から早穿鑿をするも忙し。銀使ふ男は稀なるに、其れには疎略をして、我物を使ふて男不憚がるを、人は虚氣の様に云へども、間夫する程の女郎に弱きは一人も無し。尤ぬるき人の隠し男は成るまじき事なり。御船、都の名に立ちて、大坂にて勤めし時、九軒の吉喜、文までも無く歎きしに、偽りに無きを見濟まし、何時その首尾とばかりの、御一言嬉しく待つ中に、住吉屋の奥座敷にて、但馬衆現れけるに、晝から大盃重なりて、百合若大臣の風情なれば、片寄せて、傳八に踊を、禿どもに習はせて遊ばれしに、この透きを見合せ、住四が喜左に知らせて、横町の高塚を越す。岩組荒けなく、南天の木深き所に落ちて、少しは邊りへも響き、氣を失ひし時、御船其れと云へば、はや呑み込みて、築山を分け越え彼男に取り付き、口より口に水を移して、息を繼がせける。是れは堀を越したと思ふより、其まま水一口啣み、懐に木枕一つ入れて走り寄る。戀に此賢さ、嬉しさ何程、餘り心の急くまま、此男残り多き事も有りけるを、遙か後に咄しける。また大橋をぬるき様に申せしに、さる此里の男、是れも差渡して口説きしに、申分至極して、合點はしながら、只今宿に返り、よく分別して御返事をと申し捨てに歸る。跡にて此男白けて、氣の毒申し出だしてと悔む所へ、間も無く來て、揚屋は世渡りの障りと、人も聞く程に異見して、前後一度の思ひを晴らさせけるとや。高間は屋根まで越して、危なき情を懸けしなり。戀櫃かれて身を變すこそ

浮世と、門に出づれば、太夫に間夫の男捕へて、僉議をすると辭く。是れ悲しく身隠す時、銅鑼鏡鉢を打ち鳴らし、野送りの有るを喜び、人も頼まぬ用乗物の棒に手を懸け、是れに紛れて出でける。此里の死人まで手管の頼寄と成りぬ。江戸にても助左衛門抱への對馬と云ふ女郎を、早桶に入れて盗み出したる例も有り。世に間夫狂ひ、死なずば止むまい。

釜まで琢く心底

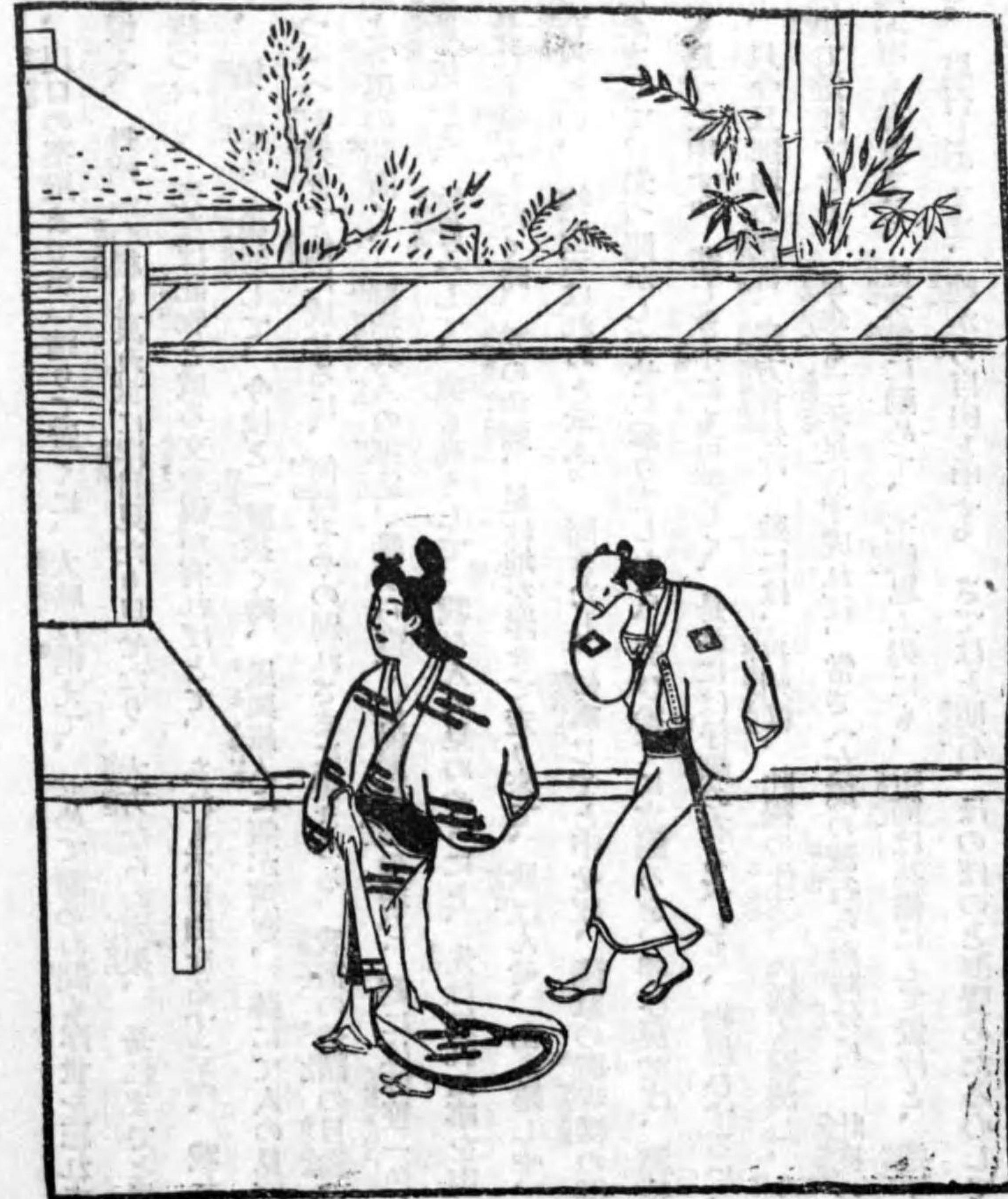
平城の袖鑑に、能い衆、分限者、銀持とて、是れに三つの分ちあり。俗語に能い衆と云ふは、代代家職も無く、名物の道具傳へて、雪に茶の湯、花に歌學、朝夕世の事業を知らぬなるべし。また分限と云ふは、所にも許して、商賈は止めず、其家の風を手代に捌かせ、其身は諸事を構はぬなるべし。金持と云ふは近代の仕合、米の騰りを請け、萬つの買ひ置き、又は銀貸、自身に帳面も改むるなるべし。十千貫目あればとて、是等を歴歷の中に入れて交ること無し。其頃菊屋とて引込入道、二千貫目の家徳は有りながら、稀衆仲間の太鼓持して、彼方此方に日を暮らしぬ。或時島原の大坂屋に内證遊び、此人を申し入るるに、稀之助、夢松、晝太夫と、替名呼びて、皆六十餘の法師なり。外に江戸の客、明石三ぶとて、小唄の上手、秋も末の、菊のませ垣と云ふ二節、是れは呻つていやはや、どうも成らぬと、亂れ酒に成つて、不斷の座敷に變つて、女郎無しに、禿ばかりを二十五人、是れもまた面白し。勝手を見れば、一つに三人入りの水風呂、



所所に並べ、どうも云はれぬ裸身、釋迦になりとも見せて見たし、衆生の迷ふは斷り申して、視くこと嫌と申す。また騒ぐ中に、四つ門打つとて觸るれば、名残惜しきは親に掛かり、母ばかりにしてと、思ふも叶はぬ世なり。宵より若やきて、別れに年を寄らしぬ。爰に浦島と云ふ男、隠れ無きしやれ者にて、人より先に萬づの事好む。大坂屋の翌日直ぐに、揚屋にて申し請くる。菊屋の入道見舞ふて獻立を聞くに、未だ都の人の口に入らぬ物一種ありと云ふ。歸りて此自慢申せば、呼ばれながら、何れも腹立して、何にても有れ、世に見え渡らば喰はで措くべきか、浦島が今の初物推量せよと、思ひ思ひに申し出す。何の事も無し、昨日より見し初鮭なるべし、さらば亭主に嫌がらすべしと、才覺者に申し附く。錦上の店に鮭の有る程買ひ求めて、金子二兩つにして、八本より外には、繪に書くべきも無し。膳出し前に、魚賣四人に手分して、其門を殊更、奥にも聞ゆる程に賣れば、密かに呼び込み、直段を聞くに、錢二百つと申す。浦島驚き、焼物替へて出しける。よき時分見合せ、菊入聲高に、御馳走の珍魚はと申せば、鍋蓋を明けて悔しきと、浦島は臺所に逃げ込み、是れも一興なり。此仲間の大體なる事、江戸に返りて明石が語りぬ。此男も丹州に上り詰め、三野「山谷」の道筋我れ一人して踏み減らし、明暮通ふ程に、猶女郎は外の勤めは捨てての水管、親方數度の異見にも止めず、後は惡み深く庭に追ひ下ろして、下女の如くにして使へども、思ひ設けて悲ます、常より機嫌、物毎をして、妹女郎にも様附けて隨ひ、其後は櫻前垂の姿をも恥ぢず門に出で、三ぶが面影に立添ひ、是れを憂きとは語らず、逢はぬ日は懷紙に思ひを述べ、消炭に書き續けて、禿

が好みに、出口の茶屋までかい遣りて置くに、大略は消えて、せめて讀めぬ間も浮世を忘れて、思ふ効無き身の程を恨み、丹州が心根も哀れ世に浮目見たり見せたり、大方ならぬ因果、是れまでと思ひ極め、今日の返事は待つべし、死なば記物と成る文を硯が有ればとて、あれも不自由なるささみ、我れも又と、指より絞りて、染め染めと書遣して、今はと一腰抜く時、風與紙入に氣が着き、跡にて人の見ば愚かなる書捨もと、一つ一つ引裂きて仇に成せるに、何時ぞやの別れさまに書きつる、我宿の普請の目論、綿店を小構へに、居間より奥の間廣く、寢道具入の押込、縁から直ぐに湯殿雪隠の通ひ、庭には能笹一色と云へば、手水鉢の置所近いと、物好みして、窓も高うして、我を人の見ぬやうにと、先は知れぬ事を申せし女心の哀れやと、是れも嘸みしたく時、禿の角觸、足は地を浮きて走り來て、欣ばんせ、ああ嬉しや、眞に嬉しや、水が一つ呑みたい、物が云はれぬと云ふ。聞きたし、何事じやと申せば、淺草の御寺様の御座んして、御吸物を据ゑまして、先づ聞かしまして参りましたと、云ひ捨てに立歸るを、呼び戻せば、酒持つて出ますると、跡をも見ずに申す。悲しき中にも可笑しく、是れには仔細の有るべしと、物思ひするに、下男の久兵衛が來て、只今旦那坊の詮言、親方肯分け、殊には、丹州様、此程の仕方、内儀も涙流し、今日より昔に替らず、御出で遊ばすなり、早年も二年足らず成れば、常さへ女郎の流行らぬ時分に、此度の譯なれば、人も煩く逢ふ事も有るまじ、成次第に勤めて、不憚思ふ男にも、折節は其儘にして置けと、遺手のかつに申し渡されし。思召しのまま、晩から自由と申す。さてはと明石、ほのぼのと夢覺めたる心して、清十郎方に







て、世間晴れて逢ひける。其明の日より心中感じ、我も人も思ひ入り、一日も暇は無く、過ぎにし時より流り出で、二度名を揚げける。世には哀れを知るにや、揚げて床無し夜の友、後には三ぶも一座に成る事稀ならず、丹州が物の捌き、女は勝れもせずして、唯だ賢く物静かなり。さる時鹿島の揺り餘り、此里まで地震きびしく、然かも五月の比閨なるに、男も女郎も、二階立ち騒ぎて、さまざまの疵を求むる事あり。丹州は三の糸織ぎ掛かりしが、調子合して、我れ世の中に在らん限りはと、神歌を唄ひ給ひし有様は、閨人琴柱に倚つて雷公を笑ふと申さるるに同じ。斯かる遊女唐土にも有るまし。一年勤めて後、此女明石か願に成りける。

帯は紫の塵人手を握る

好い鳥が懸かつたと、鳥原にたとんと嬉しがらん事あり。大鵬は九萬里翔り、周の穆王の乗られし駒を早めて、櫻町と唄ひしは、三野「山谷」通ひの騒ぎ唄なり。此里は早駕籠、大坂より四枚肩は二十四匁の定まり、難波の暮の七つに乗り出し、西島の四つ門閉さぬ中に請合ひ飛ばすなり。また六枚肩は三十六匁、是れは日暮より二時に、十里半の道を行く事ぞかし。此大門の鍵は此里の年寄方へ毎夜納めければ、與右衛門が儘にも成らず、されども寝ぬに寝惚けて、一時は曙早き事も有りける。霜月廿一日二日を約束して、夜上り忙しく、連れは五人、萬づに暇入る折節、山崎嵐に而かも雪の掛かるは袖にも溜らず、是れ面白や

時も實にと、諸機嫌で遣りしが、はづかしの森の邊にて、雨また頻りに、少時の難義晴れて、見る人も無きと兼好が書きつる月も、遅い出やうと申して、程無く此處に着けば、早門閉して、けがない、大勢の立ち騒ぐに、彌七、出口の茶屋より起き出づれば、宿より男們、御座りましたかと、聲聲に申す時、助と云ふ人當座に、誰じや知れぬ、めつた彌七が雪の中と、發句をすれば、内より彌七、寒夜に能うも、のぼり助四郎と軽い脇して、さて京に此程新しい事は無いか、神樂が根太は、甚助が女房は、いよいよ去つたかと、取交せての大笑ひ、爰が可笑しいと、丹波口へ駕籠の者ばかり遣りて、門の内外咄が沁む。太夫達より伏籠に懸けし衣裳、御風の爲めとて、門の屋根越して送る。逢ひました心して上に懸ひける。其後思ひ思ひの御文、何れも宵に待ち詫びたる慰み、能うも能うも仲間談合して、書かれた事じやと申す中に、盃門の下を潜らせ、五つに名名の名を記るして、暑爛にして、こりや呑めと、生男ばかり差しつ押へつ、また下を通はせ、彌七に間を頼む。見えぬに由つて是非は無いが、輕相など云へば、此寒に一つ請けぬは、身を知らぬと申す物じやと笑ふ。また文賜はりて、御使に、太夫様方も此御難儀を思召され、せめて中の門なりとも自由の成らば、是れまで御出で遊ばし御伽ありたきと、それは、それは此處よりは、御痛まし御入候、門口に腰掛を出させ、あれにも霜嵐も厭はずましますと申す。それは身過に賢い女郎門と悪口申す片手に、偽にしても是れは千盃じや、ま一盃して遣ると、色色紛らかせども、今半時の待久しく、門の潜戸を叩いて、與右衛門様は此處かと云ふ。内から彌七が誰じやと云ふ。端物を貸して下さりませい、身揚の御用に立つ物を、



かやうに延び延びには迷惑、何時の節季にも、宵から門を閉して寝て御座るは、情無いと申せば、與右衛門目覺まして、何事じやと云ふ。戀路知りの親仁めと、袖へ手を入るれば、また早いと云ひながら、鑰取つて来て、門を明くれば、初春の心して、物申、物申う、若戎賣る眞似、どつと云ふたる施餓鬼の勸進、御坊の喜び、今涙で朝歸りの姿と、また奥へ行きて、逢ふ心樂むと、唯だ譯も無う互に恨みを云はぬが損か、静まり給へと申す時、唐土不斷の智慧出して、焼かされし御風呂が好いと申す。是れは入り亂れて、此風情揃ひの浴衣も、即座に捨てたり、五つの香、爐に立ち上り、揚間は二間續きの氈にて閉ぎ、透枕に十寸鏡、茶箱、提重の光り居たり。板の間には敷き捨ての圓座、湯桶其外新しく、太鼓女郎背中を搔く。太夫亂れ姿、内儀もわけて、お髭の塵、主人は言葉で庭掃く。是れ日本の色里に無き事なり。是れも算用して、入れば十兩人とて、大方は焼かせぬなり。何れ疎か無き中にも唐土勝れて手鍊なり。今は其年も尤ぞかし。勤めつゝのりて、脇塞がるる年の事なり。大坂より京の色知りの方へ、女郎狂ひを頼むの由、獨子の大吉と云ふを遣はしける。昔日播州より鎌田屋へ、商の道頼むとて遣はしける。格別世界廣し、とかく太鼓無しに、粹に成り給へと申す。如何にも望む所と、鶴屋へ客に致せとの添狀取りて行き、其身は木綿縞の着物に、股引其まま、中脇差に柄袋を懸け、差下ろしの菅笠を被きて、小者に立縞の布團を三尺手拭にてか下げさせ、此嫌風にて揚屋町に入る事、大方の胴骨にては成るまじ。唐土、丸太屋の店に、咲き初めし菊を手觸れて、片膝立てて、蹴出の裾深く、面向不背の姿見るにぞつとして、女詩仙美人揃の中に、桃花愛して

ある女、唐人が筆を盡して、本朝には有るまじと渡しける。其れは生を見ぬ唐土様と、名を聞くより立ち寄り、此男手を捕へても異なる顔色もせず、さもしき着物にも心を着けず有りける。斯かる田舎者にも御情は無きかと云へば、其れに拵へたる女と打笑ひ申されける。遣手も先づ御手を取り放し、戀を兩方へ分くる。直ぐに鶴屋に行けば、状を見て姿を驚く。九軒へ石徳が自身状を持ちて、甚太方にて野秋に逢ひしも、思ひ合せば是れなり。流石宿にもあしらひ好く、女郎様はと穿鑿する時、我は遠國の者なれば、重ねて參るも知れ難し、唯だ國方の咄の種に、此所の御太夫様に逢はせてと申す。今の野風様、今の驚様、惣じて太夫様達、俄かには成り難しと申す。如何にも然もこそ有るべしと、彼の女郎指して教へ、あれを是非と頼む。あれは唐土様、今日は思ひも寄らずと申す。今逢ひまして、お情と申した男と知らせまして貰へと申す。遣手にさまざま頼む。唐土聞きも敢へず、思ふ子細も有り、今日の御客に斷り、行くべき由、大臣へ文遣はし捨てて、其ままの御出で、例も無き鶴屋が仕合、御引合せの酒事過ぎて、床へは入れども、何とも仕懸も無く、大吉空寝入して、酔にもてなし、明けて其まま歸り様に、又の日も契約して行く。本装束にて、揚屋の居間も時ならぬ山吹の岸かと思えて、口聞く宇治の大臣も驚く。昨日には變りて、今日の幅、女郎十三人集めて騒げど、唐土は落ち着きて、少しも動轉せず、一日暮れて、更けて、また寢姿と成りて、今宵も大吉態との躰を爲す。女郎よい時分見合せ、其御躰、嘘にも眞にもせよ、我れ思召すとの事からは、







然は有るまじき御事と云はるる。さらば此方に申分、其御心ならば、何とて過ぎし夜は、風を引かして返し給ふぞと申せば、其れは皆、御方様は悪るい、夢にも知らぬ時、我れ手を執つて、情と御申し候程に、如何にもと申す。然かも物數奇に、此方から貰ふて来て、逢ひましての上に、身を任すまじき事には聊かあらず、さながら初めて、思へばとて、女の然らば申されまじ、今日の御仕懸見て、斯く申すにはあらず、昨日の人申にて、是れ程に無き御方の手を握り給ふ事、成るべきやと、一つも口を明かせず、死蛤の燒き立てられ、袖の海の浅い心に深き所を覺えて、久しく見捨てず逢ひける。其時さへなり、今はあの筈と思ふ中に、年も程無く明きて、難波より思ひ込みて、晝は大坂を勤め、毎夜早駕籠の大臣と申せし人の抓んで、都の水で育ちける。此太夫の事は諸人名残惜しさは、もろこし團子へ。



好色二代男

諸艶大鑑

卷七

目録

◇ 惜しや姿は隠れ里

- 一、女郎に残し置く刀の事
- 一、長山知音の敵打つ事
- 一、思ひの數萬體佛の事

◇ 勤めの身は狼の切賣よりは

- 一、悪所銀貸す人絶えて京も淋しき事
- 一、風の神も見捨てぬ紙子大臣の事
- 一、今野風が心入れ薫が思入れの事

好色二代男

諸艶大鑑

卷七



三 捨てても父様の鼻筋

- 一、鳥賊も太夫が上らす事
- 一、若衆嫌ひ即座に元服の事
- 一、新町よりの捨子知る事

四 反古尋ねて思ひの中宿

- 一、帯は便りを結ぶ事
- 一、打水に濡れて八百屋店出す事
- 一、江戸の井筒胸は富士に立つ事

五 庵探せば思ひ草

- 一、晝は見せ掛け姿の事
- 一、焼かれつ焼きつ忍び肴賣の事
- 一、堺の久米助は本衣の事

惜しや姿は隠れ里

反魂香を焼きて、世に亡き姿を見し事、本朝にも相州の阿和手の森にて例あり。隠しき時の夢、ゆかしきの現、逢ひたき時の幻、心は心に移る鏡の如し。江戸の遊興町元吉原の時、三浦に人置が申して、遠州濱松の片里より、昔は名も有りし人の息女を、ふつとり十五の秋の頃買ひ取りしに、此顔折節の月をも猜み、姿は花を欺く。名は長山と申し、突田から太夫にして、是沙汰の女郎、然かも賤しからぬ志にて、假なる男も捨て給はぬこそ優しけれ。其時分下谷の車坂に身を隠せし浪人者、長山に馴れ初め、二年餘りの遭練、命も惜しからぬ程に成りける。此男生、國仙臺の者にて、國元へ是非下る首尾あつて、飽かぬ別れを涙に、夜も明方に、長山下着を取更へ、黒髪截つて投げつけ、勤めの身とて、昨日は別れ、今日は又逢はぬ男も縁と成れば、其時の氣に變り、忘るる事も慣ひなるに、是程まで思ふは、自然の因果刺殺して行けと、見る中に狂人の如し。やうやう諫めて、又の年の夏の比は必ず上るべし。其れのみ思ふ大願叶ひなば、立歸りの旅なるに、我にも深く歎かせて、亂れ心の忍ぶ山、岩手の果は云はずとも、大方は色に見ぬかと、小者に持たせし差替への刀、一腰取り出し、是れは似合はぬ遺物なれども、また逢ふまでに残し置くと云へば、一座に有りし遺手、禿、是れは太夫様に有りても、由無し物と申す。長山取り戴き、女なればとて自害に舌喰ひ切り、首を縊り、剃刀業も手ぬるし、要る事も有りと、格別なる戀の別れ路、彼の男は奥州に下り



ぬ。其後此刀を見るに、來國次二尺三寸無疵にして、人望めども放さず。其年も暮れて、明くれば春の始  
 めまで、文さへ便りの無きを恨み、日頃書き盡したる壺底の壺まで、先が知れねば遣る方もと、我が文我れ  
 と明けて讀むさへ泣かれて物思ふ折から、國友達とて、二三度も一所に見えし津川左助様とて、小太夫に  
 逢はんしたる客なり。御出で嬉しく、角彌様はと訊ねければ、世は戀と無常と二つに固めたり、此町を別  
 れてより國里に忍び、兄の仇細井治助を狙ひしに、運命の盡きて、兩眼明かならぬ病中に、逸り過ぎての  
 思ひ立ち、人見違へ下人を研りし間に、治助抜き合せ、角彌最期の残念は返討に遭ふと云ひ、殊更妻子も  
 無き身なれば、心に懸る根葉も絶えて、思ふままの治助が世の中と語る。聞いてからは身も有られぬを、  
 長山涙も溢さず、定め難き人の身じやものと、盃事静かにして宿に歸る。跡にて女郎程氣散じなる者は無  
 し、其れぎりの情と笑ひぬ。倒れて來ぬ人、年寄りて分別する人の事まで、思はば遺瀨の有るまじ。長山  
 親方に申すは、我れ年を重ね、今御奉公も三年には足らぬなり。思ひ籠めし男奥筋に在れば、御暇を給は  
 るべし。年頃人様達に貰ひ溜りし衣類諸道具残し置く。此身も仙臺の色町へ賣りてと、深く望みを懸け、  
 若し御叶へ無くば浮世には住まぬ女と、思ひ極めて申せば、親方も思案して、仙臺の松島屋小兵衛方へ、顯  
 ひの通り遣はしける。江戸の太夫下とて流るに附けて、長山人の氣を汲みて、山の井の浅くは人に見られ  
 ず、勤むる中に、昔の角彌に相も變らぬ男、契は松山の末懸けてと、互に申し合して、變らぬ心底見濟ま  
 し、思ひ入れのあらましを語れば、此男涙に沈み、遊女の好とて、其仇打つべき心の運び、前代例も無き事

なり、効無き我を人がましく、斯かる大事を頼まれ、否とは申さじ、如何にも討たすべき幸ひあり、其細井  
 治介こそ今は浮世を廣く、此町へも折節は來て、京屋の玉川に逢ふなれば、やがて突出し心任せに討たすべ  
 し、我も朋輩の吉澤權八と云ふ者なりと、此事請合ひ、明暮心懸けけるに、治介出でざる事百日に過ぎぬ。  
 毎夜長山に遅れぬ屈を申して、其後は戀も廢りて、義理一筋の懇情、世間向は問絶えて、浅香と云ふ女郎  
 に替へて、心に染まぬ遊興、酒も吞まず、床に枕も定めねば、浅香も機織手を盡して取り寄る事、内證知ら  
 ねばなり。日數經りて、宮城野の萩さへ跡無く、雪の降り初むる日、お笠と申す侍數多、彼の町に忍び  
 し中に、治介も見えければ、今日を限りと長山に知らせ、治介が定宿に手を廻して、此所の騒ぎ唄唱ふ若い  
 者們遣はし、宵より大寄、大踊、一町の女郎此處に集まる。治介は玉川と云ふ女郎と、善からぬ詰めびら  
 き、何れも立聞して憎み立つる。玉川床を蹴立てて出づる時、長山、治介が寐姿見濟まし、角彌が女が討  
 つぞと初太刀研り附くる。物蔭より權八、山伏に様變へて、飛び懸かつて刺し殺し、邊の燈火に着物投げ  
 懸け、横手の道へ立ち退く。宿より立ち騒ぎて大勢追つ駈けしに、權八豫て申し合せ、長持に取り乗り行  
 方知れず。人檢むるに、長山見えぬこと不思議、僉議しても知れ難し。其夜に四里半、山里に忍ばせける  
 に、在郷近く成りて、跡より人の足音もせず、拔刃を持ちながら來りぬ。怪しく立ち停まり、先づ長持も  
 下ろして、大事と待つ程に、十月十二日の月雪も顯はに、野邊も見え渡り、近づく男は正しく、世に亡き角  
 彌が面影、につこと笑ふて其まま消え失せぬ。草葉の嬉しく思ひ、有りし姿の見えけるやと、各袖を浸







し、やうやう彼の里に行きて、深く身隠せども、所は山姫の、間遠の衣着慣れて、帯は意の桂などにして、紅白粉差別も無く、一代白齒の中なれば、猶しも形現れける。とかくは捨つる身なればと、二十三にして髪を下ろし、峰に笹葎を引き結び、夕は松の風、朝は任せ水の音のみ、手づから拾ひ集め、栢佛萬體、一生の大願とぞ。

勤めの身は狼の切賣よりは

非寺里行燈の光を請けて、大方閑日を暮らしかねたる女郎、夏中同じ色なる高宮の衾帷子も悪戯寄りて、龍門の帯も裏表に衿け直し、紅の下結も、嫌所見えける。是れに氣を着くる人から、本大臣にてはあらず、末の女郎が、小揚者と懇意しようとも、甕近く居て臆立してやるとも、其れは宿への奉公、内證にて人は知らず、目に立つ物は、歌賣る女郎の跡より、風呂敷包三味線附送りを止めさせたし。日暮れて九匁、是程廉き物は無し。肩捻らせ、髪梳かせ、消ゆれば火入の通ひ、世は下職に生れ合はすこそ悲しけれ。人たる者の娘は未だしき時より早縁附の沙汰もするに、男も持たぬ中に脇塞く娘も有り、遊女も太夫は爪も人に切らせ、髪結ふまでも二人掛り、眉作るも人任せに、寢間の蚊帳に入るまで、引船、禿に上げさせ、腰を屈める事も無く、六七人も前後を守護し奉る。圍ひ位の女郎は寐様に茶一つ汲みて、持て来いと云はれても、身過大事と思はるるこそ可笑し。名名の身を忘れ、端女郎の分として、後の白鳥または島原懷草の形の部

取廣げて、太夫の足の大きなると書きし所を、讀みも敢へず笑ふ。美人兩足は八文七分に定まれり。九文ありとて、是れ又三分を許さず。良に四つの道具までを寸尺に合せり。只今誘る女の足は、松千代が松原踊の足元よりは、殊にさもしけれども、泥水に棒振虫あり、揚屋に紙屑籠あり、其管と思へば見尤める事も無し。むつかしきは太夫の身なり。或時覺えの弱き人、わりなきは情の道と書きしは、柏木の巻には無きと争ひ、さる太夫殿へ源氏物語を借りに遣はしけるに、其まま湖月送られて、即座に其埒も明けしに、此本を見て、さてもさても此里の太夫も末に成るかな、昔は名の有る御筆の歌書を揃へて持たぬは無し。板本遣はされて、物毎あさまに成りぬ。今時は東山の淨瑠璃會にも、嘉太夫が弟子分の者們、如何なる縁にや、稀なる御筆者の書本、大竹集にて語るぞかし。都の廣さ、碁のお對手に成りましたと云ふて歩くも有り、築山を直しましよ、人要らずに家の歪みを陸にしましよ、洗はずに衣類の襟垢を落すぞ、養子の肝入れましよ、女郎買を三日の中に粹にしましよと、自由なる事を聞く事ぞと、此口眞似を鸚鵡の吉兵衛、花崎左吉などに語りて可笑しがらする、神樂庄左衛門、黄金あらば一日にも成るべし。此前長崎の唐人様、百二十末社を集め、芝居返りの揃へ駕籠、三十七挺出口に昇き着け、兩足下ろして、百足大臣と申して、我と粹に成られたり。今も其時分に變らねども、京中に惡所銀の貸人絶えて、淋しさも自らなり。今でも四萬貫目欲しや、水薬師の門前に藏建てて、固い親に掛かり、譯の好き人には大分貸して、世の思出をさしましよと申す。其夜は八月二十日、女郎は片寄せ、神樂に十露盤置かして、太夫一年勤める入費を聞くに、月に



